JAPAN'S DECISIVE DECADE

増補改訂版

日本の進路を決めた10年

～国境を超えた平和への架け橋～

元 MRA 日本駐在代表
バズル・エントウィッスル
Basil Entwistle

藤田幸久　訳
Yukihisa Fujita

The Japan Times

すいせんの言葉

元ハーバード大学東アジア研究所長
『ジャパン・アズ・ナンバーワン』の著者
エズラ・ヴォーゲル

バズル・エントウィッスルは、第二次世界大戦後の早い時期に、日本の奇跡を主導していた経済界や政府の指導者として台頭してきた人々と接触できる特別な立場にありました。

ＭＲＡ(Moral Re-Armament 道徳再武装)の代表として、彼は戦後の日本人の道徳的な資質を重要と考えた指導者たちと特別な関係をもっていたのです。

彼は、極めて入念に、正確に、示唆に富み、感動的にその体験をまとめてくれました。

これらの偉大な指導者について遠くから読んだことのある私たちにとって、本書は極めて洗練された魅力的な歴史です。

JAPAN'S DECISIVE DECADE

改訂増補版

日本の進路を決めた10年

～国境を超えた平和への架け橋～

元 MRA 日本駐在代表
バズル・エントウィッスル
Basil Entwistle

藤田幸久　訳
Yukihisa Fujita

The Japan Times

Japan's Decisive Decade by Basil Entwistle
English edition copyright © Basil Entwistle, 1985
Japanese edition copyright © The Japan Times, Ltd., 2016
All rights reserved.
Japanese translation rights arranged with Initiatives of Change.

増補改訂版の刊行にあたって

本書を一九九〇年に出版してから二十六年が経過した。今回増補改訂版を決意した理由は三つある。

第一は、昨年の米国議会での安倍晋三首相の演説の際、日本の国会議員による演説の先例が紹介されたが、一九五〇年の栗山長次郎、北村徳太郎両議員の演説を知っている両国の外交当局者に出会ったことはなかった。本年五月のオバマ大統領の広島訪問の際、原爆記念碑の碑文「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」の作成の契機となった一九五〇年の浜井信三広島市長の欧米歴訪についても同様であった。本書に記載されたこれらの事実は、本年三月のＴＢＳ報道特集『映像発掘！「道徳再武装」の世界一周』でも紹介された。戦後日本は一九五二年のサンフランシスコ講和条約発効までは連合国軍総司令部（ＧＨＱ）の占領下にあり、他国と国交もなく、これらは外交上の記録になりづらかったかと思われる。戦後七十年の昨年、戦後史のさまざまな検証が行われたが、日本の国際社会復帰や東南アジアとの和解などの困難な闘いはあまり焦点を浴びなかった。本書は、こうした国難に党派を超えて取り組んだ指導者たちの実録であ

り、改めて世に伝えたいと感じた次第である。

第二に、サンフランシスコ講和条約に参加しなかった中国、韓国、北朝鮮、ロシアの近隣諸国との関係がいまだに波高しという現実がある。本書の主役の先人たちは、東南アジアや韓国との関係改善に多大に貢献した。今こそ最も近いこれら隣国との永続的な信頼関係構築のために、先人たちに学ぶべきだと強く、党派を超えて日本の政治関係者に訴えたい思いである。

第三は、本書の舞台となった一九五〇年代は、国家分断の回避や経済中心の復興の「進路」を決めた十年であった。他方、本書を出版した一九九〇年は、貿易摩擦やプラザ合意による円高圧力、日本企業によるアメリカの不動産買収など欧米との対立が相次ぎ、日本が冷戦終結後、政治的にも国際的な責任を課せられる「進路」を歩み始めた時期であった。

これに対し、現在は、ネットとマネーが国境を越え、サイバー戦争も新しい対立をもたらしている。日本でも、東日本大震災や原発事故により科学神話が崩れ、昨年は、憲法解釈の変更などを巡り国論が二分され、半世紀ぶりに国会周辺も騒然とした。世界全体の「秩序」が危機にさらされ、世界が「進路」を模索している時代である。こうした時代にこそ、本書の指導者たちが自己改革を行い、立場を超えて国の「進路」を決めた行動は、混迷する世界全体にとっても示唆深いと感じた次第である。

折しも、六月にイギリスが欧州連合（ＥＵ）離脱を決定した。戦後の欧州統合や冷戦後を含めて融合の道を歩んできた世界に、分断や分裂の遠心力が加速している。各国でテロやクーデターなどが相次ぐ中、七月にはバングラデシュで国際協力機構（ＪＩＣＡ）援助事業の七名の日本人

がテロで殺害された。平和国家日本の民間人すらも標的になる時代の到来である。ヘンリー・キッシンジャー元米国大統領補佐官の新著『国際秩序』の中で、トルーマン元大統領が在任中最も誇らしく思ったことは「敵国を徹底的に打ち負かして、諸国家の共同体に引き戻したことだ」と語ったとある。勝利よりは調停に貢献した、という意味である。キッシンジャーは、こうした戦後共通のルールと規範に基づき各国の協力によって形成された秩序が危機にあり、歴史の再検証と、新たな国際秩序が必要であると説く。

そのためにも、本書の一読をお勧めするものである。

今回の改訂にあたり、著者の表記をバズル・エントウィッスルと変更した。

当時著者に直接会っていた方々が使用していた表記である。他にも今日的表記に改訂した箇所も少なくない。例えば、当時片山哲氏は、唯一の社会党出身首相であったが、その後村山富市首相が誕生し、現在では唯一でなくなっている、といった例である。また、星島二郎元衆議院議長が駐日韓国大使館に返還した獅子像が複製であったことが二〇一〇年韓国政府によって確認された。複製であっても韓国の文化財を返還したという行為の価値が下がることはない（詳細は口絵参照）。

最後に、増補改訂版の出版にご協力いただいたジャパンタイムズの堤丈晴社長、中川博勝広報制作部長、吉川木綿子、石田政之の各氏に心からお礼を申し上げたい。

二〇一六年（平成二十八年）八月十七日

参議院議員　藤田　幸久

序

本書を書きあげるまでには多くの方々のお世話になった。何といってもまず特筆すべきは、私が本書でその勇敢なる行動を記録にとどめようとした日本人の登場人物の方々である。

本書に名が登場する外国人以外にも、陰に陽に助けをいただいた方々が多数ある。レン・アレン、ステファニー・アシュトン、ホープ・アイアー、ジューン・ブレア、エドワード・グールディング、ディック・ハドン夫妻、ナンシー・ジャービス、ブレンダ・マクマレン、ネリー・ミタニ、スチュワート・スミス夫妻、タプスコット・スティーブン夫妻などである。

エズラ・ボーゲル教授には資料調査でご協力をいただいた。

ケン・トウィッチェル、ギャレット・ステアリー、ジョン・ウッド夫妻、デープ・カレイなどの旧友からは貴重な励ましと助言をいただいた。

キーステン・ラーセンには幾度となくタイプ打ちをお願いした。

妻ジーン、娘ビー、息子フレッドは、波乱にみちた日本での生活を可能にし、耐え、共に楽しんでくれた。これらすべての方々に深く感謝したい。

日本語版への序

日本は、本書の舞台となった一九五〇年代以来今日までに劇的な変化を遂げた。しかしそれにもかかわらず、この国が直面した当時の状況と現在の状況との間にはあまりにも類似した点が多い。民主主義の道を新たに歩み始めていたのが一九五〇年（昭和二十五年）の日本であったが、豊かな超大国としての責任を新たに担い始めているのが今日の日本である。当時日本がどのような道を歩むのかが世界の注目であったが、今日の日本もまた同じ注目を世界から集めている。

四十年前、私は日本で民主主義の精神を職務や生活の場で実践すべく身を捧げた人々と交わり、行動を共にするという幸運な機会に恵まれた。国の繁栄と対外的な尊敬とが得られる方向に国のかじ取りをしたのがこれらの人々であった。その日本は今やその当時に勝るとも劣らない試練に直面している――それは、表面的な物質主義を超えて、平和で、公正で、安全な社会を築くために、自らの豊かさを国の内外で生かすという責任をいかに果たしていけるか、ということである。一九五〇年代のこうした人々の見識と勇気の記録が、今の世代を啓発し民主主義の力強い再生

に寄与することになればこの上なく幸せである。問題だらけの西欧、共産主義を拒んで新しい道を模索している国々、そして今だに豊かさを目標として追い求めている発展途上の国々にとって、これほど示唆に富んだものはなかろう。

一九九〇年（平成二年）

バズル・エントウィッスル

すいせんの言葉

経済団体連合会　名誉会長
国際ＭＲＡ日本協会 名誉会長
土光　敏夫

戦後四十年、日本はあの廃虚の中から立ちあがり、いまでは経済大国として世界の先進工業国とも肩を並べるにいたりました。昭和二十年代を振り返ってみると隔世の感を禁じえません。当時は一億の国民がどうやって食べていくかが最大の問題であるとともに、今では考えられないような思想の混乱があり、古いものはすべて悪い、という考えが蔓延していました。新時代の旗手として登場したデモクラシーも、その真髄が把握できず、如何に実践してゆくか見当もつかず右往左往していたものです。石坂泰三氏の言葉を借りますと、「戦後日本に紹介されたデモクラシーは、金魚鉢に消火ポンプで水をいれるような勢いで入ってきたので、みんな目を白黒させてしまった」のです。

そのような時にＭＲＡは人間社会の健全な運営になくてはならない、世界に共通な道徳基準を、日本の政治・経済・労働界の指導層に示してくれたのです。当時の「石川島重工業の社長を務めて

おりました私は、ＭＲＡの影響で社内の空気が一変したことを体験しております。

フランク・ブックマン博士の意を帯して八年間も日本に滞在して、各界の人々との交流を通して働いて下さったバズル・エントウィッスルさんの体験記が、今回出版の運びとなったことは欣快の至りです。表面には出ない戦後の思想・政治・労働・経済・国際関係の歴史を顧みる上に、大きく役立つものとしてここに推薦いたします。日本に関心を持たれる方のご一読をお勧めする次第であります。

一九八五年（昭和六十年）

日本の進路を決めた10年 ―― 目次

増補改訂版の刊行にあたって
序
日本語版への序
すいせんの言葉　土光敏夫
主な登場人物
＊
まえがき　進路を決めた10年――18
第一章　めぐりあい――21
第二章　大きく開かれた国――35
第三章　思わぬ展開――55
第四章　戦後初の大型ミッション――65
第五章　対日講和条約への橋渡し――85
第六章　活動拠点の確保――93
第七章　チーム作り――105

第八章　階級闘争を超えて――115
第九章　民主的労使関係を築いた人々――125
第十章　国政とのかかわり――137
エピソード　MRAハウスを訪れた多彩な人々――155
第十一章　二つの国際親善使節の来日――167
第十二章　アジアとの架け橋作り――181
第十三章　国民外交――195
第十四章　明日への道――211
第十五章　謙虚な心のステーツマンシップ――225
あとがき　信念の少数派――239
＊
訳者あとがき――247
戦後史関連年表――250

主な登場人物

（肩書は主に当時のもの・五十音順）

新木 栄吉　駐米大使、後に日本銀行総裁
石川 一郎　経団連初代会長
石坂 泰三　東芝社長、日本生産性本部会長、後に経団連会長
一万田 尚登　日本銀行総裁、後に鳩山一郎内閣で大蔵大臣を務める
梶井 剛　電信電話公社総裁
片岡 義信　国鉄職員局長、理事・監察局長、監査委員
片山 哲　当時（訳者注）唯一の社会党出身の首相（一九四七年（昭和二十二年）から一九四八年（昭和二十三年））、社会党委員長
加藤 勘十　マルクス主義推進グループの長老、後に衆議院議員（社会党）、労働大臣
加藤 シヅエ　石本男爵の妻を経て加藤勘十の妻、社会改革の著名な活動家、参議院議員、衆議院議員（社会党）
岸 信介　一九五七年（昭和三十二年）から六十年（昭和三十五年）まで首相を務める
北村 徳太郎　銀行家、衆議院議員（自民党）、大蔵大臣を短期間務める
木村 行蔵　国家地方警察本部警備交通課長、内閣総理大臣官房調査室長、警察大学校長
久保 等　全電通委員長、後に参議院議員（社会党）
栗山 長次郎　衆議院議員（自民党）
渋澤 敬三　日本銀行総裁、大蔵大臣（訳者挿入）
渋澤 雅英　東食英国駐在員、ＭＲＡ専従、後に渋沢栄一記念財団理事長（訳者挿入）

鈴木 栄二　大阪市警視総監
鈴木 強　全電通委員長、後に参議院議員、衆議院議員（社会党）
住友 吉左衛門　住友家当主
相馬 豊胤　医師、相馬恵胤の弟
相馬 登喜子　相馬豊胤夫人
相馬 恵胤　元子爵、相馬藩藩主、実業家
相馬 雪香　相馬恵胤夫人、尾崎行雄三女、後に難民を助ける会会長
十河 信二　国鉄総裁
土光 敏夫　石川島重工社長、東芝社長、後に経団連会長（訳者挿入）
中嶋 勝治　広島で被爆、全日本金属労連執行委員
中島 秀夫　海軍兵学校生、ＭＲＡ専従、後に鐘紡取締役（訳者挿入）
鳩山 一郎　首相（一九五四年（昭和二十九年）から一九五六年（昭和三十一年））
浜井 信三　広島市長
星島 二郎　衆議院の自民党の長老、一九五八年に衆議院議長を務める
堀内 謙介　戦前、外務次官、駐米大使を務め、終戦後は外務省研修所長として外交官の養成に当たったが後に台湾駐在大使を務める
本田 親男　一九五〇年代日本最大の新聞社であった毎日新聞社社主
三井 高維　三井家当主の弟、三井報恩会理事長
三井 英子　三井高維夫人、啓明学園理事長
柳沢 錬造　石川島重工（現・ＩＨＩ）労連委員長、全造船委員長、参議院議員（民社党）

山田　節男　　広島県選出参議院議員（社会党）、自治労全国執行委員、後に広島市長

山花　秀雄　　化学同盟委員長、衆議院議員（社会党）

吉田　茂　　首相（一九四六年（昭和二十一年）から一九四七年（昭和二十二年）および、一九四八年（昭和二十三年）から一九五四年（昭和二十九年））

日本の進路を決めた10年

まえがき　進路を決めた10年

これは初めて明かされる戦後日本の実話である。なぜ今頃になってこうした事実が語られるのであろうか？　世界中がより安く、高品質の日本製自動車、テレビ、時計などに目を見張るようになってからというもの、日本の経済的奇跡に関する書物や記事が多くちまたにあふれている。こうした記述の多くは経済的成功をその固有の文化や習慣によるものとしている。さらに日本の復興の主な特徴は単に技術や方法論や物質的、外形的、環境的なものではなく、日本独特の優れた人間関係によるものである、という見方も増えている。少なくとも大きな会社では、労働者が生産の手段としてではなく人間として扱われ、自分たちのニーズを満たしてくれるコミュニティーに属するという安心感を持って意思決定にも参加でき、自分たちの貢献の重要性が感じられる。こうしたことから、生産性が高いことが明らかにされている。

しかし、日本の復興がただ単に伝統的な生き方や働き方の延長線上で当然のごとく起こった、とするのはあまりにも安易であり、私はそうした見方はとらない。第二次大戦後、日本ほど新しい考え方に心を開いた大国はおそらくほかにはあるまい。国民は基本的選択に直面し、基本的な

意思決定をせざるをえなかったのである。

当時の日本の経済界ではマルクス主義的な階級闘争と西欧式の産業対立といった考え方が競い合っており、このどちらを選択していてもおかしくない状況にあった。しかし、第三の道が国民の一部から提示され、このいずれの道も選択せずに済んだのである。これは直面する問題に現実的に対応するという日本固有の伝統をいかんなく発揮したと同時に、単なる経済復興にとどまらず、国民生活のさまざまの分野におけるルネサンスの道であったともいえる。

一九五〇年代という将来を左右するこの時期に多くの戦後の巨人の知己を得、共に働くことができたことは、得難い体験であった。日本の誇る伝統というものが拒絶されかねない状況の中で、政府、政界、金融界、産業界、労働界、教育界の指導者たちによる素晴らしいチームワークによって、これが守られ、外部からの健全な考え方も受け入れられた。

これらの人々は、日本の過去の失敗から逃れ、当時のさまざまな落とし穴にはまらないための哲学を実践した。彼らは、国の将来の安全保障を確かにするために必要な支援を一般の国民から得ることができた。

これらの人々はまた、先の戦争で日本の軍部によって甚大な被害を被ったアジア諸国をはじめ、旧敵国との健全な関係改善に向けて先駆的な役割を果たした。海外市場の確保が産業の復興に重要であったこの時期に、こうした過去の傷や憎しみを癒すことが通商および外交上のつながりの上に不可欠のことであった。

私がこうした出来事を孫のために書き残すことを始めたところ、もっと多くの人々に読んでも

らうべきだ、と友人たちが勧めてくれた。日本を正しい方向に導いた人々の業績は現代において意義がある、というのである。ではこれらの体験から私たちは何を学ぶことができるだろうか。これは日本の文化だけに起因する、と決めつけるのは愚かである。なぜなら、これらのことは道義的精神的な資質のたまものでもあるからである。また環境や住宅、道路、下水道設備、社会保障といった国の基盤整備（インフラ）を弱めるという犠牲の上に経済的優位性を得たという事実の認識なくして、これを見習おうとすることも近視眼的なことである。

日本を正しい方向に導くために一丸となって働いた人々の精神は、現在の世界においても通用するものである。これに匹敵するような人間性の変革なくして、今日、私たちを取り巻く多くの問題に対する永続的な答えを見いだすことは難しいといえよう。

一九八五年（昭和六〇年）

第一章　めぐりあい

戦後初の海外渡航

一九四八年（昭和二十三年）六月の暑い朝、私はロサンゼルスで、港のサンペドロ・ドックに立ち、もやの中から出てくる商船三井のみすぼらしい船を見ていた。戦後初めて海外への渡航を許された日本の民間人グループ九人の出迎えにでたのである。それまでに海外渡航を許されたのはアメリカ軍の要請による数人の技術者のみであった。この一行の渡航が許可されるためには、マッカーサー将軍の連合国軍総司令部（ＧＨＱ、進駐軍）幹部との長い交渉と三十人のアメリカ下院議員の助けが必要であった。

アメリカで開催される国際会議の目的が日本にとって重要であると感じて参加をすることになった人々であった。彼らがあとにした日本は第二次世界大戦後、国土が荒廃し、都市は廃虚と化し、国民は飢えの極地にあった。誇り高い国日本も初めて味わう敗戦で、天皇の神格性、準封建的な社会への忠誠、そしてアジア帝国の夢といった古い秩序が崩れ去っていくことにうろたえていた。

マッカーサーの進駐軍は秩序を維持し、新しい民主的憲法や抜本的な社会変革を立案し、国民の生存を守った。しかし、日々の生活が少し安定するにつれて人々は破壊された価値観に取って代わる新しい価値観を渇望していた。おそらく新しい考え方や新しいやり方にこれほど心を開いた国というのは歴史上にもなかったと思われる。しかも共産主義、マルクス主義、民主主義、キリスト教、西欧的産業主義、などあまりにも多くの考え方が日本人の心に訴えようと競い合っていたのである。

この九人の一行はこうした真空状態を埋める道義的、精神的な価値を見いだしたと信じていた。参加することになっていた会議の中心テーマは社会に政治的、社会的、経済的な変革をもたらすためには個人の人格と動機にまず変化が起こらなくてはならない、ということであった。つまり、もし人が何が正しいかということを自分の生活や仕事の中で求め、それに従うならば、個人の問題や国家の問題にも答えを見いだす力が生まれる、という考え方である。

到着した一行のうちの五人はやがて日本におけるこの道義的、精神的な力の発展に大きな役割を果たすことになる人々であった。そのうちの一人堀内謙介とは、一九三五年（昭和一〇年）、私がオックスフォード大学卒業後の青二才のころ中国への旅の途上、東京で知り合っていた。著名なコラムニスト、ジョージ・スコルスキーの紹介状を頼りに私は外務省亜米利加局長を務めていた堀内と面会した。四十代後半の彼は真面目そうな温和な話し方で自己紹介し、親しい友人のジョージの友だちに会えて大変嬉しい、と挨拶した。昼食に招かれた私は、彼の質問に促されて

いつの間にか自分の人生や考え方について語っていた。それに彼が興味を示したので、私が携わっている仕事に関する書物を渡して別れた。

その翌日、私はアメリカの駐在武官のクレーン大佐と夕食を共にした。すき焼きを食べながら、私が堀内を訪ねたことを話すと彼は大変驚いた。大佐は彼と面会するためにここ二週間いろいろと手を尽くしたがうまくいかなかったと言うのである。日米間で外交的緊張が高まっており、両国政府の役人同士による正規の接触は難しくなっていたのである。

それから二か月後、漢江にいた私は、二・二六事件と呼ばれる反乱将校たちによる政府要人の暗殺とクーデター未遂が東京で起きたことを新聞で知った。将校たちは、鎮圧されるまでに大蔵大臣をはじめ政府関係者数名を殺傷、国会議事堂や官庁ビルを占拠して、より戦闘的な外交路線を求めていた。

事件後内閣改造が行われ、外務大臣の首相就任に伴い、堀内は外務次官へと昇格した。当時、最も難しくかつ危険なポストであった。彼の主な任務は外務省と軍事関係各省庁との連携役であった。軍の指導者たちは、政府の態度はアジア大陸進出に対して弱腰すぎるとしてあからさまに対立していた。彼は毎日のように若い狂信的な軍人による暗殺の危険にさらされていた。

しかし、彼の信念を強く支える出来事が家庭の中で起こっていた。私が漢江に着いて受け取った彼からの手紙には、私が与えた本に書かれてあることについてもっと知りたい、と書いてあった。その本を夫人が先に読み、それにつられて彼も精読したのである。私は東京に住むアメリカの友人を紹介したところ、この友人を介して堀内は、妻の登志子がそれまで毎日悩まされていた

夫が殺されるという恐怖から解放され、精神的に生まれ変わる経験をしたと伝えてきた。それまで彼女は仕事を辞めるよう主人に口うるさく迫っていたのが、彼を支えるようになった。彼は今までのような家庭での恐れや憤まんに足を引っ張られることなく微妙な交渉事にあたれるようになった。その年の夏、私は堀内夫妻の東京の自宅で二週間を過ごすことになった。私には、当時、外務次官が西洋人を客として自宅に迎えるということが、いかに大それたことかを知る由もなかった。日本とイギリスやアメリカとの関係は着実に悪化していた。日本は、アメリカが日本からの移民を締め出したことをいまだに根にもっていたし、イギリスに対しては日本の満州や北支侵略に対する国際連盟による非難の先鋒となったことに憤概していたのである。アジアに対する日本の帝国主義的野心を否定する両国に対する敵対感情を右翼団体は煽り立てていた。

やがて私には尾行がついているのに気がついた。堀内にこのことを話すと、彼は笑って、公安警察はすべての外国人、とくに得体の知れない外国人には目を光らせているが、心配することはない、と答えた。彼は幾度も友人を私に引き合わせたが、その中の彼の部下たちは今までにはなかった勇気と自信とが堀内にそなわったのを感じていた。正直で清廉な闘いを行う彼の周りには、それを支える核とも言うべき人々が集まりつつあった。

堀内は対外関係の安定的な維持に全力を注いだが、しょせん彼や、文民出身の閣僚には権限はなかった。翌年に中国大陸北部で膨張していた軍の力が強くなり過ぎ、ついに日本は中国との戦争に突入した。それでも、堀内に対する上司の評価は高く、まもなく駐米大使という最も困難な職務を任命された。日本政府からの強い圧力にもかかわらず、彼はアメリカ政府の役人と信頼関

係を保っていたが、これ以上東京からの指示に従うことは良心に反するという局面に至った。一九四〇年（昭和十五年）に彼は自ら本国召喚を申し入れ、外交官の職を辞し、戦時中は厳重な警察の監視の下で暮らすことを余儀なくされた。

戦後、政府は自由を復権し、各国との国交が回復される時に備えて外交団の一からの再建という課題をかかえていたが、政府は堀内に新しい外交官養成という、うってつけの仕事を与えた。

サンペドロのドックで、会議出席のために到着した一行の中に三井高維、英子夫妻を見つけた。二人とは一九三七年（昭和十二年）私が日本からイギリスに戻った直後に会ったことがある。高維は日本最大の財閥の当主三井男爵の弟で、英子は高維の従姉妹でもともと三井家の出身であるが、ほとんど外の世界と交わりのない一族の社交生活には二人とも飽き飽きしていた。彼は京都大学卒業で金融に関する本も著していたが、オックスフォード大学に学士入学し経済学を専攻していた。妻と小さな子供たちとともにアイシス川の岸に快適な家を借りたが、講義を聞くよりもゴルフ場で過ごすことの多い日々であった。彼の指導教員の一人で大学の講師兼牧師でもあったアラン・ソーンヒルは、英語上達のために高維に新約聖書を勉強するよう与えていた。やがて彼の洞察と忍耐強さは、高維を神への強い信仰へと導いた。

一九四八年（昭和二十三年）となった今、二人ともやや痩せて老けて見えたが、幾多の苦難をくぐり抜けてきたにもかかわらず強い精神力は失われていなかった。二つあった東京の屋敷が一日にして米軍機の焼夷弾で焼かれて以来彼らは堅いコンクリートで作られた蔵の中で生活してき

た。終戦前後はサツマ芋以外ほとんど食べ物もなく、子供を一人栄養失調で失っていた。外国人との交流があることから警察の監視も厳しかったが、有力な三井家の一員ということもあって逮捕されることはなかった。

もう一組の相馬恵胤夫妻とは、初めての出会いであった。恵胤は東北地方で何代も続く相馬藩の領主でかつては子爵であったが、戦後新憲法のもとで、他の貴族同様に、称号と財産の多くは剥奪されていた。彼は私と同年輩で、人好きのする、粋な男であった。妻雪香は才気煥発で「議会の父」尾崎行雄の娘である。一九一二年（明治四十五年）に東京市長を務めていた尾崎がアメリカに贈った桜の木は、今ではワシントンの観光名所の一つとなっている。衆議院の玄関ホールに立つ尾崎の胸像は、議会制民主主義の先駆者としての偉業を讃えている。しかし、改革精神に満ちた彼の人生の大半は苦難の連続であった。軍部、大財閥や封建体制全体に対する民主的な闘いは、反動分子の手によって暗殺されかけたことも何度かあった。雪香自身父親とともに家を逃れ塀をよじ登って隣の庭に身を隠したことも幾度かあった。彼女は父親の冒険好きな点を受け継いだだけでなく、ありとあらゆる機会を捉えては伝統的なものに抵抗した。オートバイを乗り回すなど当時としては前代未聞のことをやってのけた。息が詰まりそうな相馬家に嫁ぎ家族全員がお互いに傷つくことになったが、やがて彼女と夫は充実した結婚生活を送る共通の基盤を見いだすことができた。

一行が参加したロサンゼルスの国際会議はMoral Re-Armament（MRA、道徳再武装）運動の主催によって開かれた。この運動は第二次大戦の直前にアメリカ人フランク・ブックマン博士

によって、「民主主義国はナチス・ドイツの脅威に対して軍備による再武装だけではなく、道義的精神的力の復活をもってあたるべきである」という確信から生まれたものである。

一般にはＭＲＡとして知られていたその運動は人から人、そして大陸へと伝わり、ここロサンゼルスにおいて、戦後の復興問題に取り組んでいる西側の当事者と日本人が直接会える機会が与えられたのである。

冷戦が頂点に達した一九四八年（昭和二十三年）、西ヨーロッパは西ベルリン封鎖に代表されるソ連の東欧支配に緊迫していた。朝鮮半島では韓国、北朝鮮というイデオロギー的に異なる新しい国家が誕生して対立していた。こうした状況の中で日本国民の気持ちを堀内謙介は会議の中で次のように説明した。

「新憲法は民主主義という機械を私たちに与えてくれました。しかし、それを機能させる新しい精神がもっと重要であります。昨年来、民主主義の体制が崩壊していく国が次々と後を断ちません。破壊を目指す勢力が実際に世界に存在し、長年にわたって民主主義の枠組みが存在した国ですらその脅威にさらされているのです。今からこうした勢力に対する具体的な解答を持つことは日本にとって欠かせないことであり、民主主義の答えとなるイデオロギーを提供する世界的な勢力を作ることに関心を持った各国の指導者の方々とお会いするために私もこの会議に参加した次第であります。私たちがこれまでに受けた物質的援助とともに、民主主義を機能させる道義的、精神的な力を与えてくれるＭＲＡに感謝を表したいと思います」

会議が終わるとほとんどの日本人は真っすぐ帰国したが、相馬夫妻だけはＭＲＡの国際チーム

に招かれヨーロッパへ同行した。その帰途六か月ぶりで再びアメリカに立ち寄った相馬夫妻はさまざまな会議で忙しくしていた妻のジーンと私をアトランタに訪ねた。二人は今こそ絶好の機会であり、ぜひ私に日本に来て助けてほしいと強く要請した。

雪香は、「国中にＭＲＡを受け入れる気運が満ちており、国の指導者たちにも訴えるいい機会です」と説明した。

「行きたいのはやまやまですが、二歳の女の子ともう一人お腹に子を抱えたジーンを置いていくわけにはいきませんし」と私がためらっていると、

「では皆一緒に連れて来たらどうですか？　家を一軒探しましょう」

「すべてが廃虚と化した日本に今？」

「まあ今すぐでなくとも、ともかく準備させて下さい。状況もすぐ好転するでしょうから、お迎えする態勢をつくります」

私は笑って丁寧な言葉は返しておいたが、そのことについては忘れてしまった。

片山元首相欧州歴訪

翌年五月、ジーンの故郷であるケンタッキー州ルイスビルで、息子フレッドが生まれたばかりの私のもとに、ＭＲＡの創始者フランク・ブックマン博士から電報が届いた。戦後スイスのコーにオープンされたＭＲＡの国際会議場へ参加する日本の重要なゲストの皆さんに、アメリカから同行するように、との要請であった。私には妻と生まれたばかりの息子を置いて行く気はしなかっ

たが、やがて、個人的な気持ちよりも大切な使命を全うすべきだと感じるようになった。ジーンと私には、これ以降、子供たちとあるいは夫婦で離れ離れにならざるをえない難しい決断を迫られる局面が多々あったが、いつも二人で一緒に決めることにした。

ニューヨークからジュネーブへ同行したのは片山哲の一行で、最近まで首相を務め、当時は日本社会党の委員長であった。ほかに、夫人、男性の秘書、そして当時、最大の日刊紙であった毎日新聞の高橋信三編集総務と藤本勝欧米部員が同行していた。片山の外遊は日本の新聞の見出しを賑わせていた。片山は毎日新聞のライバルである朝日新聞から旅行記を寄稿することを依頼されていたので、毎日の記者たちとの間で激しいスクープ合戦が展開されることになった。これら日本人一行は、それからの二か月半余り私の同行者となり、コーの会議、ヨーロッパ、そして再びアメリカへと私が案内することになった。片山は大学の教授を務めたこともあるインテリタイプで、無愛想なくらいおとなしかった。彼の秘書が滑らかではあるがわかりにくい英語に訳した応答や発言は不平がましく聞こえることもあった。片山夫人は母性あふれる温かみのある人であった。

誰が正しいかではなく何が正しいか

片山夫妻にとってコーに到着してからは目を見張るような日々の連続であった。レマン湖を五百メートル下に臨む急斜面につき出た、千人ほど収容可能なホテルであった国際会議場、マウンテンハウスからの眺めは絶景そのものである。世界各国から政治家、銀行家、実業家、農民、労働者、主婦などあらゆる立場の人々が集まっていた。西ドイツのコンラッド・アデナウアー首

相とフランスのロベール・シューマン外相も参加し、戦後の独仏間の和解と西ヨーロッパの経済復興の基盤作りに大きな影響を及ぼした「コーの精神」に賛辞を表した。片山夫妻が滞在中にアメリカ下院の代表団が到着し、この復興に果たしたMRAの役割について下院に正式な報告をするためである。

着いた時点ではMRAについてほとんど知識のなかった日本人の一行も、人が変わることを通して国や世界のあり方を変えようとする基本的な目的を理解し始めた。会議では、利益よりも従業員への待遇を優先したというフランスやカナダの経営者の話、共産主義を離れて生産性を大きく向上させることができたというドイツやイギリスの炭鉱夫の話、そして「誰が正しいかではなく、何が正しいか」という原則で政策決定をしているという政治家などの話に耳を傾けた。

基本は個人が変わる（change）ことであり、そこに健全な家庭、企業内のチームワーク、そしてまとまった国が生まれる。MRAはいわば聖書の「山上の垂訓」をわかりやすい言葉で現代的に表現したともいえる。正式な会員制度もなく、キリスト教徒ばかりではなく他の宗教の人々や信仰のない人々にも働きかけていた。二週間後、片山一行は西ドイツのルール地方、パリ、ロンドン、アメリカ縦断の旅に出発した。一行にはほかに堀内謙介、三井高維夫妻、さらには日本政府からMRAでの一年間の研修を許可された六名の青年が加わった。戦後日本人がルール地方を訪れるのはこれが初めてのことで、敗戦と廃虚と化した街、飢えなど日本と同じ苦しみを味わった人々の歓迎ぶりに、一行は圧倒された。

デュッセルドルフ市長と閣僚一人が私たちの飛行機を迎えた。ホスト役を務めた大きな銅会社

の社長はこの地域の経営者と引き合わせてくれた。昼食会や夕食会の合い間に製鉄所、機械工場、住宅団地、それに炭鉱までも案内してくれた。急な狭い坑道には恰幅のいい片山夫妻は体をよじ曲げて入り込んだ。

ドイツの英国管轄区域にある労働組合協議会が一行をもてなし、西ドイツ労働連盟のハンス・ベックラー議長が本部で迎えてくれた。ノルトライン＝ヴェストファーレン州のカール・アーノルド知事は州政府閣僚と共に夕食会を主催した。行く先々の市長、ドイツ鉄鋼協会、ドイツ社会党本部なども一行をもてなした。どこに行っても、同じ敗戦国ということでドイツ人と日本人との間に共感が生まれた。新聞も取材に殺到し、日程のすべてを詳細に報じた。

歓迎への答礼に片山は決まった挨拶をしていた。彼はコー訪問への感謝と「人類が西欧特にドイツから与えられた二つの偉大な贈りもの――マルクス主義とキリスト教的民主主義」への讃辞を述べた。聞いている人に気持ちが伝わらない夫のスピーチに片山夫人は歯がゆそうであったが、デュースブルクの美しい市民ホールでのレセプションの席で突如立ち上がり、一言自分にも言わせて欲しい、と申し出た。彼女は心のこもった話をし、涙ぐむ場面もあったが次のようにしめくくり大喝采を浴びた。

「私はドイツと日本が政治的失敗を今後繰り返すことなく、何が正しいかのために一緒に闘うことを祈ります。私たちの失敗こそが両国の多くの都市を廃虚と化したのです。より良い世界を築く道を私たち女たちが子供たちに教えねばなりません」

一方、パリでの四日間は、多くの人々がバカンス・シーズンで不在であったこともあり比較的

静かであった。七月十四日のパリ祭の前夜に到着し、激しい雨の中でシャンゼリゼ通りのパレードやベルサイユ宮殿などを観光したあとフランス社会党の年次大会に招かれた。片山はこの席で日本社会党を社会主義インターナショナルに迎えてほしいとの願いを訴えた。重鎮の党首レオン・ブルムも片山を温かく迎えてくれたので、彼は満足であった。

続いてロンドンに向かったが、ここでのハイライトはクリストファー・メイヒュー外務次官による昼食会で、日本に関心を抱く議員や外交官が出席していた。香港、シンガポール、ビルマなどでのイギリス兵捕虜に対する日本軍の残酷な行為を許すことができず、反日感情がいまだに多く残っていたイギリスで、これだけの人物が集まったことは極めて意義あることであった。

日本におけるＭＲＡの役割は何か、とのメイヒューの問いかけに対して堀内は、共産主義に対する答えを見いだして、国の和を築くことに青年の心をとらえることが最大の貢献になるであろう、と応じた。

このあと一行はニューヨークに飛び過密スケジュールをこなしたが、最も特筆すべき出来事は国際連合での一日であった。日本がまだ国連に加盟していないにもかかわらず、国連の高官たちが丁重な歓迎をしてくれたことに片山たちは驚いた。バイロン・プライス事務総長代理が事務所で一行を迎えて挨拶したのをはじめ、太平洋戦争の英雄ニミッツ元帥や総務担当のアンドリュー・コーディエが行き届いたホスト役を務めてくれた。軍縮委員会で米ソ代表によるいつもの激しいやりとりを聞くこともできた。銀行クラブでの昼食会や証券取引所所長のはからいで取引所の見学も行った。

ワシントンでの観光や西海岸のロサンゼルス、シアトル、サンフランシスコでの在米日本人たちによる忙しいプログラムをこなして帰国した。飛行機に搭乗する際、片山は一行が受けたことのすべてに感謝を述べるとともに、これから考えるべき多くの糧が与えられたと語った。歴訪の模様は藤本、高橋、片山三氏による新聞記事を通してこの歴訪の意義や日本に対する温かい歓迎ぶりが何百万人もの国民に伝えられた。彼らはまた、欧米で会った責任ある立場の人々にインパクトを与えたＭＲＡとその考えについて日本の人々に伝えることができた。

一九五〇年（昭和二十五年）の新年早々、フランク・ブックマン博士から再び届いた電報は、ケン・トウィッチェルと共に東京に飛んで、博士が心にかけている友人たちを訪ねてほしい、とのことであった。

本名、ケナストン・トウィッチェルは、私が大学一年生の時にＭＲＡを紹介してくれたオックスフォード大学の数年先輩である。ケンは妻のマリアンと共にプリンストンにある彼女の父アレキサンダー・スミス上院議員の家に滞在していた。日本はまだマッカーサー将軍率いる進駐軍の厳重な管理下にあり査証を手に入れるのは容易ではなかったが、外交委員会委員で共和党の重鎮でもあったスミス議員の尽力で取得を早めることができた。彼は私たちに陸軍次官との会談のアポイントをとってくれ、次官のペンタゴンへの紹介によって私たちは記録的な速さで軍の許可を得ることができた。

一九五〇年（昭和二十五年）二月三日、ケンと私は羽田空港に到着した。私たちを乗せた飛行機がターミナルビルに近づくと軍事隊列が組まれバンドを演奏しているのが見えた。ヒットラー

のヨーロッパ要塞を攻撃したアメリカの英雄オマール・ブラドレイ将軍を連合国軍最高司令官マッカーサーが壮行しているところであった。日本での活動はこのマッカーサー将軍の権威のもとで行われることになった。

第二章　大きく開かれた国

荒廃した東京

ケン・トウィッチェルと私が飛行機を降りたつと外は冬の寒い土砂降りの日であった。ターミナルビルは現在のような輝く殿堂ではなく、薄汚い軍のバラックの寄せ集めのような陰気な様相であった。入国手続きを素早く済ませたあとアメリカ軍の民間人訪問者デスクで登録し、そこで帝都ホテルの一室が割り当てられた。進駐軍は日本に入国した外国人の生活必需品をすべて管理しており、外国人は指定されたホテル以外には滞在できず、日本のレストランで食事をしたり、日本の店で買い物をしたりすることは許されていなかった。

こうした規則もそれなりに理解できた。降伏からわずか四年余り、東京はまだ完全に回復していない状態にあった。ナチの電撃作戦のさなかやその後をロンドンで過ごしたり、戦後西ドイツの米占領軍に勤務した私にとって、こうした荒廃した都市も初めてではなかった。しかし廃虚は片づけられ、多くの家や事務所や工場は再建されたものの、広大な焼け野原が一面に広がり、ア

メリカによる焼夷弾攻撃のすごさを物語っていた。店では哀れなくらいに食物や消費物資が不足していることもすぐわかった。ほとんどの人が古着でしのいでいるのも一目瞭然だった。ガソリンは民間人の手には入らなかったので、街を走っているのはほとんどがアメリカ軍の車だけであり、われわれが利用したタクシーは後部に据え付けられた大きな木炭炉の動力で走っていた。

アメリカ人のわれわれがどういうふうに受け入れられるか心配でもあった。丁重な扱いは受けるであろうがどこまで本気だろうか？　私たちの考えにどれだけ耳を傾けてくれるだろうか？

しかし案ずることはなかった。当初から、外国に関する情報や日本に対する外国人の見方にオープンで、好奇心を抱き、貪欲な関心までよせる姿に驚かされた。最初の記者会見の様子はその典型であった。われわれを出迎えた堀内、三井夫妻、相馬夫妻はホテルで待ち構えている報道陣に私たちを引き合わせた。

西側の報道陣などによくある皮肉った態度はこの時もその後のインタビューでもほとんど見られなかった。翌朝の新聞には私たちが述べたことがありのままに報じられた。私の中心の話も次のように引用されていた。

「ＭＲＡは、こんな世界に住んでみたいと人が心から望むように世界をつくりかえるチャンスを一人ひとりに与えてくれる」。毎日新聞は西ドイツなどで果たしたＭＲＡの役割についてのトウィッチェルの評価を引用した。また驚いたことには、私たちが日本滞在中に日本の指導者ばかりでなくダグラス・マッカーサー将軍や他の進駐軍幹部とも会見するであろうと報じられた。

太平洋上を日本へ向かう機中でトウィッチェルと私は日本で特にどんなことに力を注ぐべきか

について話し合ってきた。日本の友人たちは、日本で影響力をもつ人々に私たちを引き合わせることになっていた。これらの指導者は社会に台頭している新しい勢力による混乱を心配していると言っていた。つまり実業家は利益のために企業倫理を放棄するように追い込まれ、若者は民主主義とは何を考え、何をしてもかまわないことと解釈しており、教師たちはマルクス主義者によって書かれた教科書を使わざるをえず、組織運営の経験者は過激派しかいない労働組合も続々と誕生し、政治家は明確な政策のないまま票の獲得のみにとらわれている、といった状況であった。そこで私たちの役目は各界の指導者に、彼らが好まない考えに対する建設的な対案を提示することにあると考えた。

私たちは進駐軍がこの国を実際に統治している唯一の権威であることも認識していた。活動の自由はすべての外国人に目を光らせているアメリカ当局との協力関係いかんである。そこで到着した翌朝、日本におけるすべての権限を持つマッカーサー将軍の副官ラリー・バンカー大佐を表敬した。彼は丁重に迎えてくれた。訪日の目的を説明し、今後誰に会うかをその都度報告することを申し入れた。彼はＧＨＱ（連合国軍総司令部）民間情報教育局（ＣＩＥ）のニュージェント大佐と連絡をとって私たちの活動を伝えるようにとのことであった。温和な人で、できるかぎりの協力を申し出てくれた。

三井夫妻、相馬夫妻、堀内の案内で訪問を開始したが、彼らは私たちが考えていた以上に指導者と近いつながりをもっているとともに、西側諸国と比べて日本の指導者層が集中しており、相互に緊密な連絡があることがわかった。

それから十日間の間に次の人々と会談した。

・吉田茂首相 ―― 当時の日本政界の重鎮。

ふるっていた権力をもじって「法王」、「帝王」と称された二人。

・「法王」、一万田尚登日本銀行総裁 ―― 資本不足の日本にあって通貨の流れを支配していた。

・「帝王」、本田親男毎日新聞社主 ―― 新聞界の皇帝とみなされていた。

・尾崎行雄 ―― 相馬雪香の父で、議会の長老。

・多くの財界指導者。

この間、毎日、朝日、読売の三大新聞、日本銀行、参議院議長によるレセプションも開かれた。三大新聞による三日連続のレセプションは、私たちの言いたいことを数千万の読者に正確かつ大々的に伝えてくれることになり、日本におけるこの上ない紹介となった。これらのレセプションには各方面の有力者も招かれており、次から次へと紹介されて誰が誰だか見分けがつかないほどであった。例えばあるレセプションの終わりに学者タイプの人が次のように発言した。

「MRAは日本や世界を核の破壊から救うために正に必要であるようにみうけられる」。通訳をしていた相馬雪香にこの人は誰かと聞くと、「日本の原子力エネルギーの第一人者仁科芳雄博士」ということであった。

日本の指導者たち

吉田首相は首相公邸で私たちを迎えた。元々外交官でもあり、西欧人に対する違和感は無かっ

た。彼は黒い上着、細縞のズボン、硬い白のウイングカラーに鼻眼鏡をかけ、ディケンズの小説から出てきたかのようであった。正統派の紳士で、保守的な政治を志向する抜け目のない礼儀正しい人であった。彼はマッカーサーと共に降伏後数年間の吹き荒れた国内情勢を安定させた。極左が労働組合の支配を強めている当時、共産主義には断固反対の立場を取り、財界やアメリカの大君主達の信頼を得ていた。この日はＭＲＡや今回の訪問の目的に関する彼の質問に答えるだけにとどまったが、人間性やそれを良くしようという考え方に関しては懐疑的であった。

一万田日銀総裁は、パッチリした目で、頬がとがり、素早く、神経質な動作をし、かん高い声の持ち主だった。ほかの日本人同様、英語はわかったが日本語で話したがった。相馬雪香は優れた通訳であり、こうした訪問のほとんどに同行した。一万田の最大の関心はいかに日本を世界と調和させるかということにあり、日本人がＭＲＡの道徳の基準を仕事にも自分の生活でも実践することが外国の尊敬を取り戻すことにつながるとの信念を強調した。彼はレセプションを催して金融界の代表を私たちに紹介した。

本田親男は精力的で不遜な印象すら与える毎日新聞の大御所で、当時の新聞界をリードしている人物だった。彼は片山哲の外国訪問に同行した記者二人に対する私たちの配慮を感謝した上で、私たちの活動を広く知らせるために協力したいと申し出た。ＭＲＡは日本にも必要だと述べたあとで、「だが、私のような悪（ワル）は変わりようはないがね」と笑いながら付け加えた。私たちを論説委員に会わせて充分時間を取ったあと、毎日の本社のある大阪と日本文化の中心京都を訪ねるよう勧めた。関西地方は産業、経済の中心であり、毎日新聞がホスト役をつとめることになった。

トウィッチェルと私は相馬雪香と彼女の父尾崎行雄を私たちのホテルへ昼食に招いた。（訳者注九十二歳の）高齢にもかかわらず彼の頭脳は依然として明断であり、活発であった。私たちがテーブルを離れると、彼は何千字もある漢字の無用論という得意の持論を展開し始めた。ローマ字も習わされる子供たちに不必要な負担をかけている、というのである。ロビーに向かって歩きながら、相当耳が遠くなっている彼は「マッカーサーは漢字を廃止する絶好の機会を逸してしまった。近視眼的な彼の大失敗だ」と響き渡る声でしゃべり始めた。ホテルの支配人がとんできて父を鎮めるよう雪香に懇願した。公衆の場で最高司令官をこきおろすというようなことは一九五〇年（昭和二十五年）には前代未聞のことであった。

私たちは当時会員数と会員の社会的影響力では世界一の支部と思われた東京ロータリークラブに招かれた。二日連続の昼食会で一流企業の社長に数多く会うことができたが、そのほとんどが終戦後トップに昇進した人たちばかりである。基幹産業の幹部は軍部や国家主義に深くかかわったとして進駐軍当局に追放されたからである。こうした新しい社長たちはトップのすぐ下に位置していた中年層がほとんどで、その後の日本の復興と発展という驚くべき「経済奇跡」を担うことになる。

三井夫妻や相馬夫妻を通して、来日当初から特別な力を持ったグループに引き合わされていたとトウィッチェルと私が実感したのはしばらく後になってからのことであった。この国の指導者たちがコンセンサスを作りあげるプロセスについては後に詳しく述べるが、吉田茂と政治家、一万田と銀行家、そして財界人のトップ同士がそれぞれクラブや小さな会合で集まっては経済や

政治の政策についての相談と立案をしていたのである。重要な話し合いと意思決定の多くが特別のレストランや芸者のいる料亭などで行われていた。例えば夕食の席で、銀行首脳と財界首脳との間で造船、繊維、化学業界の増資に関する優先事項について相談が持たれた。一方で関係大臣と官僚はこれに関する予算と法案についての相談と助言を受ける。こうしたやりとりの中から妥協がうまれ、経済発展を導いた。同じ業界の企業間には激しい競争はあったが、それは西欧の声高な自由市場とはかけ離れたものであり、カルテル、独占、価格協定を廃止させようとやっきになっていたＧＨＱも手の施しようがなかった。こうしたやり方が極めてうまくいくことに気づき、アメリカが憂慮しだしたのは二十年以上も後になってからのことであった。

外国に出ることがほとんど許されない時期に、世界の生の情報を求めるこうした人々の姿にはトウィッチェルと私も心をうたれた。新しい考えを歓迎し私たちのいうことを真剣に受け止めてくれた。この占領下の国でアメリカ人は大げさすぎるくらい特別の扱いを受けていたが、私たちはそれ以上に丁重な歓待を受けた。何か日本の恩恵ともなり、世界に欠かせない力を私たちが代表しているということで、ＶＩＰ扱いを受けていたようであった。

一方、大学生という社会のまるで違った層とも交わることができた。東京大学の横田喜三郎法学部長との出会いがそれで、最高学府とも言われ、ここの卒業生は官界、大企業、専門分野などでの就職が約束されていたが、入学試験は極めて難関であった。彼は優秀な弁護士であり、やがて最高裁判所長官に就任したが、幅広い見識と学生の将来に対する心配に強い印象を受けた。教え子たちは、国がこうむった手荒な変革に混乱しており、自らのルーツを失い何を信じていいか

わからない世代だというのである。

キャンパスの中庭を望む彼の研究室で話をしていると学生の一団が大きな赤い幕を掲げて叫んだり歌っているのが窓を通して見えた。彼らは言論の自由や学問の自由に対する「弾圧的、ファッショ的な規則」に抗議しているのだった。

「これは共産党のデモですか？　新聞によれば禁止されていると聞いていますが？」

と、私が尋ねると彼は笑って「確かに、禁止はされていますが、キャンパス内は治外法権といった長い伝統があり、警察も敢えて門の中に入ろうとはしません。専門の活動家が、たとえ罪を犯してもここに避難をすることができ、問題になっています」と言った。

横田法学部長は数日後の夜、優秀な学生を何人か集め最初の懇談の機会を作ってくれた。何人かは終戦時に海軍士官学校で訓練を受けていた人たちで、私たちが道徳の基準について話すと、そのうちの一人が口をはさんだ。

「道徳の絶対基準と民主主義とが両立するというわけですか？」

「その通りです。道徳の確固たる基盤がなくては民主主義は実際に機能することができず、法律も、国民の責任も、社会のしくみ全体が崩壊してしまいます」

「天皇崇拝や日本の神国論とともに道徳の基準は失墜してしまったと思ったのですが」

すると別の学生が発言した。「海軍では極めて厳格な道徳が教え込まれ、一日の終わりには必ず自らを反省し、至らなかった点を検証するということが課せられたものです。戦後になって道徳の基準が正しいと説いたのはあなた方が初めてで、これは素晴らしいことです」

キャンパス内の共産主義の影響をくい止めるべく反共の学生組織を結成していた彼らは、当初は、こうした行動を私たちに認めてもらい、支援してほしかったのである。しかし、後に彼らはただ狂信的に反対するのではなく、自分の生き方を正すことによって共産主義を助長させる不正を取り除く道徳的環境を作るという、より建設的な道を見いだし始めた。これら学生の何人かは私たちの親しい友人となった。

地方見聞

トウィッチェルと私は二月中旬の週末を地方で過ごし、日本社会の全く異なった一面に触れることができた。東京から北西へ約二百キロ、山の多い長野県上田市の市長などから正式な招きを受けたのであった。この地域には全国でも最も貧しい農民が多く、長野県は革命運動の発祥地としても知れわたっていた。アルプスの人里離れた村々には武力闘争を画する共産戦士が潜んでいるとされていたものである。

夕暮れせまる冬の午後、私たちの列車が駅に到着すると、上田市は革命とはまるで思いもつかないように映った。屋根は雪でおおわれ凍てつくような風がホームを吹き抜ける中、招待者の代表はホームでお辞儀をしながら出迎えてくれ、そこから車で美しい旅館に案内された。きれいに磨かれた廊下や、畳の部屋、大浴場、そして着物を着た女中さんたちがおり、玄関で靴を脱ぐと従業員一同が整列して会釈した。続いて、寝具は押し入れの中に入っているため座卓しか家具がない簡素な部屋に案内された。旅館の主人が風呂の準備ができているといってくれたが、市長と

の夕食がすぐ始まるので、戻ってから風呂を浴びると伝えた。

料理屋の宴会場では市長、市会議員、それに商工会議所の幹部などが待ち受けていて、私たちが到着するとひざまづき、頭が畳につくほどに深くおじぎをした。こちらもそれに倣って頭を下げた。私たちが頭を上げると、相手はまた頭を下げたのでこちらも再び頭を下げた。どちらがよりへり下るかを競ったわけだが、結局彼らの勝ちに終わった。取るに足らない手前どものところに素晴らしい方々にわざわざおいでいただいて、と私たちの美徳を持ち上げるような華やかな歓迎の挨拶が続いた。私はトウィッチェルのひじを突っついて、こちらにとってこそ、こうした招きがいかに光栄なことかを答礼で述べさせた。日本滞在中の五か月間にこうした公式の昼食会や夕食会が五十回近く開かれ、食前に品の良いショートスピーチをするのもだいぶ慣れてきた。

旅館に戻ると、従業員がまた玄関で待ち受けていた。セントラルヒーティングはなく、部屋の中央に四角く区切った掘りごたつの炭火があった。蒲団はこたつのやぐらの上までかけられており、凍るような気温の中でも体が温まるようになっていた。服を脱いで旅館の丹前を着て廊下を通って風呂場へと案内されたが、風呂で誰に出くわすか心配であった。小さなスイミングプールぐらいの湯気の立った大きな風呂には私たちのほかに人影は見えなかった。いわれていたように湯船に入る前に木の桶で体を流した。トウィッチェルがまず入ろうとしたが、熱くなっているお湯に爪先をいれたとたんに大きな悲鳴を上げた。大きな蛇口の水でうめ、やっと入れる程度まで温度を下げた。翌朝、三井高維と相馬雪香にこのありさまを話すと、大変なしくじりを二つやらかしていることがわかった。まず第一は、日本人客はアメリカ人が入るまで風呂に入れないと旅館の

主人から言われていたので、夜遅くまで風呂の順番を待たなければならなかった。二つ目は、日本人客が風呂に入ってみたら、無骨な外人が風呂をぬるくしすぎてしまっていたということだった。

二日間ぎっちりつまった会議や会合に参加したあと、公民館の一番大きな部屋を埋めつくした一般集会で講演した。その後質問を求めると、部屋の一番後ろにいた元気のいい青年が、もしMRAが人間性を変えることを目指すならば、大きく変わらなければならないアメリカを変えることが大切ではないか、と質問してきた。私はそれを率直に受け止め、「確かに他の国と同様変わるべき点が多くあり、アメリカ人の中にも、自分が変わることによってアメリカを変えようとしている人が多数いる。しかし一つの国に新しい道徳的環境が生まれるだけでは充分ではない。さまざまな苦労を体験した日本ならばこそ私たち高慢なアメリカ人が変わるべき点を気づかせてくれることができるので、ぜひ助けていただきたい」と答えた。あとでその青年が語りかけてきた。

中嶋勝治といい、原爆が投下されたとき広島におり、数か月間瀕死の状態にあった。彼の健康はその後も死の灰に触れた影響をこうむり、病にある間に、父が栄養失調で死去したとの報が届いた。共産党の友人が、彼の中に積み重なった恨みをあおり、企業のボスたちと資本主義国こそが世界の諸問題の元凶であると彼を信じ込ませていた。結婚し幼い子の父となっていた彼にはもともと絵の才能があったが、成り行き上機械工として働いていた。このとき、彼は左翼の支配が強かった全日本金属労連の執行委員をしていた。今聞いたMRAに何かひかれるものを感じ、またアメリカ人に初めて接したということもあって、話をするうちに敵対心の一部もなくなり、別れ際には次の上京の際に訪ねてくることを約束していた。

翌朝、東京で、アメリカ人に対して強い感情を抱く理由のある一人の男の訪問を受けた。広島市長の浜井信三で、広島県選出参議院議員で前年ワシントンで私たちが面倒を見た山田節男に伴われていた。市長は若作りの長身で笑顔を見せていたが、十万人以上が原爆で死亡した広島市の再建には問題が山積していると語った。彼は山田からMRAの話を聞き、MRAは市民にとって必要で市民もそれに応えると思われるので、ぜひ広島を訪問してほしいとトウィッチェルと私に要請した。山田や県知事や市民の代表もこの招待を支持し、一か月後に訪問することが決まった。

その後山田は自らが設けた昼食会に私たちを招き参議院副議長、労働次官、それに加盟組合員数を合計すると三百五十万人にも及ぶ穏健な十の労働組合の指導者に引き合わせた。その週は各界で力をもつ指導者への訪問に明け暮れた。

ある日トウィッチェルと私は東京芝浦電気（現・東芝）で終日を過ごした。まず主力工場を見学した後で会社幹部と夕食を共にし、引き続き懇談した。こうして私たちは産業問題の根幹に触れることになった。この会社は二万人以上の従業員を擁し、あらゆる種類の重電機器を生産していた。他の基幹産業の発展に戦略的な位置を占めたために、一九四〇年代末には共産党の活動のターゲットとなっていた。戦後結成された労働組合は共産党員の支配するところとなり、三年間にわたった遅延行為、座り込み、ストライキといった戦術は、暴力的闘争も加わり、生産の機能をずたずたにし、倒産寸前にまで追い込まれた。結局、政府と進駐軍が介入し共産党の組合幹部を追い出すことができた。私たちが訪れたときには、いまだに労使間に大きな摩擦が存在していた。他の基幹産業でも状況は同じで、マルクス主義者の支配する組合の分裂活動と経営側による

抑圧との間にはコンセンサスという慣行からはほど遠いものがあった。

こうした暴力沙汰の真っただ中に東芝の社長になった石坂泰三は組合の強硬派に毅然たる態度で臨み、この力強い経営のもとで東芝は上向きを始めた。東芝に来る前は保険業界の切れ者としてならし、皇居の正面に位置する第一生命保険会社の本社はマッカーサー将軍の連合国軍総司令部として接収されていた。石坂はその晩行き届いたもてなしをしてくれ、他の重役と共に私たちの活動についていろいろと尋ねた。特に産業におけるチームワーク作りについての話に関心を示した。その週末に大阪の招待委員会の代表が訪ねてきた。知事、市長、市民の代表が私たちを五日間大阪市に招きたいほか、大阪周辺の県知事や京都と神戸の両市長が都合二週間にわたる訪問を企画したい、とのことであった。関西は京都や奈良のような文化の中心地や港湾都市神戸のほか大阪およびその周辺が産業都市として賑わっていた。大阪での挨拶は通常「おはようございます」ではなく「もうかりまっか」という的を射た言い回しをするくらいである。トウィッチェルと私は快くこの招きを受けた。

大阪へ行くまでの十日間も各界の人々との面会、食事、会合、レセプションなどが続いた。最も強烈な印象を受けたのは、最大の経営者団体である経団連の石川一郎会長で、昼食会に引き続いて財界指導者との会合を設けてくれた。私たちはまた報道界に重要な影響を持つ二人の人物を訪ねた。ＮＨＫラジオの古垣鉄郎（当時はまだテレビはなかった）と英字新聞ニッポン・タイムス（訳者注　現ジャパンタイムズ）社長の東ヶ崎潔である。二人ともＭＲＡを一般に伝える手助けをしたいと申しでた。

国民の尊敬を集めておられた秩父宮殿下御夫妻訪問も忘れられない思い出である。殿下は、昭和天皇の弟でスポーツ愛好家としてまたオリンピックの支援者として国際的に知られ進取の精神に富んだ方である。妃殿下は民間の出身で皇族の中でも極めて優雅でかつ社交的な方であった。お二人は戦後、富士山のふもと御殿場の山荘で暮らしておられた。殿下は結核に侵されており、私たちがお訪ねした後まもなく他界された。ご夫妻は温かく迎えてくださり、簡単な昼食をしながら世界の動きやMRA、そして私たちの日本での活動などについていろいろと尋ねられた。

列車が京都駅に着くと隣の滋賀県差し回しの公用車に迎えられ、山道を通って琵琶湖のほとりの大津に向かった。仏教の伝統が強い保守的な地方都市であり、招待者の服部岩吉知事は正にその過去の権化であった。ほとんどの男性は洋式のスーツを着る時代に彼だけは着物を着ていた。その夜は豪華な夕食のもてなしを受けたあと県の幹部や有力者と懇談した。翌朝は比叡山山頂の寺を訪れ、数世紀の歴史を遡ることができた。

四時間にわたって天台宗の管長とその弟子たちと過ごした。この宗派は厳格な規律をもっており、「論・湿・寒・貧」という戒律に従っていた。現代社会においては決して人気のある教えではなかった。MRAの基本的な哲学について詳しく説明すると、管長はわれわれの健闘を祈ってくれた。

大阪での五日間は昼食会、夕食会、講演と多忙を極めた。ニューヨークと激しく競うシカゴに匹敵するような活気を直ちに感じることができた。しかも日本第二の都市大阪はシカゴよりも少し激しく競っているかのように感じられた。ホスト役を務めた赤間文三知事は実務的で、精力的

なこの地域の権化のようであり、ほかにもダイナミックな人材に恵まれていた。毎日新聞と朝日新聞、日本銀行大阪支店、大阪商工会議所、関経連と市長および知事によるレセプションがそれぞれ開催された。教育委員会主催による大阪大学での講演会やロータリークラブでの昼食会で講演した後、大阪商工会議所杉道助会頭による財界指導者との会議で総仕上げをした。

大阪市警の鈴木栄二警視総監の計らいで私たちは百六十人の警察幹部に講演した。この恰幅のいい穏やかな気質の総監は警察関係者の間で最も有名で切れ者として知られていた。一九四〇年代後半の共産系による暴動や過激デモに対する断固とした対応が全国から注目を浴びていた。大阪にはびこるやくざや闇市の一掃も彼の名声を高めた。

講堂に入ると誰かが号令を発し、全員が起立し総監による私たちの紹介を受けた。日本の会合はたいてい堅苦しいので、しばしば冗談で意表をついてそうした雰囲気を和らげようとしたが、この時ばかりは骨が折れた。三井高維の息子高順が同行していたが、彼は金持ちの快適な生活を享受しながら育った好青年であった。終戦後ご多分にもれず三井家も窮乏生活を強いられた際に高順は闇市活動で成功していた。しかし両親が道徳に従った生き方を貫いたのに打たれて彼もそれらを清算していた。彼がこうした珍しい経験とそれを変えたチェンジについて話し始めると彼は聴衆の心を掴んだ。続いて父の高維が登壇して家族を次のように表現した。「私は典型的なビジネスマンでココナッツのようです。わかりますか？　外見はとても硬そうに見えても内面はとても軟弱です。家内は典型的な日本の主婦で桃のようです。外面は美しく柔らかですが内面はとても頑固です。娘は栗で外面はとげが多く内面はとても固いのです。（以下は、訳者が三井氏か

ら聞いたスピーチの続き）しかも熱するとすぐに爆発してしまいます。私の婿はバナナで外も内も軟弱です。いつもつかみどころがなくて決して真っすぐになることがありません。そんな私たちではありますが、皆が変わればとてもおいしいフルーツサラダを作ることができます」ここまでくると警察官たちも吹き出し、うなずきながら、リラックスしてきた。

被爆都市広島訪問

京都は戦争中、爆撃と戦火を免れた唯一の大都市であった。日本軍は兵士や軍需工場を配備しなかったために、暗黙の了解のもとに寺社や庭園は損われずに済んだ。私たちは全国に数百万人の信者を持つ浄土真宗の本山東本願寺で大谷光暢法王とその妻で皇后陛下の妹にあたる大谷智子夫人とに迎えられた。二人はMRAや私たちに対する日本での反応について多くの質問をしたが、比叡山訪問には特に関心を寄せた。仏教界を代表する両宗派の間には数世紀にもわたる対立があったことを私たちは知ったが、ここでは比叡山の僧侶たちは他の寺院を略奪する野蛮な盗賊のごとき僧侶と見られていたのである。

続いて山田節男が合流し、列車で美しい瀬戸内海沿いに一緒に広島に向かった。駅では多くの新聞記者が待ち受けており、その場で記者会見が行われ、予想されたような質問が浴びせかけられた。

「どうして広島に来たのですか？」

「原爆投下についてどう思われますか？」

「日本に対する印象は？」

トウィッチェルと私は、原爆が広島を焼け野原にしたあの八月の朝からわずか五年以内に広島を訪れることへの不安を度々話し合っていた。アメリカ人が原爆の生存者からどのように迎えられるのであろうか？

新聞記者たちも私たちに特別の配慮をしてくれた。私たちは山田と共に宮島海岸を見下ろす彼の友人宅に車で向かった。ほかにふさわしい宿泊場所がなかったからである。翌朝浜井市長が訪ねてきて温かく歓迎してくれた。四日間彼と行動を共にするうちに彼の広島再建にかけるひたむきな打ち込み方に感銘を受けた。彼は再建のために与えられたアメリカからの物質援助に深い感謝を表した。今では住宅や主要な建物の三分の二が完成したとのことである。彼の案内でそうした建設中の建物を見ることができた。ほとんどがきゃしゃに映り、市全体が、急いで建てられた西欧の鉱山町の面影を思い起こさせた。

楠瀬常猪知事は豊かな実業家を思わせるような温厚な人であった。県庁をあとにして商工会議所主催の昼食会、そして銀行協会へと向かった。次いで原爆が炸裂した建物から間近いホールで一般集会が催された。ドームと壁の残骸はその悲劇の恐ろしい記憶として保存されていた。トウィッチェルと私は「戦争など起こりえないように世界を作り直すという目的のために自分たちは命をかけていること。人も国も対立のもとになる欲望や憎しみや物質主義から自由になって過去と違った生き方をすることが平和をもたらすこと。他の国と同様アメリカが変わることが必要であり、戦争の代償の大きさを知っている日本人、特に広島市民が世界を作り直すために果たす役割はと

りわけ大きいこと」を述べた。憎しみをうかがわせることはなく多くの質問が寄せられたが、MRAについてもっと知りたいというのが多く、どうしたら参加できるかとたずねる人もあった。三時間経ったところで山田は閉会を宣したが、聴衆の多くが残って私たちとの話が続いた。私たちの気持ちを謙虚にさせてくれた感動的な体験であった。

私たちは親を原爆で失った子供たちが収容されている五日市孤児院を訪ねた。ひどく焼けただれたり、身障者になった子供たちもいた。女の子たちが花のブーケをプレゼントし歌を歌ってくれた。放射線被害の長期的影響を研究するために設立された原爆傷害調査委員会（ABCC）というアメリカの団体の本部も視察した。アメリカに対する特に強い批判を直接耳にしたのはこのABCCに関するものであった。この機関は、死の灰の被害に今だに苦しむ何千人という人々に長期的な治療を施すためではなく、ただ研究活動だけのために設立されたことに日本人が慣概している、というもっともな話であった。

広島からはさらに西の九州に向かった。まず始めに、ワシントンで歓待したことのある北村徳太郎議員の地元の佐世保海軍基地を訪れ彼の出迎えを受けた。次いで彼と共にもう一つの被爆地長崎へと足を延ばした。長崎は鎖国時代数世紀にわたってオランダなどの商人に交易が許された唯一の場所で日本で最も国際的な都市であった。十六世紀末カトリックの宣教師があまりに狂信的であるとして攻撃され、日本人信者多数と共に虐殺された。原爆の爆破を免れた大浦天主堂はその記念碑である。知事、市長、市会議長、県会議長や周辺市町村の代表が夕食会を催してくれた。

こうしたノンストップの強行軍から息抜きのために北村は日本の名勝の一つ雲仙国立公園に案

内してくれた。火山の湯が丘から吹き出し、谷から湯気がのぼり温泉がパイプで湯治場に注がれていた。

そこで二日間過ごした後、車と船で三井鉱山の本拠地大牟田に向かった。三井高維が同行してくれたので、この日本最大の石炭会社幹部による破格のもてなしを受けた。三井三池鉱山に案内され会社幹部や炭鉱労組幹部と会談した。労働条件や生活条件は日本の鉱山産業の並み以上とはいえ西欧の基準から比べればひどいものであった。第二次大戦以前から既にストライキや争議が起こっていたほどで、労働組合が合法化された戦後はマルクス主義洗脳教育の主要目標になっていた。組合幹部との活発なやり取りがあったが、中には私たちを資本家の手先だ、と責め立てる者もいた。組合の若き委員長阿具根登は批判役の先鋒であったが、食事を通してもっと建設的な話に転ずることができた。世界を作り直すには資本家も共産主義者も両方とも変わらなければならないという点で意見の一致をみることができた。

第三章　思わぬ展開

マッカーサー将軍の賛同

東京に戻る三十時間の列車の中で、私たちはそれまでの十週間を振り返った。田園風景は桜の花がまぶしいくらいに映え、私たちの気持ちも春の訪れにぴったりだった。日本社会そのものに放り出されてしまった私たちは、さまざまな人々との出会い、日本人のエネルギー、情熱、反応などに眩惑されたままであった。自己反省の気持ちと国の将来に不安を抱きつつも、日本人は次第に元気を取り戻し、自らの手で自らが望む国の方向づけを決めようとしている姿勢が見受けられた。アメリカの寛大な物資援助や占領下の大胆な改革に感謝しながらも、外国に頼りすぎることへの反感やアメリカの軍人やビジネスマンのふるまいに対する批判も出始めていた。私たちは日本が将来世界で役割を果たすようになり、多くの日本人の望む道徳基準が必ず回復されるという確信を伝えるとともに、物質主義のはびこるアメリカが変わる必要を素直に認めた。自分の生き方を変えることによって国を作り変えることに役割を果たすことができるという呼びかけに、

あらゆる分野の人々が反応を示してくれた。

戦時中から外界との接触を絶っていた日本人は、会う人の誰もが世界の様子に熱心な興味を示した。外国の人々の生活ぶりを知って、そこから学びたいと皆が感じ、海外に旅行して自分の目で見てみたいという当時にとっては不可能な夢に憧れている人々もあった。トウィッチェルと私は関西旅行中に、前年に片山夫妻が経験したように、各界の代表者による使節団を編成してコーの夏の会議に送り、そのあと何か国かを訪問する、という考えが浮かんだ。

私たちは、すでに国の運営に影響力を持つ人たちにめぐりあっていたが、その中から、日常の激務を離れてコーでの世界に触れることによって、日本の道義的、精神的方向づけを共に担う人々が必ずや現れると信じたからである。大阪の財界指導者との会議でこの案を披露したところ熱狂的な反応を受けたのには全く驚いた。東京に戻った私たちは、知らぬまに虎の尾をつかみ思わぬ展開をみたことに気がついた。大阪、神戸、京都、広島、長崎などの市長や知事などの有力者たちからはこの使節に加えてほしいと懇請される一方で、官僚機構の複雑にからんだ規則にぶつかるはめになった。計画の概要は、約六十人の代表を選んでジュネーブ行きのチャーター機で六月中旬にコーに到着し、二週間滞在したあと西ドイツ、パリ、ロンドン、そしてアメリカを縦断するというものである。私たちは各国のMRAの友人たちが犠牲を払って旅費や滞在費をいくらか負担してくれるだろうという前提で、この世界一周の一人当たりの旅行経費を最低二千ドル（訳者注　一ドル＝三百六十円）と見積もった。

日本政府や進駐軍や航空会社の当局者にアプローチを開始すると、ただ仰天して信じ難いとい

う顔をするばかりだった。軍情報部のチェック、ビザの取得、外貨交換許可などのすべてをたった二か月で済ませろといわれても、その間に条件の整ったせいぜい一人分の手続きで精一杯で、まして六十人などはとても――というのである。専門家たちも首を横に振って、今の私たちの立場でなくてよかった、と述べるだけである。

微妙な問題は、殺到する申し込み者の中からどうやって最も相応（ふさわ）しい人選をするかということであった。帝都ホテルの私たちの小さな部屋には、ＭＲＡに傾倒していると自称する新旧多くの知人たちが訪ねてきた。一万田総裁もこの計画に熱心であったので、彼にも政府、経済界、労働界の友人たちと共に人選を手伝ってもらうことにした。一万田は財界指導者と相談して最も相応しい人を推薦するとともに、自ら資金調達のできない労働組合指導者の資金援助にも協力した。私たちは北村と山田を通して衆参両院議長とも会談し、各党から相応しい代表を選んでもらうよう依頼した。大蔵省や労働省の幹部や進駐軍の役人とはさまざまな手続きについても相談した。また限られたチャーター便の中から最も条件の良いものを航空会社から探した。

数日後、私たちはこの計画の内容や重要性をより明確に分析し、この成否の鍵はマッカーサー将軍のスタッフの全面的な協力にあることを認識した。煩雑な調査と書類を取り扱うのはこの人々であり、しかも航空会社が要求する円の米ドルへの交換を許可できるのは進駐軍なのであった。日本での私たちの活動報告をニュージェント大佐に送っていたので、出国と外貨交換の許可という重要な問題について相談してみた。彼は、この旅を許可できるのはマッカーサー将軍ただ一人なので、直ちに彼に直接アプローチすべきであると述べた。数日後、大佐は電話で、将軍との面

会の約束がとれたことを伝えるとともに、将軍の質問から推察して、ニュージェント大佐を通して送っていたレポートに目を通していたことは間違いない、と教えてくれた。彼は将軍との会見の前に秘書のバンカー大佐にまず会って概要を説明するようにと述べ、成功を祈ってくれた。

バンカーは親切で、実務的な男であった。マッカーサーは私たちの活動を充分承知していると述べたあとで将軍との面会の心得を聞かせてくれた。将軍はまず面会者に長々と話すのが通例で、聞き終わってから話し出すのが得策であるということだった。面会時間は三十分で、その前に終わりを告げられない限り、三十分で席を立つこと。最も気をつけることは、円ドル交換については決して触れないこと。これは不可能なことであり、このことについては話したくない、ということである。まるで王様に拝謁する準備をされているような気がしたが、考えてみるとそのとおりであった。連合国軍最高司令官ダクラス・マッカーサーはまさに日本で最大の権力をもった人であったのである。

ニッポン・タイムスの東ヶ崎社主とスタッフが私たちを昼食に招いてくれたが、これがこの新聞を丹念に読むマッカーサーにとってこの上ない前奏曲となった。彼に会うその日の朝、ニッポン・タイムスは日本とMRAとの関係について次のような論説を掲載したのであった。

MRA日本に

「世界的運動MRAが来日し、日本人が学んでいるとされる民主主義を実際に実践できるチャンスを提供しようとしている。これまでは口先だけであり過ぎた民主主義を国民が実行に移すと

き、民主主義は他の国と同じように、日本にとってもより大きな力となりうるだろう。

ＭＲＡは最も単純な方式で働く。個人がその基盤であり、あらゆる立場、あらゆる国の人々を対象とする。個人が日々の生活を正直、純潔、無私、愛という基準で検証することから始まる。その精神的な再生が周囲の人々に影響し、そこから次々と他の人へと伝わり国全体をも動かす。

ＭＲＡの目的は融和と平和に基づいた新しい世界を築くということである。人間性は変わらないので戦争は不可避であるという理論のアンチテーゼである。ＭＲＡは人間性は変わることができ、個人が変わることによって家族が、社会が、そして国が変わることを示そうとしている。

従ってＭＲＡは世界と同様に日本にも現実的な意味を持つ。ＭＲＡは、好戦的な国民という過去のイメージを自ら変える道を示すとともに、日本人が精神的な目覚めを体験することによって過去の芳しくない評判を克服したということを、行動で示す絶好の機会を提供している。

もし日本が隣国に対する過去の過ちを正直に悔い改め、世界平和のために自らを捨てて一生懸命努力していることを示すことができれば、いまだに日本に対して抱かれている不信や疑いは半ば晴らされたといえるであろう。日本の行動のさまざまな分野にＭＲＡが浸透することは、占領当局の賢明な後押しのもとでこの国が果たしてきた大転換の完成を意味することになろう」

戦後の日本では、ダグラス・マッカーサーは等身大以上に大きな伝説的存在（レジェンド）になっており、日本人の目に父親のように映る昭和天皇とも肩を並べるほどであった。アメリカ軍による残酷な復讐の可能性を恐れていた日本人は、マッカーサー指揮の下での軍の規律と公平な

ふるまいに驚いていた。政治犯の釈放、労働組合の合法化、民主的組織の復活、農地改革、普通選挙などの憲法改正を、国民の大多数が受け入れたが、日本人は最高司令官がその起草者であると思っていた。

将軍は厳格で勇敢な兵士のイメージと温和なステーツマンのイメージとの両方を兼ね備えていた。カーキ色のオープンシャッとコーン・パイプが彼のまじめな民主的ポーズのシンボルのようになっていた。毎日四回同じ時間に彼は洗練され、見事に教練された儀杖兵の敬礼を受けて司令部の入口を出入りした。ロンドンのバッキンガム宮殿の儀仗兵の交替時のように多くの見物人が集まった。

トウィッチェルと私が彼の執務室に案内されるとマッカーサーは温かく私たちを迎えてくれた。長身で端正な顔立ち、わし鼻など全く写真の通りであった。固く握手を交わしたあと肘掛椅子に案内しあの有名なパイプに火を付けたあとは、秘書が予想したとはまるで違った形ですべてが進行した。彼は深く腰かけて、「日本での滞在について聞かせてください。そして、この国についてどんな結論を得ましたか?」とたずねてきた。わずか十週間の期間なので、日本についての権威とは思わない、と答えると彼は笑って、「アメリカ人は大体十日間ぐらいでその国を知りつくしたと思うものだ」と語った。日本での経験を述べたあと、日本のトップの使節を欧米に送るという提案に対する国内の反響を伝えた。

「そのことについては聞いているが、選ばれた人々に欧米の一番良いところを見てもらおうというのは素晴らしいアイデアだと思います。ドルの確保で難儀をしているとうかがいました。円

のドルへの交換について調べました。何とか助けたいと思いましたが、為替管理を厳しくせざるをえないため、申し訳ありませんが例外を設ける訳にはいきません」と答え、続いて私たちの財政状況をたずねた。数千人の個人の犠牲による浄財で賄っている、と答えると、どうしてロックフェラーやフォードやカーネギーの支援を受けないのかを知りたがった。実は彼自身もいくつかのプロジェクトにこうしたグループから資金を得ようとしたが、うまくいかなかったと笑った。

これまでに会った人々のことを述べると、普通では考えられない広範な人々とコンタクトができたとの評価をしてくれた。そして、「あなた方の活動の基本的な考え方に心から賛同します」とつけ加えた。さらに彼は知識の進歩に人格が伴っていないと述べ、良い指導者が必要だが、どこの国でも人を育てることが難しいと語った。

「特にアメリカでは、人格攻撃を飯の種にしている新聞の論説委員たちのおかげで、一層難しい。連中は先ず人の自信を傷つけ、続いて彼に対する周囲の信頼を失わせようとする」

終わりに彼は、中国本土の共産側の勝利による東アジアへの脅威について触れた。

「台湾は最重要課題です。行く予定はないですか？　ぜひ行くべきだと思うが」

実は何応欽将軍や呉知事その他の招きで翌朝十二日間の予定で台湾を訪れる予定だと伝えると、蔣介石総統夫妻にくれぐれもよろしくとのことであった。四十分間の会見で席を辞したが、彼が責任を感じているこの地域の将来について深く心配している姿に感動した。よろよろと立ち上がり資源と将来に向けて苦闘しているこの国が、マッカーサーの下で、占領当局の提供する安全保障、物資援助、民主主義の固い基盤という恩恵を受けられることは、極めて恵まれていると感じた。

台湾で過ごした十二日間は有意義ではあったが、日本での動きに対する直接的な成果はなかった。初めは元首相で参謀長であった何応欽将軍の、続いて呉知事の家の客となり、あらゆる方面の人々に引き合わされた。蔣介石総統夫妻も台北郊外の邸宅に昼食に招いてくれた。話題の中心は中国の共産化に伴う台湾の危機とトルーマン政権が否定しているアメリカによる緊急軍事援助の必要性についてであった。このほか張群首相や他の閣僚、孫立人陸軍司令官など軍指導者とも面会した。司令官は私たちに将軍の訓練教室での講演を依頼し、その後陸、海、空軍の施設も視察した。

夢の企画

トウィッチェルとともに五月初めに東京に戻ると、知事、市長、国会議員、実業家などが代わるがわる押しかけてきた。皆、円の大きな札束を抱えた秘書を伴っていた。旅行に必要な二千ドルに相当する金額である。誰がコーに行くかでもめている政党もあるという噂まで耳に入った。そこで吉田首相と会談しこの計画について報告するとともに協力を要請した。彼はヨーロッパに使節を派遣するという私たちの努力をたたえ、候補として私たちにアプローチしていた栗山長次郎、福田篤泰両議員を自分の党から選ぶことを了承した。円からドルへの為替交換の問題も取り上げたが彼は同情は示してくれたものの、マッカーサーが認可しないのであればどうにもならないと述べた。それでも彼は内閣レベルで圧力をかけられるよう動いた結果、内閣はマッカーサーに二万ドル相当の円の交換許可を要請したが、高いレベルでの議論のはてに却下されてしまった。

結局、ワシントン在住のMRAの友人ジャック・イリー夫妻の寄付で、出発の四日前に必要なドルを確保することができた。一方、トップからの指示もあって外務省と進駐軍の職員たちは不眠不休の働きで参加者全員の安全チェックと旅券の準備を整えた。

直前になって、かつて上田市で会った労働組合の闘士中嶋勝治が上京してきた。彼の心の中に何か力強いものが動いているのが感じられた。話によると、同じ町の共産党の同僚が結婚生活がうまくいかず離婚を決意したのを中嶋夫妻が知り、相談に乗ったおかげでもとのさやに収まったとのことだ。そして政治活動が結婚生活を危険に陥れていることを感じて共産党を離党したとのことであった。彼の旅費も寄付で賄えることを伝えると、中嶋は招きに応じて一行に加わることになった。

出発の前日にあたる六月十二日はたまたま私の三十九歳の誕生日であったが、トウィッチェルと私は吉田首相から昼食に招かれた。閣僚数人と訪問団に加わる長老たちも同席した。食事の終わりに総理が立って挨拶し、この使節がもつ特別の意義について次のように語った。

「一八七〇年（明治三年）に西欧を訪れた日本の代表がその後の日本の歴史を変えました。今回の日本の代表も帰国後新しい歴史のページを開くことになると確信いたします」

この前世紀の使節は明治天皇の命によって産業化の秘訣（ひけつ）を学びにいったものであり、その結果、日本が近代的な産業と経済に目を開き十九世紀にそれを推進することとなったのである。

その夜遅く、参加者は羽田空港に集結したが、見送りに訪れた家族や友人たちの数は代表団をはるかに超えていた。一行六十人の中には全国的に名の知られた人々も含む七人の知事、すべて

の主要政党の幹部の国会議員、産業、金融、労働各界の代表、広島、長崎を含む四市の市長が含まれていた。一行には七人の夫人が加わったが、仕事に夫人が同行するなどとは、当時の日本では前代未聞のことであった。一行には頼りがいのある三井夫妻と相馬夫妻、秘書兼通訳として同行し後に長年MRAの活動に献身した木村利根子、アメリカ大使館から休暇を取った名通訳の西山千、ほかに通訳並びに助手として同行する数人の青年が含まれていた。

当時の日本は階級的に分断されており、政治的、経済的対立などを超えて社会のこれだけ広範な立場の人々が一緒に集うということは前代未聞のことだった。出発にあたっての私たちのもう一つの気がかりは、第二次大戦の降伏からわずか五年も経過していないという点であった。講和条約はまだ調印されておらず、これから訪問する国々にとって日本は正式には敵国であった。日本軍による苦い傷や憎しみはこれから会う人々の心のなかにも生々しく残っているのである。

チャーターしたフィリピン航空の最初の寄港地はマニラで、そこからアジアを横断する前に給油を受けることになっていた。日本占領下での残虐行為のために戦後、フィリピンに入国を認められた日本人は一人もいなかった。航空会社の職員は、機体整備の間もラウンジから一歩も出ぬよう強く要請した。それに従わなければ、航空会社は「不幸な事態」に責任を負いかねると警告した。

DC六型機が滑走路にごう音を残し、月の光に照らされた東京湾上に昇るころ、トウィッチェルと私はこの冒険を可能ならしめた人智を超えた奇跡に驚嘆する一方で、なんと向こう見ずなことをしたかと今更ながら足元が震え、ひたすらこの使節の目的が全うされることを願い神に祈った。

第四章　戦後初の大型ミッション

ブックマン博士の出迎え

飛行機は六月の朝霧のマニラ空港に着陸した。ターミナルビルに入る私たちを疑い深く見つめるフィリピン人の姿が見えた。地上にいる三時間の間、トウィッチェルと私は日本人がはぐれないように、まるで番犬のように目を光らせていた。写真撮影に熱心な人が多く、絶好の光景が見つかると夢中になって外に飛び出してしまった。中にはマイペースで好き勝手に動く人もいた。このときから数週間にわたって、はぐれた人はいないかと頭数を数える機会が何百回と起こった。

カルカッタ、カラチ、テルアビブ、ローマで給油を繰り返した後、DC六型機は翌日ジュネーブ空港に到着した。消耗しきった一行は貸し切りバスに乗りこみ、旅の最終行程についた。バスはレマン湖北岸の古い町や村を通り夕日に赤く輝くモンブランもわずかばかり眺めることができた。ローン狭谷の上には劇的なダン・ド・ミディ連峰の威容が突き出ていた。

モントルーで湖に別れを告げ、岩肌のロシェ・デ・ネエ山の頂きへと向かう中腹にあるコー（Caux）

に向けて急な九十九折りの道を登り始めた。バスが最後のヘアピンカーブをいくつか曲がるころにはマウンテンハウス（Mountain House）の塔やバルコニーがぼんやりと現れてきた。うとうとしていた多くの乗客も目を覚まし、その威容に歓声がわいた。バスの行列が建物の横を曲がると、長い壁と正面玄関に並ぶ民族衣装を着た多くの人々を含む数百人が手を振り歓声をあげた。フランク・ブックマン博士は日本人のために最大限にできる限りの歓迎を準備したのであった。各国の代表と共に博士は大きな円形ロビーのドアで待ち受け、紹介された一行の一人ひとりと挨拶を交わした。

この大歓迎と滞在中の友好的な雰囲気に包まれ、外国人との交わりへの期待の一方、日本に対する反応に不安を抱いてきた一行はただただ驚くばかりであった。労働組合指導者の一人、大阪市職員組合委員長井岡大治は全体会議の席で日本人の気持ちを次のように表現した。「わが国は世界中に大きな苦しみをもたらした戦争の道を歩みました。東京を発つにあたって当然私たちは敵としての扱いを受け、差別待遇すら受けかねないと予想したものでしたが、皆さまから受けた温かい歓迎に圧倒されてしまいました」

それから二週間の間に五十か国にもおよぶ国々の人々と交わることができた。フランス人とドイツ人、経営者と労働者、共産主義者と非共産主義者、クリスチャンとイスラム教徒といった旧敵同士が和解に至った体験を聞いたり、仲が直った夫と妻や、親と子との会食、そして憎しみや恨みや嫉妬に対する答えを見いだした人々との懇談などが続いた。東京で飛行機に乗り込んだときには互いに口もきかない間柄の日本人たちもいたが、こうした一連の経験は一行に大きなイン

パクトを与えた。

政敵に対する態度の変化を公に表明した最初の人は松橋久左衛門長野市長であった。彼は壇上から次のように語った。

「三年ほど前、林虎雄さんが長野県知事に就任した時私は県議会議長でした。私は県のために良かれと思ったことは全部賛成しましたが、一方で林さんに悪感情を抱いていました。今彼に謝ったところです。これからは県や市のために真の友だちとして仲良くやっていきたいと思います」

林知事は市長の横に並んでその先を続けた。

「松橋さんと私は政敵でしたが、一緒にここコーに来ました。これからは互いに手を取り合い、県ばかりでなく日本に健全なステーツマンシップを築くために、誰が正しいかではなく、何が正しいか、の原則で一緒に頑張っていきたいと思います。これこそコーから日本に持ち帰る大きな土産です」

もっと劇的な和解が数日後に生まれた。飛行機の中で鈴木栄二の姿を発見した労働組合の若き戦闘的指導者中嶋勝治は大きなショックを受けていた。中嶋にとって、闘争の鎮圧に力を行使した大阪市警視総監は最大の仇敵であったのである。コーでいく晩か眠れぬ夜を過ごした彼はこの男に対する憎しみについて真剣にじっくりと考えた揚げ句、鈴木の部屋に行って彼と話そうと決心した。政治的経済的見解が違っているからといって鈴木に対して憎しみを抱いたことは誤りだったと気づいた。そして憎しみを捨てる決心をして、鈴木に許してほしいと謝ったのである。二人は感激して涙を流しあった。翌日二人は一緒に登壇して国の融和のために一緒に働くことを誓った。

一行に与えたもう一つの影響は個人の生活と政策の優先順位の見直しであった。例えば大蔵大臣経験者の北村徳太郎は次のように発言した。

「国土面積では世界第三十位のわが国は世界第六位の人口を擁し、しかも耕作可能面積は国土のわずか一五・五％であります。労働人口の五三％が農業に従事しております。戦争で百二十以上の都市が焼失した膨大な被害の中から新しい経済をうち立てるのが急務であります。しかしながらもっと重要な課題は国の道徳の復興であります。私たちはここコーで見いだした精神こそ国の道義と経済構造を再建する道であることを発見しました」

吉田首相の代理として使節に参加した栗山長次郎は会議で次のように演説した。

「絶対正直という言葉を聞くと私たち日本人は深い動揺を覚えるのです。日本の税制からいって税金を全額支払ったら最低必要な生活費など残らないのでは、と思うからです。しかし、参加者の中には元大蔵大臣と財政の専門家である社会党議員を含む六人の国会議員がおり、何かができると思います。少なくとも正直な納税が可能な税制が作れるようできるだけのことをしてみたいと思います」

直前に一行に加わったもう一人の国会議員が中曽根康弘であった。彼は「私は最年少の国会議員だが、必ず総理大臣になってみせる」と私にうちあけた。彼はその後三十年余りでその目的を果たすことになった。コーに滞在中に彼は地元の地方新聞に投稿したが、その中で彼は、一行のメンバーの中でおこった大きな変化すなわち階級闘争と産業内の対立を引き起こすことが唯一の道だとする考え方を見直す、ということについて次のように報告している。

「会議で発言した人の中には各国の労使の代表が含まれていた。最も大きな関心を引いたのは西ドイツ、ルール地方の炭鉱の共産主義者や英国の港湾労働組合の組合員が考え方を変え、今では新しい動きをこれらの地域で熱心に推進しているという事実である。こうした発言を聞いた日本代表の心の中には多くの疑問や葛藤があった。日本の労働者ははるかに深刻な生活の問題に直面しており、とてもそんな甘い妥協など許せない。まず資源不足の問題を解決しなければならない、ということであった。しかし、アメリカとヨーロッパに流れるこの人種と階級を超えた国際的調和が日本人の心の氷を溶かしていった」

朝鮮戦争はじまる

六月二十五日北朝鮮軍は三十八度線を越えて韓国へ奇襲をかけた。翌日、国連安全保障理事会はこの侵入を侵略と非難し北朝鮮軍の撤退を命じた。その翌日アメリカのトルーマン大統領は国連の決議を遂行すべくアメリカ軍を派遣したが、侵略軍は南へ進攻し全面戦争に至った。このニュースは日本代表に衝撃を与えた。ヨーロッパ人にとっては地球の反対側のこの戦闘も、日本からは対岸わずか百マイルの距離であり、北朝鮮に同情的な在日朝鮮人数千人が扇動的な勢力を形成していたからである。共産軍が南へ侵攻するにおよび日本代表一行はトウィッチェルと私に、帰国すべきかどうか相談してきた。知事などをはじめとして帰国して住民を安心させて緊急事態に対応すべきだとする人々もいたが、ほかの人々は態度を決めかねていた。性急な動きをしないよう促すと当面はなんら動きを起こさないことにしたが、その数日後には旅を続行するようにとの日

本からの手紙を受け取る者も出て一行を安堵させた。熟練したマッカーサー軍の動きもパニックを回避するのに役立った。

この戦争のニュースは日本人の戦争に対する見方を検証する機会でもあった。第二次大戦にこりごりした日本人はいかなる戦争にかかわることにも感情的なアレルギーを持っていた。アメリカの主張によって憲法に書き込まれた軍隊の放棄はいともたやすく受け入れられていた。今や攻撃を受ければ防衛をアメリカに頼り、自らは中立と不介入の立場を望んだ。国内には北朝鮮の侵略を阻止するためであっても日本を弾薬庫や基地として使用させてはならないとする声すら大きかった。しかし日本は追い詰められた状況において国連とアメリカの介入を歓迎するようになり、やがて国連とアメリカは軍事制裁に対する日本の全面的な経済支援を公式に承認するに至った。

日本人の一行には美しい田園風景、町並み、産業や人々の生活ぶりなど、できるだけスイスを見学したいという思いがあった。マッカーサーが用いた「日本はアジアのスイス」という言葉が人気を集めていたが、これはただ単にアルプスの景観が似ているというだけではなく、戦後の日本はスイスが誇る中立という厳しい立ち位置を見習おうとしていたからである。一行をスイスの中央部に随行した際、身体健全なスイス人は全員厳しい軍事訓練を受けたのち現役の予備役として登録され、定期的な訓練や非常時の緊急任務にかり出される、ということを知って一行は大きなショックを受けた。すべての男が家にライフルを所持し、武装していることを知り一層驚いた。スイス人は中立イコール平和主義とは考えないことがわかったのである。

首都ベルンを訪問した一行の代表はマックス・プティピエル大統領に迎えられた。ジュネーブ、

チューリヒ、ベルンの市長もレセプションを設けた。ジュネーブでは国際赤十字総裁が一行を迎えた。続いてスルツェル、ブラウンボベリ、エッシャーワイスというスイス最大の工場を見学し労使双方のもてなしを受けた。

西ドイツに出発する前にフランク・ブックマンはチューリヒにある、彼の祖先でプロテスタントの宗教改革者ツヴィングリの同志ビブリアンデルが住んだ家へ一行を案内した。それから飛行機のタラップの前に立ち日本人におじぎをし、それに答礼しながら彼のゲストたちは機上の人となった。あらゆる層の人の心をとらえる、行き届いたホストならではの計らいであった。

一行は西ドイツのデュッセルドルフに飛び、空港では市長や市の幹部の出迎えを受け、直ちに昼食会に向かった。市長の歓迎挨拶に応えて北村徳太郎と赤間知事は、コーで平和、融和、国際理解、そして貿易の基本を学んだ、と述べた。この二人のスピーチと広島の浜井市長とのインタビューが新聞、放送を通してドイツ全国に報道された。

その日の午後、私は日本人十五人に付き添ってボンに行きアデナウアー首相と会談した。一九五〇年代から六十年代にかけてのヨーロッパの代表的政治家となった彼は、前年の夏、コーを訪れていた。広い執務室に案内され、私は一人ひとりを紹介した。彼は一行と握手を交わした後、着席を勧め、このような立派な代表団をお迎えできて嬉しい、と挨拶した。

「私はコーをよく知っています。ブックマン博士は国際的な融和と社会正義の確立に偉大な貢献をされています」とMRAを評価した後、東西ドイツの分裂などドイツの直面する問題に触れ、終極的にドイツは再統一されるであろうという彼の確信を述べた。栗山長次郎がそれに応えてフ

ランク・ブックマンと吉田首相からのメッセージを伝えた後、一行はコーで日本の将来に向けての鍵を見つけたと述べた。アデナウアーが、コーでの体験についてさらに尋ねると、北村は日本では重大な経済問題を抱えているが、経済的、財政的安定は道徳的、精神的変革によることをコーで学ぶことができ、帰国してからＭＲＡの活動を展開したい、と答えた。彼はまたドイツと肩を並べて世界の再建に取り組みたいとつけ加えた。会見は三十分に及び、カメラの放列の前で階段を降り握手と言葉を交わした。

続いて世界各国の通信社を含む九十人の報道陣が国会議事堂のプレスセンターに集まり、そこで活発な質疑応答のあと栗山と広島市の浜井市長の個人インタビューが行われ東西ドイツに放送された。その後車でルール地方まで戻り、グループ全体と合流してエッセン市長主催の夕食会に臨んだ。翌日一行は三つのグループに分かれた。十八人はハンブルクとブレーメンに向かい、両市の市長の準備した二つの港湾都市の指導者との会合に参加した。十一人は市当局の招きで西ベルリンに飛んだ。残りのメイングループはルール地方にとどまり炭鉱、工場、住宅団地などを訪問した。私は西ベルリン行きのグループに加わった。

共産側が東ベルリンおよび東ドイツを壁で封鎖したのはその十年後であったが、東西ベルリンの占領区域の間には有刺鉄線や歩哨（ほしょう）が立ち、イデオロギーの境界がすでに冷酷な現実として存在していることを如実に表していた。アメリカ、イギリス、フランスによって管理された西ベルリンはソ連が管理する東ドイツに浮かぶ民主主義の孤島であった。市長のエルンスト・ロイターは社会主義者の長老で共産主義に対する強い反抗のシンボルであった。彼と市議会とが見事な昼食

会を催した。一行が市民ホールに着くと入り口の上にドイツと日本の巨大な国旗がかかっていた。マッカーサーの占領政策で日本の国旗を揚げることは禁止されていたので、国旗を見た日本人は涙を禁じえなかった。

市庁舎で一行は、市のある職員に言わせると、それまでにない多くのニュース映画、ラジオ、新聞の報道陣に囲まれた。訪問者はＶＩＰ用の黄金の芳名簿に署名をし、浜井市長はロイター市長に広島の原爆が投下された地点に立っていた楠から彫られた小さな十字架を贈呈した。翌日ドイツ各紙の一面はこの写真と浜井市長からロイターに向けられた次の言葉を掲載した。

「ベルリン市民の皆さまも広島市民と共にコーの精神による新しい世界を造る闘いにぜひ参加して欲しいと思います」

その直後に開かれた昼食会で栗山は、そうした考えを敷衍（ふえん）して次のように挨拶した。「今日の最も深刻な問題は世界が一つではなく二つに分裂していることです。ここベルリンに参って、この分裂が現実のものであることを知り、融和をもたらす何らかの原則が必要であることを一層感じるわけです。自由と真理のための新しい改革運動が必要で、日本人とドイツ人がそのために一緒に働くべきであります。こうした改革運動を推進する道はＭＲＡであると信じて、コーに参りその考え方を学んだのです」

一行の多くがコーで学んだ体験をすぐにいかしている姿に私は打たれた。例えば長野県の林知事は、保守系の松橋長野市長が彼に謝罪し次の知事選では彼に対抗して出馬しないことを決心したことを披露し、関心を集めた。日本の社会党はあまりに多く分裂しており、団結が必要であり、

この話を社会主義者として同僚の社会主義者に喜んで話すことができると、彼は述べた。

ボンではアメリカの占領地域を担当しているジョン・マクロイ総督がレセプションを設けたが、そのなかで彼は即興のスピーチを行った。彼は、戦争中に陸軍次官を務めていた際に長官スティムソンと共に京都を爆撃から救う決定を下したことを披露した。栗山がこれに応え、アメリカが占領当局として現在日本のために行っていることに感謝を表すとともに、日本の使節は道義的、精神的価値の理念を学ぶためにコーを訪れたと述べた。

一行は下院議長と上院副議長とに国会議事堂で迎えられた。労働組合や社会党のメンバーはドイツ野党の党首クルト・シューマッハと四十分間にわたって会談した。懇談の終わりに社会党の川島金次議員が次のようにしめくくった。

「コーに来て以来、私たち社会党は道義的に健全でないがために政権党の地位を失ってしまったということがよくわかりました。私は社会的、経済的再建も重要だが、MRAが支える道徳的、精神的基盤を伴わなければ、それらは役に立たないという結論に達しました」

シューマッハは直ちにそれに答えて、「西ドイツでもその真の解決法をまだ見いだしていないのです」と述べた。忙しかったこの一日もブルッシャー副首相がホスト役を務めた政府主催の夕食会で終わりを告げた。

翌日一行はパリに飛び、すぐさまオルリー空港で記者会見が開かれ、栗山が次のように述べた。

「日本は誤ったイデオロギーに追随したおかげで大きな苦しみを味わうことになりました。私たちの今後の使命は真の民主主義の中心にある道義的イデオロギーに基づいた国の再建でありま

す」その後すぐに代議院主催による国会でのレセプションに直行し、続いて外務省主催によるオルセー通りでのレセプションに参加した。三日間のパリ滞在のうち一行は市長主催の公式晩さん会に招かれたほか再建大臣や労働大臣との長い意見交換を行った。初日は七月十四日のパリ祭にあたり、一行はオリオル大統領の特別席に迎えられ華やかなパレードを見物することができた。

次の訪問地はロンドンであった。前年、片山夫妻に同行して気づいたことだが、戦争の傷跡がまだ生々しい英国では、かつての敵国民を迎えるのに警戒的であった。これに比べドイツでは日本人は戦争の苦しみと犠牲を味わった同じ境遇の人々として扱われた。もう一つの大きな違いは、ドイツやフランスでは新聞やラジオの取り扱いが大きかった上、この日本の使節の目的を充分理解していたことである。一方、英国のメディアは着物や箸などばかりに関心を持ち、日本の訪問者が伝えようとする日本という国や彼らの考え方や世界観にはほとんど目もくれなかった。

それでも英国での六日間は観光ばかりではなく有意義な行事に満ちていた。ロンドン市長がマンションハウスで公式レセプションを開いたほかオックスフォードでも市長や大学の総長によって同じような会合が催された。上院のティー・パーティーで両院の議員と会見したほか小グループは外務省高官やタイムズ紙論説委員との懇談も行った。最も賑やかだったのは英国労働運動発祥の地といわれるロンドンのウェストハムの市民ホールで開かれた一般集会で、九百人収容といわれるホールに千五百人ほどが押し寄せ日本人一行に起立しての大喝采を行った。

アメリカ議会での謝罪

ニューヨークへの出発に際し、一行は報道陣に声明を発表した。

「共産主義発生の地であるヨーロッパに共産主義に対する建設的な答えを見いだすためにきた私たちは、スイスのコーで、MRAの理念の中にそれを見いだすことができた。こうした生活のあり方こそアジアが直面する問題解決に不可欠な基盤であると思われ、MRAの先駆者ブックマン博士と彼のグループ、そして温かく歓迎してくれたヨーロッパの方々に感謝を表したい。日本は過去において誤った考えと道を歩んでヨーロッパの方々に多大の苦しみを与えた。これから私たちは、心を入れ替え、世界を造り変えることに貢献できるということを国としての行動によって示していきたい」

イデオロギーや共産主義が常に強調されていたのも、当時の状況を反映している。一九五〇年（昭和二十五年）の夏は北朝鮮による武力攻撃とその背後の中国の無気味な脅威に吹き荒れた。東ヨーロッパではソ連が強圧的な声を高め鉄のカーテン内の国々のしめつけを強めた。アメリカではアルジャ・ヒスの偽証に対する長期裁判を通して共産主義の謀略が茶の間の話題となった。マッカーシー上院議員のイデオロギー的魔女狩りも冷戦時代の真っただ中のアメリカにショックを与えた。

多忙なニューヨークのスケジュールのハイライトは当時ロングアイランドのレイクサクセスにあった国連本部への訪問であった。一行を迎えたのは、長い間事務総長を務めていたトリグブ・リーであった。彼は日本人一行に対して、日本が国連に加盟するよう初めて招聘（しょうへい）してくれたが、

当時の日本は講和条約調印までは国連からは除外されることになった。北村はそれに答えて次のように述べた。「きょうここを訪れた日本人は、われわれが極東で引き起こしたトラブルに恥じ入り深く責任を痛感していますが、国連が平和維持のためにとっている速やかな動きに感謝するものです」

ワシントンでの初日は上院でのレセプション、下院での昼食会、国務省によるレセプションという三つの大きな行事が組まれた。一行には日本を代表してアメリカの政府や政治指導者、そしてマスコミを通してアメリカ国民に話しかける機会が与えられた。こうしたことが実現したのは戦後初めてのことであったが、舞台をセットしたのはアレキサンダー・スミス上院議員で、一行を正式に迎えるという同意を上院から取りつけたのは到着の数日前のことであった。彼は上院の演説の中でこの使節の訪問について次のように述べた。「両院の議員諸君は、人の心を勝ち取るためには、道徳の活用、思想のマーシャルプラン、ボイス・オブ・アメリカ（VOA国営放送）が必要であることを訴えてきました。こうした目的のためにアジアだけでも年間数千ドルを費やしている訳ですが、五千マイル余りの太平洋を挟んでなかなかうまくいかなかったことをこの議会で直接行うという絶好の機会をもつことになるのです。世界のためにアメリカが堅持しようと努力している姿と確信をこの一行が日本のあらゆる立場の人々に直接持ち帰ってくれるのです」

やや不安そうな面持ちで議会議事堂に到着した一行は階段を上がって副大統領でケンタッキー州選出のアルベン・バークレー上院議員の事務所に案内された。彼は一人ひとりと挨拶を交わしたあと国会議員を上院議場の議員席に、ほかの一行を外交団用傍聴席にそれぞれ案内した。彼は

一行を上院議員たちに紹介したあと、一時的に断たれた日米両国間の長い友好関係に触れ、この友情が「ただ単に復活するだけでなく両国間の永遠の存在となって欲しい」と述べた。続いて民主党二人、共和党二人の議員が演説した。外交委員会委員長のトム・コナリー、バーモント州のラルフ・フランダース、ヴァージニア州のウイリス・ロバートソンとアレックス・スミスの各議員である。続いてバークレー副大統領は栗山長次郎議員に吉田首相の代理として上院で演説するよう招いた。西山千が、数々の重要場面で果たしたように見事な通訳をした。

「ほぼ一世紀にもわたる両国間の友好関係を日本が破ってしまったことは誠に遺憾であります。われわれが犯したかような失敗にもかかわらず、寛大なアメリカは日本を許し、日本の存続を認めるだけにとどまらず、復興の助けを担っておられます」

「北朝鮮の無法な侵略はまたしてもアメリカを大きな犠牲に巻き込んでいます。日本としては国連のとった行動を心から支援するとともに、トルーマン大統領の勇気ある指導性に高い敬意を払うものです。日本がアメリカとの協力関係においてどんな形でお役に立てるのか示していただきたいと思います」

「議長、私たちは民主主義の真の中身を求めてスイスのコーに行って参りました。そこでは日本の民主主義を真に育み、共産主義に対する答えとなるイデオロギーを見いだすことができました。今この国に参りましたのは偉大なアメリカの伝統を学ぶためです。その同じ原則に則って国の再建を果たすことができれば日本国民にとってこの上ない幸せです」

ニューヨーク・タイムズ紙は栗山の謝罪を社説で次のようにとりあげた。

「ワシントンでのこうした出来事が広島と長崎に原子爆弾が投下されてからわずか五年足らずに起きたのである――一行の中には広島と長崎の両市長も含まれていた。彼らの方でも許すべき何かを感じてくれたとすれば、それは大変な奇跡といえよう。現在の暗闇を抜けてすべての人類が兄弟となりうる未来を見ることができる」

サタデイ・イブニング・ポストという雑誌の論説も栗山の演説を引用し、次のように締めくくっている。

「アメリカ人にとって『自分の国は正しいか間違っているか』といった心の動きを理解することは難しいことだが、自国の失敗を認めたというこの行為は新鮮な衝撃を与えた。具体的な影響もあった。それは、私たちのほとんどが聖書に対する厳格な宣誓などよりも柔軟な感じを日本に対して抱くようになったことである。恐らくアメリカの側にも『あの時確かに間違いだった』と認めてさしつかえない出来事が過去にいくつかあるはずだ」

ワシントンDC委員会室で行われた昼食会には上下両院議員が多数参加し、日本人も発言したり質問に答える機会が与えられた。ジョージア州のブレストン下院議員は、「私のワシントンでの議員生活を通して最も印象深い感動的な体験であった」と述べている。一行はホスト役を務めた議員たちとともに議事堂の前の階段に立ち記念撮影に納まった。

議事堂をあとにして国務省の迎賓館プロスペクト・ハウスに向かった。ポトマック川を見渡すジョージタウン・マンションの芝の上で一行は大統領特別顧問ジョン・フォスター・ダレスやディーン・ラスク国務次官補などに迎えられた。国会議員や全国的な組織の代表などワシントンのさま

ざまな分野の指導者が招かれていた。

ワシントンでの最終日は下院が上院の例にならって史上初めて外国代表を議場内に招いた。多数派のジョン・マコーマック議員、少数派のジョセフ・マーティン議員という二人の代表の案内で一行がレイバーン議長に迎えられると下院議員一同が起立しての大喝采をおくった。演壇に招かれた北村徳太郎議員は日本国民を代表して「アメリカ国民に与えた悲劇的なご迷惑」に対して謝罪した。

傍聴席にはコーに向かう途中のオーストラリアの議員団が座っていた。北村は彼らを見上げ、日本がオーストラリアに対して行ったことに対する深い遺憾の意を付け加えた。彼の演説は大きな拍手でしばしば中断されたが、その終わりに下院議員と傍聴席の人々が一斉に起立して喝采がなりやまなかった。オーストラリアの議員の一人が後にコーで次のように語った。

「日本の代表が、過去に起こした間違い、苦しみ、悲しみを謝罪するのを聞いた時、私が今まで出会ったことのない身の引きしまるような静寂が漂った。歴史が作られた瞬間であった。そしてオーストラリアはこれまで、南太平洋の世界的な問題に関してはいつも母国イギリスとアメリカの助けばかりを求めてきたが、これからは太平洋の世界戦略のためにも第三のパートナーが必要であることを認識した」

平和のモデル都市

ロサンゼルスで一行は記者団と会見したが、原爆の使用から朝鮮戦争にいたるまで多くの質問

が殺到した。この頃になると一行のほとんどが熟練したスポークスマンになっており、難しい質問もうまくこなして巧みな応答ができるようになっていた。ある日一行はエリシアン公園で開かれた、南カリフォルニア全域の日系アメリカ人コミュニティー主催によるピクニックに招かれた。これは戦争によって約十年間隔絶していた日系アメリカ人と太平洋をはさんだ同胞との再会のシンボルであった。一万人に及ぶ大人や子供がホットドッグや西瓜を食べたり走り回ったりして楽しんだが、こんな大きなピクニックは見たことがなかった。そのあと全員木陰にすわりスピーカーを通して日本からの訪問者の話に耳を傾けた。

八月六日の日曜日は広島の原爆投下の五周年であった。ＣＢＳがラジオで三十分間浜井市長を通訳つきでインタビューしたいという申し入れを行っていた（テレビも普及し始めていたが、依然、ラジオが主流であった）。番組はロサンゼルスのＭＲＡ本部から始まり、浜井市長のほかにも、栗山、南カリフォルニア大学のルーファス・クラインスミッド学長、ロサンゼルスのフレッチャー・ボウロン市長、のちに連邦最高裁判所長官となったアール・ウォーレン知事も加わった。知事だけはサクラメントから話し、残りは市主催の公式夕食会の席から参加するということになった。

相馬雪香は長老のステーツマン尾崎行雄の娘として紹介され、この欧米使節団のこれまでの成果を見事にまとめて紹介したあと次のように語った。「世界は物資援助だけを求めてアメリカを見ているのではなく、分裂した世界に融和をもたらす答えがアメリカの精神的遺産の中に存在する筈であるとの確信のもとに、その精神的な指導力も求めているのです。私たちは皆さまがＭＲＡを日本に紹介してくださったことを感謝しています。ＭＲＡは、民主主義を実際に機能

させるアメリカの精神的遺産を、日本人が理解しやすいようにわかり易く解釈しています。私たち日本の女性もこの精神が日本にもたらされるように全力を尽くしたいと思います。これこそ過去の過ちの償いを示す唯一の道であり、日本が変わることによってこの精神が世界にも伝わり、新しい世界を造ることができると思います」

浜井信三市長は広島の再建に寄せられたアメリカの物資援助と道義的支援に感謝したあと、十万人以上の命が奪われた五年前の恐ろしい出来事をふり返った。

「この悲劇は戦争からおのずから予期されたものであり、われわれ広島市民は誰に対しても恨みは抱いておりません。唯一私たちが求めることは広島に何が、何故、いかにして起こったかを世界中の人に知ってもらい、同じことが二度とほかの場所で起こらないようあらゆる努力を払って欲しいということであります。私たちが故意に心の中に築いてしまった人種や国籍や階級といった境界線を取り除く必要があります。人の心が変わることによってこうした境界はなくなります。ブックマン博士が『平和とは人が変わることです』といみじくもおっしゃった言葉が心に強く残っています。こうした努力を私自らがまず広島から始めたいと思います。生き残った市民に残された唯一の夢と希望は広島を平和のモデル都市として再建することです」

最後の訪問地はサンフランシスコであった。最後の集会では多くの参加者が今回の体験を手短に語ったあと、この旅が自分にとって、あるいは日本の代表にとって意味があったことについて感謝を表した。これらの中にはいくつか共通のテーマがあった。

・志を持った人々が社会を建設的に変えることができるという、一行の人生にインパクトを与

えたコーでの明るく刺激的な雰囲気。

・過去を謝罪し、新しい友情を確立して国際社会に復帰できたという興奮。

・個人として、家族の一員として、市民としての責任の優先順位を整理して、物質的よりも道徳基準に重きをおいていくこと。

八月十六日の朝、帰国の途につくため空港に勢ぞろいした日本人の使節は、次のような声明を発表した。

「帰国にあたって私たちはマッカーサー将軍の賢明な指導のもとに健全な民主主義の砦を築きたいと思います。日本における将軍の偉大な業績に深く感謝するとともに、国連の旗のもとに両国共通の自由を守るためのトルーマン大統領並びにアメリカ国民の勇気ある犠牲的行動をできる限り支援したいと思います。私たちはアメリカの信頼できるパートナーとしてアジアの復興に協力することによって過去の過ちを償いたいと思います」

「共産化されていない東洋の国々に欠如している理念を埋める新しいイデオロギーを求めて私たちは欧米に来ました。その答えをスイス、コーのMRA世界会議で見いだすことができ、しかもそれがさまざまな国で実践されているのを実際に見ることができました。四つの道徳基準が人生に与える挑戦は一人ひとりの心を照らしてくれたと同時に、国の多くの分野でそれが適用されるべきかもはっきり認識できました。この理念は日本の将来ばかりでなく世界を造り直すという東洋と西洋の新しい共同事業の鍵になると思われます」

この使節には、直ちに以下のような影響が見られたことが明らかだった。

・政党、階級、見解の相違を超えた参加者同士の融和。
・世界情勢に対する広い展望と世界における日本の立場の認識。
・アメリカの日本に対する寛大な政策と韓国の防衛に対する評価。
・政治的安定、経済復興、健全な民主主義の発展のための道義的、精神的復興の重要性の認識。

一方、訪れた国の人々に対して一行も大きな貢献を果たした。それは、戦後日本の責任ある指導者として前向きな姿を示したこと、個人の生活や仕事の中で何が最も重要かを考え直すという挑戦を多くの人に与えたこと、そして、敵とみなした国に抱いていた不信や憎しみの溝を埋める小さな第一歩を踏み出したことである。

スイス、ジュネーブ空港に到着する戦後初めて海外渡航を許された日本の大型代表団（1950年）

ケン・トウィッチェル（左）と著者（右）を東京で迎える堀内謙介元駐米大使（1950年）

スイス、コーのMRA世界大会で壇上に並ぶ（左から）アントニオ・バンティ（イタリア電機工業会理事長）、フランク・ブックマン博士、石坂泰三東芝社長（1950年）

西ドイツのルール地方を旅する片山哲元首相夫妻。左端は三井英子夫人（1949年）

スイス、コーのMRA国際会議場で食事作りに励む日本代表。ここでは会議の進行、運営のほか、音楽や演劇、通訳、医務室、託児所、ベッド作り、皿洗いなどすべてを参加者が分担して行う。共同作業を通して立場や言葉の壁を超えた相互理解が深まる。後列の中央が中曽根康弘衆議院議員（1950年）（訳者提供）

ヨーロッパ訪問の日本代表団一行を迎える西ドイツのコンラッド・アデナウアー首相（手前右）。（左から）北村徳太郎（国民民主党）、福田篤泰（自由党）、青木理三重県知事、中嶋勝治金属労組役員、中曽根康弘（国民民主党）（1950年）

浜井信三広島市長から、木の十字架をマンションハウスで受け取るフレデリック・ローランド、ロンドン市長。この木は市の創設を記念して植樹され原子爆弾によって爆破された樹齢400年の楠から彫られたものである（1950年）

アメリカを訪問する“議会政治の父”尾崎行雄衆議院議員と三女相馬雪香（1950年）

日本代表団をアメリカ議会で迎えるバークレー副大統領（左から2人目）とアレキサンダー・スミス上院議員（左端）。北村徳太郎議員（右から2人目）が下院で、栗山長次郎議員（右端）が上院でそれぞれ演説した（1950年）

熱海温泉で活発に談笑する三つの産別の幹部。（左から）西巻敏雄（日本海員組合）、永岡光治（全逓信労働組合）、山花秀雄（化学同盟）の三氏（1955年）（訳者提供）

熱海温泉の火鉢で談笑する加藤勘十衆議院議員（右）と山花秀雄衆議院議員

コーのMRA会議場を出発する国鉄十河信二総裁。世界で最も速い時速250kmの夢の超特急を開発した（1956年）

参議院内でMRA世界代表一行に歓迎挨拶する河井弥八参議院議長。議長をはさんで右がデンマークのオール・ジョン・クラフト前外相、左がスイスのオスカー・ライムグルーバー元大統領（1955年）

首相官邸で上演された劇「ボス」のシーン。右端は経営者の役を努める片岡義信国鉄理事（1955年）

第五章　対日講和条約への橋渡し

アメリカ・マキノ島会議

東京に戻るやいなや、ほとんどのメンバーに帰朝報告の講演依頼が殺到し、それから数か月にわたり何百回となく講演会に明け暮れた。北村議員は天皇陛下に拝謁し二時間にわたり今回の外遊について詳しく報告したが、陛下はＭＲＡについて細かく質問された。七人の国会議員は個別に、あるいは一緒に報告する機会に忙殺されたが、国家的問題に対して政党の粋を越えて一緒に行動する姿が評判になった。中曽根は帰国後、一日平均三回、三か月の間に約五万人の人々に講演した。北村は全国をまたにかけての講演旅行のほか、多くの新聞や雑誌に寄稿した。栗山はＭＲＡを〝個人、家庭、社会〟でいかに効果的に推進するかの戦略を国会でまとめることになった。

秋になってこれらの議員は「ＭＲＡが人の心にもたらす変化（change）が社会や世界を変える」というテーマのミーティングを国会内の会議室で開き両院の議員仲間を招いた。「社会を変えるためのチームワーク」、「何が私を変えたか」、「自分の変化がいかに家庭を変えたか」、「いかにし

てＭＲＡを日本で効果的に推進するか」といったテーマについて、包み隠さぬ話し合いが行われた。この会合には国会議員のほかにも銀行頭取、労組指導者、大手メーカーの社長、ＮＨＫの役員も加わって講演した。

帰国した一行の中で最も説得力をもったのは鈴木と中嶋であった。二人は、コーにおける二人の和解と姿勢の変化について、自分たちの同僚たちや一般での集会で講演した。鈴木は大阪市警の幹部と職員を集めて彼の体験と、特にデモ隊やトラブルメーカーに対する新しい姿勢について語った。彼は、中嶋が正直に謝罪したことによって、法律の遂行に強圧的な方法を行使していた自分が勤労者と労働組合弾圧の旗頭に立っていたことに気がついた、と語った。また、共産主義者と朝鮮人を単なるトラブルメーカーとだけみなして憎んでいたが、その憎悪を捨てて、そうした人々を一人ひとりの人間として扱うことができるようになった、と述べた。

続いて鈴木は、長い間の政敵であり告訴合戦を繰り返してきた元県会議長を訪ね、それまで彼が抱いていた恨みについて謝った。数日後の一般の集会で鈴木が再び謝罪を繰り返すと、相手の男もこれに応えて鈴木にわびた。翌朝の新聞には「鈴木総監百八十度の転換」という見出しが載った。それからの数か月間彼は八千人にもおよぶ警官とその家族と話し合う機会を設けたが、警官たちは職務上の問題ばかりでなく家庭の問題も鈴木に打ち明け、家族の対立もまとまるようになった。巡回の警察官は「絶対正直、純潔、無私、愛」と交番の壁に貼ってそれに励もうとした。国民に対する態度がこうして穏やかに変わったことは、それまで上昇していた犯罪率が一九四〇年代のレベルまで下がるという形で報われた。

大阪以外からの講演依頼も殺到し、特に大都市以外の地域における法律施行機関である全国の地方警察が大きな関心をよせた。また世界最大の都市警察である東京の警視庁の幹部にも講演した。こうした彼の講演や交流を通して終戦以来争いが絶えなかった日本の警察機構同士の関係が緊密化に向かった。

一方、中嶋勝治は共産党の主要拠点のあった長野県の山村を回り講演を重ねた。この〝赤い村々〟では、いわば命懸けの行脚でもあった。また請われて県の調停委員も務め、労働争議や騒乱の回避に活躍したほか、鈴木や、コーに同行した東芝石坂泰三社長と共に労使双方に対して労使のチームワークの戦略を示すことができた。

ほかにも帰国したグループに大きな影響をうけた政府組織が二つあった。電気通信省（後の電電公社）の田村文吉大臣（肩書・訳者注）は北村の話に大変感動し、従業員十五万人の責任感と協調意識を高めるために、幹部を集めた講演会を連続して行った。加賀山之雄国鉄総裁（肩書・訳者注）は、部下の一人が自分の不正直を償ったという行動をみて、幹部と組合指導者を集めてMRAの話を聞くことにした。国鉄と電気通信省は、当時共に共産党の主要目標になっていた。

こうして使節団はその人々が信じる考えを広く伝えるという意味では大きな成果を上げた。しかし、中核にいた人たちは、もっと明確な戦略と統合されたプログラムの必要性を感じた。そこでこれらの人々は翌夏アメリカのミシガン州マキノ島で開かれたMRAの国際会議に再び参加した。相馬夫妻と三井夫妻はコーに行った代表の何人かを伴って参加した。鈴木栄二、広島で被爆した中嶋勝治、そして栗山長次郎で、栗山が率いる国会議員団の中には二人の活発な女性議員を

含む社会党の議員が多く含まれていた。政府公社の幹部三人も加わっていた。（以下の氏名と肩書・訳者注）国鉄の片岡義信職員局長、国家地方警察本部の木村行蔵警邏（けいら）交通課長、電気通信省鶴田重蔵訓練課長であった。東芝も高橋恒祐専務と労組の長谷川盛男委員長を送った。

今回の代表は前年ほどの派手さはなかったが、慎重に人選がされており、国の再建計画の中核を担ったり、国の政策の実務を遂行できる人々であった。

マキノ島やその後のワシントンやニューヨークを通しての体験は、前年の代表と同じであったが、フランク・ブックマンが一行を再びニューヨークからマキノ島に招いてさらに一週間のミーティングを設けたこともあって、自分の人生や仕事に関して深い決心をする人々もあった。その内の一人にとってはこれが人生の一大転機となった。

加藤シヅエは参議院社会党の有力議員で、武家の出身で初め石本男爵と結婚したが、のちに当時の衆議院議員で労働者の権利擁護の闘いで投獄されたことのあるマルクス主義者の労働運動指導者、加藤勘十と再婚していた。シヅエ自身も社会改革、特に女性の権利擁護の先駆けであった。このマキノ島でのミーティングで彼女は、彼女いわく、「危機」に至った。

「私は参議院議員の誇り高い女としてアメリカにやってきましたが、このミーティングで話されていることを聞いているうちに、自分は葬式に参列しているかのような気になりました。涙があふれ出ましたが、それは自分のプライドの終焉を意味したのです。しかしそれは新しい謙虚な女の誕生でもありました。私はうまづらの女として知られていましたが、私の顔は変わり、もっと丸く微笑（ほほえ）みをもった顔になりました」

彼女の姿があまりに変わってしまい、羽田空港に出迎えた夫が到着ロビーの窓越しに妻を探しても、はじめは気づかなかったくらいであった。彼女の変化のもう一つの成果は、社会党の衆議院議員で一行に加わっていた戸叶里子との関係である。二人の女性は同じ党に属しながら互いの嫉妬が両人の間を裂き、党を二分していたグループの反対側にいることが多かった。しかしこれから二人は親しい友人となり、社会改革の闘いの良き仲間となった。この二人の和解はその後党が迎えた危機に際して党をまとめる重要な役割を果たした。

講和条約反対国の説得活動

マキノ島では日本代表のほかに多くのアジア諸国やオーストラリア、ニュージーランドの代表が参加していた。帰国を前にブックマンは西海岸を回るプログラムを企画しこれらの国々の代表は集会やレセプションでスピーチし、最後はロサンゼルスの一般向けの集会で終わりを告げた。こうした行事はこの一行による新しい太平洋政策を打ち出すという目的で行われたが、その基調は人と国の動機を変えることによって平和と調和をもたらそうというものであった。

一九五一年（昭和二十六年）七月の時点でのこのような太平洋構想政策は不可能な夢のように感じられた。朝鮮戦争はいまだに継続しており、国連と北朝鮮の軍代表との会合はデッドロックに陥っていた。共産ゲリラによる活動はインドシナからインドネシアへと拡大していた。インド、ビルマ、ベトナム、マレーシア、インドネシアは人種、宗教、イデオロギーの対立による武力紛争に悩まされていた。戦火拡大の脅威にさらされオーストラリア、ニュージーランド、それにア

メリカは相互軍事協定を計画していた。こうした状況下で、太平洋をまとめようとする勢力が存在することは歓迎されるニュースであった。

こうした折りに、この会議への注目を一層集める展開が起こった。日本との講和条約の準備が終了し、条約調印の会議が九月初めにサンフランシスコで開催されることが発表されたのである。アメリカは、戦争状態と占領を終結し日本の独立を復活させる時期が熟したと、第二次大戦の連合国のほとんどを説得していた。いくつかの政府が消極的な態度を示しながらも協定は結ばれたが、ソ連はこの案を拒否し会議を退席した。オーストラリア、ニュージーランドなどの旧敵国は自由な日本の将来に強い不安を感じていた。その結果、サンフランシスコ講和条約会議への代表は緊張した雰囲気の中に会し、公式の接触以外では日本を締め出そうとする立場がとられ緊張が高まっていた。

フランク・ブックマンはこの会議の展開に違った流れを作ろうと動いた。各国の代表がサンフランシスコに到着する度にブックマンのグループが一人ひとりと交流を始めた。三井高維と私は日本の先発グループを訪ねた。（訳者注　首席全権の吉田首相、池田勇人蔵相、星島二郎（自由党）、苫米地義三（民主党）、徳川宗敬（緑風会）、一万田尚登日銀総裁という）六人の公式代表のうちの吉田首相と一万田総裁を含む五人とはすでに面会したことがあったし、また日本の代理代表、顧問、報道人の中には片山哲、山田節男参議院議員、毎日新聞の藤本など多くの知り合いがいることがわかった。加藤シヅエ、戸叶里子の両議員も公式オブザーバーの中に加わっていた。

会議が始まる頃ブックマンは、ＭＲＡの劇「ジョサム・ヴァレー」の出演者を含む大グループ

をサンフランシスコに集めた（MRAはその理念を表現する手段としてしばしば劇を用いた）。毎晩各国代表の多くがゲアリー劇場に足を運び、西部の大牧場を舞台に繰り広げられる和解をドラマ化したこの劇の魅力に接することになった。その中にはこの講和条約に対する意見を異にしていた日本の国会議員三十人が混ざっていた。社会党左派は、この条約は日本を経済、防衛の分野でアメリカに一層従属させるとして強く反対していた。社会党はこの問題に関して分裂していたが、加藤、戸叶、山田、片山たちは食事や劇場の場を利用してこの分裂を調整し、条約に前向きな姿勢を党内で作りあげることができた。

フランク・ブックマンは毎日、市を眼下に見下ろすマークホプキンス・ホテル最上階のレストランの大きな丸テーブルに多くのゲストを食事に招いた。アメリカ、フランス、ベトナム、セイロンなどの代表が、日本の代表に引き合わされた。旧敵と人間的なつながりを作る機会を出席者全員が評価した。

条約が正式に調印される九月八日ごろには、フランク・ブックマンと各国の代表と関係のある約三百人のグループによる静かな働きによって各国代表との間の相互理解の雰囲気が拡大していた。フランスのロベール・シューマン外相は、会議の最終日にフランク・ブックマンの偉業を評価して、彼に向かって次のように語った。

「あなたは、われわれステーツマンがやっときょう勇気を持って調印できた二年前に、既に日本との平和を築いていたのですね」

日本の一行は帰国を前に、日本における次のステップについて私に相談した。もちろん翌年春

に与えられる独立を心待ちにしてはいるものの、一方でアメリカ軍が引き揚げたあとの政治的、社会的混乱の可能性を心配していた。彼らと同じ考えをもった人々を産業、政治、社会の各分野で全国的に増やしていくことが急務であると感じていた。既に三井夫妻、相馬夫妻をはじめこうした動きにフルタイムで専念し核となる人々ができていた。

今こそ私が家族を伴って来日し、この流れを前進させるよう助けてほしいとの要請を受けた。加藤シヅエが最も熱心で、活動の拠点にもなりうるふさわしい家を皆で探し始めたいと申し出た。四歳の女の子と二歳の息子を連れての海外生活は軽率に扱える問題ではなかった。生活条件はいまだにきびしく、国の行く末も定かでない。日本側にとっても私の一家にとっても信仰に基づく大胆な賭けであった。妻のジーンと私はこの招きについて話し合い、考え、祈った揚げ句、心からこの招きに賭けてみようと決心した。私たちは二人の友人に一緒に行ってもらうように頼んだ。日本生まれの日系アメリカ人の三谷真種は両国語に堪能であった。スコットランドのクライデサイドの造船工トム・ギレスピーはアメリカで数年私と共に働いたことがある。彼は欧米の労働組合の人々をよく知っていた。

十一月の初めこの二人と三井夫妻そして私たち一家はサンフランシスコからSSプレジデント・クリーブランド号で出帆した。三井夫妻にとっては悲しい航海であった。息子の高順が長く苦しい結核によってロサンゼルスで死亡したのであった。死は確かに苦痛からの解放ではあったが三井夫妻にとっては耐え難い打撃であった。しかし船が横浜に着くまでには二人は信仰を通して立ち直り、私たちと共にこの新しい目的に向かってまい進したいと語った。

第六章　活動拠点の確保

再び日本へ

船が横浜港のドックに接岸すると、船を出迎える二つのグループがあった。一つは私たちの友人たちでにこやかに手を振ってくれたが、その近くには大きな赤旗を持って歌を歌っているもう一つのグループがあった。これは共産党のグループで、同じ船に乗船していたアメリカから強制出国を受け香港経由で中国本土に向かう五〇人の中国人学生を激励しにやってきたものであった。横浜から東京への道のりはこの美しい国へのベストの紹介では決してなかったが、当時の日本の状態を象徴していた。道はうらぶれた工場地帯沿いを走り国の経済活動の大動脈ではあるが、見栄えのいいものではなかった。この地域は戦争で完全に破壊され、当座しのぎに再建されてはいたが、東洋とも西洋とも、現代的とも日本古来のものともいい難い光景であった。馬車とキャデラック、リヤカーと軍用トラック、舗装されたモダンな道路と車もまともに通れない曲がりくねった横丁など対照的な風景であった。モダンな建築物のすぐ脇には、着の身着のままの貧困が横た

わっていた。

車中、私たち一家が滞在し活動のセンターとなる家がまだ見つかっていないことを知った。終戦後、進駐軍が西洋風のまともな家をすべて徴用してしまい、しかも朝鮮戦争によって外国人の数は軍人、民間人とも増加していた。相馬夫妻が適当な家に最近目ぼしをつけたところであった。所有者は中国の楊礼恭夫妻でその家を手放したがっていたが、その前に自分たちが移る家を探さねばならなかった。気にいった家が売りに出ていたがその所有者はまだ家を空けられないという、いわば椅子取りゲームのような状況であった。

そんな折、アメリカ大使館の文化担当官をしていたワシントンの友人マーガレット・ウイリアムス女史が、彼女の家に同居しないかと親切に招いてくれた。一軒家はふつう夫婦に与えられていたが、彼女は仕事柄人をもてなす機会が多かったために、その家を使えることになっていた。私たちは喜んでそこに住みつき、トム・ギレスピーは東芝社長の石坂泰三の家に、また三谷真種は国会の長老議員でサンフランシスコ講和条約の調印者の一人星島二郎の家にそれぞれ滞在することになった。

最初の数日間はこれからの活動の中核となる人たちと共に、今後の活動の優先事項を整理した。最近日本の大学の教職ポストを辞めたアメリカ人ローランド・ハーカーも加わった。このグループは日本社会のさまざまな階層を網羅することになった。三井夫妻は一般から見れば金持ちの実業家を代表していたし、相馬夫妻は貴族と社会奉仕分野を代表していた。恵胤の弟豊胤とその妻登喜子も加わった。豊胤は医者としての仕事を辞めて加わっていた。木村利根子は銀行の中間管

理職の娘であった。中嶋勝治は貧しい武士の家柄で、若くから金属工場で働いていた。フルタイムで働いていた若者の一人に中島秀夫がいた。勝治とは縁戚関係はなく、海軍兵学校生として片道発射の人間魚雷の訓練を受けたが、幸い作戦命令が来る前に終戦が訪れた。

このチームは一日中の大半を一緒に働き、食事を共にして、家族よりも親密な関係になった。民主主義のアメリカでもこんな現象はまずなかったし、一九五〇年代の日本では極めてユニークであった。年寄りと若者、金持ちと貧乏人、上司と部下といった伝統的な隔たりが階級間の友情はおろか当たり前の人間関係をも妨げていた。日本語自体もこうした上下関係を維持するようにできていた。例えば「自分」という言葉一つでも相手が男か女か、上司か部下か、年上か年下か、知り合いか初対面の人かで変わってくる。このチームにおける互いを尊重しながら率直な交わりをもつ生活が、初めて触れた人々に強い印象を与えたのも、無理からぬことであった。このグループの動きや過去二回の夏を通してコーとマキノ島に参加した人々のおかげで、MRAは広く知られるようになった。その考え方もマスコミでとりあげられ、生活や仕事の中でそれをどう実践するかについての問い合わせも頻繁にあった。MRAに関係する人々への信頼と一般的な関心とが相まって、政府は治安維持法を手直してMRAの集会に限って政府当局の審査を受けずに開催できるようになった。

フルタイムのチームは全国からの講演の依頼、問い合わせ、相談事などでてんてこまいとなった。こうした要望に応えるためにももっと大きなチームを育てる必要に迫られた。政治家、実業家、労働組合、専門分野で日本の指導的立場にある人々の間に既に培われた友情の輪を深めるこ

とが次の優先課題であった。と同時に国の主要分野の中で協調的な活動のモデルを作り上げることが重要であった。しかし何よりも必要なのは活動拠点の確保であった。

選んだ家を購入する資金もなかったため、有力な人の助けが必要であった。MRAハウスに最も関心を寄せたのは日銀総裁の一万田尚登であった。日本に到着した際、ぜひ会いたいとのメッセージが寄せられていたので、最初に訪問したのが彼であった。三井高維、トム・ギレスピーと私を前に彼はサンフランシスコの講和条約会議での体験を興奮さめやらぬという感じで情熱的に語った。ブックマンの尽力こそが日本代表と外国代表との間の溝を埋めた道であり、日本が再び自由諸国の家族の仲間入りをするにはMRAの力を借りるのが理想的だと語った。彼には、会議の間に独立後の日本でMRAの国際会議を開き、世界特にアジアの隣国に門戸を開く姿勢を示す、という考えが生まれていた。

「しかし、まともな宿泊設備や道路を整備し、資金を集めて、外国のゲストや日本の代表をもてなす態勢を整えるには一年以上はかかるだろう」と彼はつけ加えた。まるでオリンピックの準備のようであった。続いて一万田は、MRAセンターの状況はどうかと尋ねた。三井高維が楊氏の家のことを話すと、彼はもしその物件がふさわしいのなら話を進めるべきだと述べた。どんな資金集めにも日銀総裁が中心的役割を果たしているので、私たちは喜んで同意し、高維はすかさず彼の助けを求めた。それに同意しながらも、とにかく自分にだけ頼ろうとする傾向があるのでほかの人々も積極的に動かなければならない、と彼は答えた。

その後私たちは多くの有力者たちと食事や懇談を重ね、ただ単にセンターについてばかりでな

く、国に対する考え方を聞いた。最高裁長官田中耕太郎、衆議院議長林譲治、参議院議長佐藤尚武、文部大臣天野貞裕、経団連会長石川一郎、東芝社長で重電機協議会会長石坂泰三、最大新聞の毎日新聞社社主本田親男、ＮＨＫ会長古垣鉄郎、それに日本の三大銀行の頭取などであった。

毎日新聞の本田との会談は特に有意義なものであった。人間の意志の弱さをしっかり見抜いている彼はコーやマキノ島に行った人々を率直に評価し、本気であった人とそうでない人とを区別してくれた。また一万田と石川の方からも新聞報道や資金集めを通してＭＲＡを支援するよう話があったことも教えてくれた。しかしジャーナリスト、特に雑誌の編集者にはマルクス主義者もいるので、人間性にシニカルな彼らの理解と支援を得やすいようにＭＲＡの活動を合わせていかねばならぬと述べた。彼としては、相馬雪香が翻訳したフランク・ブックマンの講演集の出版を進めるということであった。この「世界を再造する」という本は毎日新聞から直ちに出版されることになった。

労働組合の二人からは、今後の闘いの雰囲気を感じとることができた。三井炭鉱労組の阿具根登委員長が訪ねて来て一時間ほど話すことができた。彼はマキノ島での体験を四十二回にわたって報告したが、二万人余の組合員からも良い反応があったと語った。しかし彼らは激しい階級闘争にさらされており、ＭＲＡ以外には具体的な答えがないと思う、と語った。最大の労働組織である総評の武藤武雄委員長とも長時間話すことができた。彼は各組合内にマルクス主義を信奉する人々とそうでない人々との間に微妙な力の均衡があることを率直に認め、ＭＲＡは極左の人々から「資本家の手先」と中傷されていると語った。

MRAハウス誕生に向けて

そうこうしているうちに、はからずもMRAハウスの獲得を結果的に進めるような出来事が起こった。共和党のアレキサンダー・スミス上院議員（訳者注　共和党、ケン・トウィッチェルの岳父）夫妻と上院外交委員会で彼と民主党で同じ立場にあるスパークマン議員がフォスター・ダレス大統領特別顧問に合流して韓国の視察に向かうことになり、来日したのである。マーガレット・ウイリアムスと共に彼らを夕食に招いて日本の各界の指導者たちと講和条約と安保条約に関する基本的な問題について話そうということになった。私たちは一万田尚登、本田親男、加藤勘十・シヅエ夫妻、戸叶里子、栗山長次郎、全電通委員長久保等、堀内謙介、三井高維・英子夫妻、相馬恵胤・雪香夫妻を招いた。こうした異なった立場の人を招くことはリスクを冒すことでもあった。社会党は講和条約の一部には悲観的な見方を持ち安保条約には正式に反対していた。一方、一万田、本田、栗山などは政府の対アメリカ政策の熱心な支援者であった。

夕食会の冒頭は警戒的な雰囲気が漂った。一万田は首相との会談を切り上げ疲れきって到着した。久保は座り込みストライキ交渉の現場から直接かけつけた。本田は日程を変更し大阪からかけつけた。上院議員たちはアメリカの政策に対してはっきりした批判をする日本人とはそれまで直接出会ったことがなかった。七面鳥のおいしい夕食が緊張を和らげ、私たちは上院議員たちに講和条約と安保協定に対して日本のゲストから反応を聞くように提案した。この質問はたちまち本田、一万田、栗山と加藤勘十との間で活発なやりとりを生じ、自民党と社会党、実業家と政治

家との間の基本的見解の相違を浮き彫りにした。スミスとスパークマンは相馬雪香の通訳を通してこの議論に感動したようであった。しかし意見の大きな相違も整理され、二つの重要な点について合意が得られた。一つは政党、銀行、経営者と労働組合での基本的道徳の向上の重要性。一つは国の指導者や国民に対するイデオロギー教育の重要性である。

スミスとスパークマンは別れ際に、日本人同士のかくも率直な会話を聴けたことはとても得難い体験であったと語った。これまで一緒に顔を会わせることなどなかった人々が今夜一同に会し、しかもこんな重要な問題について論じたことは二人のおかげであると、私は二人に述べた。驚いたことに普通は九時には帰る日本のゲストは真夜中まで残った。話し合いは続き、皆この新しい前向きな関係を堪能しているようだった。

この夜の結果はたちまち一万田の秘書からの電話になってあらわれ、総裁が十二月二十五日総裁公邸で昼食会を開き財界の指導者を呼んでMRAの支援について検討したいとのことであった。彼は三井高維、相馬恵胤、ギレスピーと私に同席して欲しいとのことである。あの夜はMRAハウスが有効に使われうるイメージを一万田に与えたようであった。日本において十二月二十五日は普通の仕事日であった。私たちはそれもクリスマスの有意義な祝い方だと思い、喜んで招きを受けた。

この席に一万田は、経団連の石川、日本第二位の三菱銀行の千金良、大正海上火災の山根、帝国ホテル社長の犬丸を招いた。一万田の要請で三井は日本におけるMRAの活動全般を説明し、続いて相応の財政基盤の確立と活動のセンターとなる家の必要性を述べた。一万田は東京の家の

取得を最優先とすることに賛成であると述べた。センターの必要性については一般的な合意はあったものの、より多くの人を巻き込むまでははっきり決めかねるというためらいもあった。そこで一か月後にもっと各界を代表する人々を集めて検討しその人々の提案にそって動こうということになった。あとで三井と相馬にどうだったと尋ねると、二人とも思ったよりことが早く進行していると喜んでいた。物事の決定の前にまずあらゆる観点から検討してみるという日本的なやり方を経験したのはこれが初めてであった。

私は三井高維に、一万田や他の銀行家へ数日おきに電話して進行状況を確かめるよう催促した。受話器を切って三井がいつも決まり文句のように言うのは、「一万田は検討中です」と一万田の秘書が応答している、ということであった。この言葉は私たちの合言葉のようになったが、これは案がいい内容で固まるまでははせかされたり、手の内を見せることを拒む典型的な日本のやり方である。日本人は熟考的というよりはむしろ活動的な国民ではあるが、独自のペースでしかも独自のやり方で動くため、私たちアメリカ人には何かわかりづらいものである。

ある朝一万田から連絡があり、資金調達とMRAハウスについての第一回目の話し合いを招集し、財界、政界などから二十五人の有力者を招くということであった。その中には石坂泰三、石川一郎、日立製作所社長倉田主税、東洋レーヨン（現・東レ）会長田代茂樹、京都の湯浅電池社長の湯浅佑一などが含まれていた。また国会からも栗山長次郎、戸叶里子、加藤勘十が呼ばれていた。今回も一万田は三井に矛先を向け、結局彼が、進行役を務めることになった。一万田は何も発言せず、銀行家や実業家は彼が切り出すのを待っている感じで、しばらく重苦しい雰囲気で

あった。三井は、楊夫妻はその家の売却に千六百万円を望んでいると報告したが、資金に乏しい当時、それは相当な額で、アメリカでは数百万ドルの投資に相当した。

とうとう一万田がこの額は寄付とローンで賄えるので、皆で取り組むべきだと発言した。「火の玉」勘十も火を吹き、彼は社会党の仲間と共にできるかぎりのポケットマネーをかき集めると迫ると、実業家もこれに感化されて、倉田が堂々巡りはやめて寄付が集まる間は無利子ローンを組もうと提案した。一同同意をして会合は終わり、一万田は退室した。三井は彼のあとを追い、一緒にエレベーターに乗り込んだ。一万田が銀行家の一人に「やりたまえ、ローンを組みなさい」と話し、「はい、わかりました」と答えるのを聞いた。

三月の終わりには寄付と銀行の無利子ローンとによって充分な資金が集まった。楊夫妻は、彼らの新しい家が空く四月二日に家を空けてくれることを約束した。四月一日にマーガレット・ウイリアムスにワシントンにいる家の持ち主夫妻から電報が入り、翌日東京に戻るとの知らせであった。初め彼女はエイプリル・フールの冗談かと思ったが、そうではなかった。私たち一家は朝家を出、その夫妻は午後到着した。正に間一髪であり、私たちの信仰と祈りに神が応えてくれたものと思われた。

その日の午後ジーンと私は国会内で両院の各党議員によるレセプションに招かれた。インフォーマルなミーティングで私たちと議員数人が話をした。そこから私たちは車で各国の大使館が多い地域にあるこの新しい家に向かった。母屋は二階建ての石造りで、会合に使える大きな部屋が奥にあった。敷地内のロータリーの奥には立派なポーチの玄関があった。高い塀に囲まれた庭には

広い芝生、石灯籠、多くの花壇、樹木、そして庭石があった。車庫の隣には三人が寝泊まりできる別棟があった。私たち一家と共に相馬豊胤、登喜子夫妻も同居することになったが、二人の献身的な努力によってハウスは単なる活動の拠点ではなく、人が立ち寄りやすい温かい雰囲気の家になった。別棟を改装し隣接する二軒の小さな家も購入したのでほかにも何人か加わるようになった。それから六年間にわたって何百人にも上るさまざまな分野の有力者や庶民がこの優雅な建物の扉をくぐることになった。昼食会や夕食会、さらに朝食会までが開かれ、時には身の上の問題の助けを求めに、時には私たちの活動を知るために、時には分裂を癒やしたり、家庭や産業や国の政策に関する行き詰まりの打開を話し合うために多くの人がここを訪れた。対立する政党の長老議員同士が毎週ここでプライベートに朝食を共にし、国の問題に対する建設的な対応を話し合った。総理大臣代行が、政治的危機に対応する知恵を求めて、夜ひそかにやってきたこともある。二つの旧敵国の人々が、初めて日本国内で日本人と会したのもこの家であった。

最初のレセプションには数百人の国会、実業界、労働組合、そして政府関係者が夫人同伴で出席した。外の芝生に一同が集まると広島の山田節男参議院議員が特に発言を求めた。各界名層の人々の間に調和の精神をもたらすこの場所は、戦後の日本にとってアメリカ大使館よりも重要な貢献を果たすであろうと挨拶した。ゲストの一人は化学同盟委員長の山花秀雄で社会党左派の中心人物であった。加藤勘十の古い同志で、かつて革命的マルクス主義者として一緒に投獄されたことがあった。階級闘争を信条とする彼は見るからにぜいたくそうなこの場所に対して疑心暗鬼で批判的であった。しかし午後の間に彼も打ち溶け、別れを告げるころには大きな丸い顔に温か

かい微笑が浮かんでいた。彼はやがて親しい仲間となった。

ＭＲＡハウスの購入に携わった人々はＭＲＡの運営費作りにも取り組みを始めた。文部省はＭＲＡを公益法人として認可し支援企業が参加できるＭＲＡ協力会もできた。企業は慎重な審議を経たのちに活動を支援することを決定すると予算に計上し、あとの使い方はＭＲＡに任せた。私たちの方は多くの企業内の労使協調、生産性、創造性の向上につながるような訓練プログラムなどの活動を提供した。会社のほかにも多くの個人や家族が、少ない収入のなかから多大の犠牲を払って定期的な寄付をするようになった。私たちのやり方は、社会に必要なことを行えば、私たち自身の必要も必ず満たされるという信仰の上に立つものである。

第七章　チーム作り

日本の賛同者たち

活動拠点の確保以上に、新しい国と新しい世界のために生き、尽くそうという志を持った人を得ることの方が一層重要であった。中核になるフルタイムの人々の周りには、前年の夏マキノ島に行った木村行蔵、片岡義信、鶴田重蔵をはじめとした何組かの家族がいた。この三人は戦略的に重要な国営組織の幹部で、学んだ確信を職場や妻と子供たちと実践し始めていた。

当時、警察の世界で鈴木栄二の名は広く知られていたが、木村行蔵も日本全国一万二千の交番の責任を担う警羅交通課長として国家地方警察で名が知られる存在になりつつあった。国家地方警察は当時国家の治安維持の最前線に立っていた。一人勤務の交番が共産党の過激派に襲われ警察官に死傷者が出たりしていた。木村は二つの大きな目標を持っていた。一つは地域社会の住民の信頼と尊敬を得られるように警官を訓練することで、もう一つは、各地域の警察間の対抗意識やあつれきを克服して、全国の警察をより効果的に機能させよう、というものである。戦後日米

の双方とも警察国家の復活を恐れるあまりに警察力を分散し、能力が低下していたので、犯罪に対処するにはこれは極めて重要なことであった。木村の計らいで国家地方警察の幹部のために定期的に訓練講座を設けたり、警視庁幹部用のミーティングを開くことができた。彼は、こうした会合は彼が進めてきた仕事をもっと効果的に進める上で非常に役立ったと述べた。

どちらかというと用心深い官僚であった片岡は、マキノ島での体験を通して創造的な改革者に変わり、同僚を驚かし部下の目を見張らせた。国内最強の労働組合の一つ国鉄労働組合はこれまで戦闘的な労働運動を展開してきたが、片岡が同僚との人間関係を改め、部下との対応に「誰が正しいかではなく、何が正しいか」という考え方を実践していったことが、管理職と組合の両方に影響を与えた。一九五一年（昭和二十六年）の暮れ以来、国鉄本社や全国の駅で多くのミーティングが開かれた。それから五年間の間、多くの日本人には国鉄とMRAとの関係が認識されるようになった。国鉄のあらゆるレベルの数百人の社員が職場でその活動を行った。役員、地方幹部、駅長から一般職員に至るまで国鉄全体で正直で信頼感に満ちた雰囲気作りが行われた。

日本の電信電話制度は電気通信省によって運営され、その組合は共産党の戦略的標的の一つになっていた。鶴田は訓練課長に就任すると労使関係の改善と組合内の健全な勢力の強化を図った。彼を通して私たちは全電通の二代の委員長と知り合い、親しい友人となった。続いて鶴田は田村文吉電気通信大臣（訳者注）と共にMRAの訓練コースを設置し、数千人の職員が受講した。まもなく電気通信省（訳者注　後に日本電信電話公社）は労使協調のモデルと称されるようになった。やがてこれらの人々を中心とする定期的な会合が開かれるようになった。家庭生活や日々の

生き方、そして職場での責任といったテーマを話し合った。ＭＲＡをもっと知りたいという一般の要望に応えて、国鉄講堂でミーティングを毎週開くようになった。このミーティングは、メディアの協力も得てＭＲＡを広く理解してもらったり、自分の体験を発表する経験を積んでもらったり、友人を活動に誘ったりする機会を提供することになった。

こうした一般集会は、毎回違った人が新しいことを話したりして思いがけない面白さがあった。例えば第一回は国鉄の重役、駅長二人、赤帽、東大の学生、自民党国会議員、皇宮警察の警視と巡査といった具合であった。翌週は電機工場の機械工、主婦、神社の宮司、国家警察学校長、神戸の埠頭会社常務、大阪大学の学生委員会委員長、東京中央電話交換局局長であった。

話をする人は広範にわたっていても、話の基本テーマは一貫していた。個人の道徳的変革、正直で幸せな家庭、対立や争いやごまかしから解放された工場やオフィス、職場や家庭で社会に対する新しい責任に目覚めた人々、といったテーマであった。毎週数百人の人々が集まり、東京以外の地域からも参加者が増えた。新しい人生を生きるという決心をした人々や、何かの活動に参加したいという人々が混じっていた。国家地方警察、電気通信省、国鉄といった大組織の人々にもＭＲＡチームのようなものが広まり、私たちの手の及ばぬ数千人の人々に広まっていった。

やがて地方からも集会の要請が殺到し、小さなチームを作って大阪、神戸、京都、広島や小さな市町村などにも出かけるようになった。各地では新聞やラジオのインタビューに応じ、市長や知事などが一緒になって歓迎や催しの後援をしてくれた。マキノやコーの同窓生がしばしば私たちのホスト役を務め、移動チームと行動を共にした。ネットワークも全国に広がり、こうした人々

や新たに友人となった人々のために隔週刊の「MRAニューズ」を、発行することになった。購読者の中には国の指導者も多く含まれ、実際に熱心に読んでくれていることがこれらの人々との話でわかった。

国鉄、国会地方警察、電気通信省のほかにもう一つ影響力のある産業が活動に参加するようになった。当時重電機製造産業は日本の経済復興の花形であり、内外の市場で産業界全体で最大の拡大を始めていた。一九五〇年（昭和二十五年）にはテレビ、冷蔵庫、洗濯機はほとんど日本では知られていなかった。五十年代の終わりには七割の家にテレビが入り、冷蔵庫と洗濯機も一般の家庭で使われるようになった。日本のトランジスターラジオやほかの電気機器が世界に知られ始めたのもこの頃である。このブームがなければ日本経済があのような拡大を遂げることはなかった。日本が輸入しなければならない多くの原料、石油、食料などを外国から購入するのに必要な信用を獲得する大きな役割を果たしたのもこの電気製品の輸出であった。

東京に着いてまもなく私たちは重電機協議会の昼食会で話をすることになり、日立、東芝、三菱電機、富士電機の四大メーカーの社長と重役が同席した。三時間にわたって私たちの話を聴き、質問が寄せられたが、これが産業内のチームワークの実験台になり、出席者の発言ははるかに多くの人々にまで影響を与えることになった。この会合の模様は日経連の発刊していた「日経連タイムス」に掲載され、多くの経済人に読まれた。

一九五二年（昭和二十七年）日経連タイムス

職場秩序確立に新しい試み

MRA精神を労使関係へ　重電機業界で推進

重電機協議会では一昨年東芝社長石坂泰三氏がスイスの「コー」へ、さらに昨年は同社高橋専務、角田前重機労連委員長および長谷川前東芝新労連委員長などがアメリカの「マキノ」へと夫々MRAの世界大会に出席した関係から、かねてMRAの理念を導入して労使関係の調整を見いだそうという動きがあったが、たまたまMRA国際代表らが日本における同運動の推進のために来朝したのを機会に、産業界としては初めてのMRA懇談会を開いた。戦後におけるわが国の労使関係は、経済的、道徳的な混乱に伴って非常に歪められたものとなり、経営者および心ある労働組合指導者としてはこれの立て直しに心を砕いている時でもあるので、MRAの指導理念を労使関係に適用することは、職場秩序の確立ひいては生産性の向上に寄与するところ大なるものとして注目されている。同会合に出席したおもな顔ぶれは次の通りである。MRA側――エントウィッスル氏夫妻（MRA国際代表）、ギレスピー氏（同上）、三井高維氏夫妻（MRA東京チーム、以上同）、相馬恵胤氏夫妻、相馬豊胤氏、三谷真種氏、重電機経協側――石坂社長、高橋専務（東芝）、倉田社長、児玉取締役（日立）、和田社長（富士）、小野常務、前原取締役、中川勤労部長（三菱）、なお同会合におけるスピーチの要旨を以下に紹介しよう。

われわれの生活は経済的な要素によって支配されていた時代から移ってすでに今日では思想――イデオロギーが経済的な要素をも使ってわれわれの生活を支配する時代に移っている。現在政界、産業界を動かしている大きな思想の一つである共産主義は世界に分裂と相克をもたらして多大の損害を与えている。

左にもせよ右にもせよ一つの国を動かしうる思想に対し得る答えは何か、これがMRAが答えようとするものである。

MRAは政党でも組織体でもない非常に簡単であるけれども、革命的な思想に根底を置く世界的な性格を持つ。MRAの創始者ブックマン博士は言った。「凡ての人は相手が変わることを望んでいる。然しながら本当に世界を変えて新しいものにしようと思うならばまず自分を変えることではないか」と。不安や恐怖のない世界、苦しみのない世界を造るためにMRAの主張することは、相手が自分の希望する通りになってくれるのを待つのではなくまず自分から変わることを始めるということにある。自分の生活の根底において何が正しいかという考え方を採り入れるのであって、誰が正しいかとか正しくないかとかを論ずるべきではない。そうしてこの考え方を自己から始めて更に家庭へビジネスへ、政治へとおよぼそうとするにある。

ルール炭鉱労働者や英米港湾労働者に見られた変化の例を引くまでもなくMRAは日本の労働組合にも真の意味の大きな影響を与えると確信すると同時に、もし日本の産業家と労働者とが互いに手を携えて行くならば全世界に正しい在り方を教えるその道を示す大きな宿命を担当しえると信じているものである。

労使対話の始まり

この昼食会に続いて東芝と三菱においても経営のトップと労働組合の幹部が同席する同じような会合が開かれた。両社とも勤務時間内の三時間にわたり八人のパネリストがスピーチし質疑にこたえた。この会合で最も意義があったことは大会社の労使が交渉以外の目的で初めて同席したということである。労使対立で知られていた産業に労使協力という先鞭をつけたのであった。

三井高維はこの一か月の間に経済界との重要な会合をもう一つ企画した。三井系二十六社の社長との昼食会であるが、戦前三井帝国を形成したこれらの会社は戦後アメリカによって解体されていた。しかし法律的には分離していても実際には緊密な関係が静かに復活され、一九五〇年代初めには日本経済に強い影響を及ぼしていた。

第一物産（訳者注　現・三井物産）、三井銀行、三井化学、三井鉱山、日本製鉄、三井造船、東洋レーヨンなど多彩な経済活動を誇っていた。各社の重役は時には意見や利害の相違はあっても、市場の動向、注文生産、流通を有効に予測するために必要な情報を蓄積することができた。

この昼食会は三時間に及び、われわれは世界全体の情勢や、さまざまな対立や問題に答えを与えようとする建設的な勢力が存在するという実例を伝えることができた。出席者の何人かは親しい仲間となった。

こうしたチーム作りの最も大きな成果は、政府、国会、産業、金融、労働組合、学術界などの分野で国のかじ取りを担っていた指導者たちとほぼ毎日のように連絡を取り合えたことである。

日本における指導者間のチームワーク作りは他の国々に比べある意味では易しく、ある意味では難しかった。一つの利点は日本にはルーズベルト、チャーチル、ドゴール、アデナウアーといった傑出した指導者がなく、日本の復興を担った人々の偉業は個人の才気によるのではなくむしろ集団が協力し合って働ける能力にあった。しかし一方では保守党と社会党、労と使、大企業と中小企業、インテリと活動家、農村と都市といった対立する立場を代表するグループの間にはほとんど共通する基盤がなかったのである。

間もなく、自分の立場を超えて国全体に必要なことのために時間と知恵を提供して、一緒に取り組もうという頼りになる友人たちが出てきた。最も強い共感を示したのは最も多忙な人ばかりであった。国会では北村、栗山、戸叶夫妻、加藤夫妻、星島、受田新吉（社会党）、山田節男が中核となり、その周りに道徳の原則の重要性を説き、かつ実行していく議員の輪が衆参両院に作られていった。主に連立与党の各派閥と社会党穏健派の人々であるが、二年後には参議院の社会党若手左派の活発なグループがこれに加わるようになった。久保等、永岡光治、山花秀雄、鈴木強で労働組合の全国組織の委員長を務めた人々であった。

実業界で重要な役割を果たしたのは、一万田尚登、石坂泰三、経団連会長石川一郎、日本通運社長早川慎一、三和銀行頭取渡辺忠雄、飯野海運社長飯野清二、日経連代表常任理事諸井貫一、大阪商工会議所会頭杉道助などである。ほかに浜井広島市長、原口神戸市長、赤間大阪府知事、天野文部大臣、梶井電電公社総裁、本田毎日新聞社主、大橋日本女子大学長などがいる。

国のベストを動員し、間違ったことは正そうという使命を担おうとする人々は、自らの立場や

領域を越えて大きな視野や考え方を持っていた。経営者は組合員を人間として認めるようになり、保守党と社会党の間でもそれまでの対立関係を一歩超えた関係ができ始めた。官僚たちも、それまでは単なる統計としてしか見ていなかった国民とも交わるようになった。それまでほとんど存在しなかった、政党、階級、見解の違いを超えた長く続く友情関係が形成されていった。

ＭＲＡハウスにおける最初の昼食会はこうした橋渡しの始まりであった。主賓はＭＲＡの良き理解者であるニューヨークの銀行家パークス・シップリーであった。同席したのは一万田尚登、渋沢敬三という二人の銀行家、保守党の星島二郎国会議員、日本通運早川愼一社長、東洋レーヨン田代茂樹会長、加藤勘十・シヅエ夫妻と山花秀雄、山田節男という社会党の左右両派の議員であった。昼食会の終わりに、それまでしばしば「ウォール・ストリート帝国主義」とこきおろしていた加藤勘十が、ＭＲＡは極左と極右の対立に対する答えであるというアメリカの銀行家の意見に賛成だと述べた。一万田と加藤が楽しく同席しているとは革命的だと星島が言えば、いや、ＭＲＡでは当然だと一万田が切り返した。さらに一万田はＭＲＡは日本の唯一の希望であるとして、それがアメリカ政府の政策にもなるようアメリカ人に提案した。山田参議院議員は参加者一同に、ＭＲＡの財政を担う非公式の委員会をこの場で作ろうではないかと呼びかけた。加藤夫妻は金の屏風をＭＲＡハウスに寄贈することを申し出、続いて一万田と早川もそれぞれ絵を寄贈することになった。

一九五〇年代初めの東京でこのような会合を見いだすのは困難であった。当初から私たちは社会的、政治的、経済的なギャップを埋める最善の方法はこうした場を作ることであり、それまで

の敵同士も共通の目的のためには闘うことができることを学んだ。これは封建社会の名残りの多いこの国にとっては特に重要なことであった。

私たちが到着して間もないころ、相馬豊胤は無意識のうちに次のような二つのエピソードを提供してくれた。日本人の多くはもう前のように天皇を畏れないと私たちに語った数日後のこと、彼はハウスの居間にかけこんできて、天皇の義理の妹にあたる秩父宮妃殿下が予告なしに玄関に来られたとジーンに告げた。緊張した彼は「早く来て、どうお迎えしたらいいでしょう?」と興奮して叫んだ。後に、彼が私を乗せて市内をドライブ中に違法なUターンをしてしまった。若い警察官に制止され免許証の提出を求められた。免許証をじっくり見た警察官はもしや豊胤が彼の出身の町の出ではないか、と尋ねた。そうです、と答えると「あの相馬様でしたか」と深く頭を下げ「私の父は相馬藩に仕えました。どうか止めたことをお許しください。どうぞ交通規則に気をつけてください」といって免許証を返し、敬礼した。

ここを訪れた人は誰でも、あまりにもバラエティに富んだ人々がお互いを尊重し合いながら仲良く付き合っているのが強く印象に残るのであった。アル中から解放された洗濯屋も最高裁判所の長官と同じようにMRAハウスで気楽にくつろぐことができた。田舎の貧しい家の少女もここでは皇后陛下の女官と同じように大切に扱われた。お互いの違いは違いとして残しつつ、自分が変わるという決意が互いを信頼と誠意の絆で結び、一つのまとまった勢力として成長していった。

第八章　階級闘争を超えて

血のメーデー事件

一九五二年（昭和二十七年）の春は日本にとって試練の時期であった。四月二十八日には講和条約が発効し、占領時代の終結と共に独立を回復することになっていた。待望されたその日は、とりわけ吉田内閣にとっては不安材料もつきまとった。アメリカおよびその太平洋同盟国の一部との安全保障条約も発効されることになっていた。この条約は日本をアメリカに縛りつけることになり、軍事的安全保障をアメリカに頼る一方、この大きな軍隊に基地や施設を継続して提供することになる。共産主義者、社会党左派、知識人の多くや労組指導者のほとんどに加えて、中国大陸やソ連の市場を閉鎖したアメリカへの経済依存にうらみをもつ経済人などの強力な勢力が、こうした西側とのつながりに強く反対していた。

左翼活動家の数はしれており、しかも活動は法律で制約されていたが、政府の内外政策に対する反対宣伝は強力であった。労働者の賃上げ要求に〝平和〟と〝アメリカ帝国主義反対〟とを巧

みに絡め、労組指導者や知識人など聴く耳を持つ人々に浸透していた。講和条約は占領下のいくつかの保護条件の終わりを意味しており、こうした宣伝活動は時を得てますます効果的になっていた。韓国、フィリピン、インドネシアなどの国々は戦争の全面的賠償を要求しており、一次産品の中にはもはや特恵価格では手に入らない物も出てきた。資金難、インフレの増加、低賃金による労働争議の頻発など問題が山積していた。高い税金は、国家防衛に関する項目が初めて予算に実質計上されるとともにさらに上昇していた。日本の補給と施設を必要としたアメリカ軍の特需によって起こった朝鮮戦争景気もすぐに落ちこむと心配する人も少なくなかった。

いつ噴火するかも知れないこうした状況を認識した私たちは、左右社会党の指導者や労働組合の中心人物と共に対応を試みていた。トム・ギレスピーと三谷真種は四百万人の労働組合員を擁する最大の労働組織「総評」の高野実書記長と二時間にわたって話し合ったほか、武藤武雄委員長や幹部とも会談した。こうした会談や社会党国会議員数名との会合の結果ギレスピーは左派社会党の党大会に招かれてスピーチすることになった。四百人ほどの党員が、社会に永続的な変革をもたらすためには人の態度の変化がなければならないという彼の主張に耳を傾けた。続いて彼は加藤シヅエが議長を務める社会党右派の党大会に招かれスピーチをおこなった。この両大会に出席した外国人は彼一人であったばかりか、その後数年間は両大会での最初のスピーカーとなった。左派社会党大会の出席者の中には共産党員も混じっていたが、彼は両方の大会で大歓迎を受けた。

世界中の組織労働者が祝うメーデーには日本全国の都市で労働者の行進が行われることになっていた。東京でも総評が中心部を通って日比谷公園に至る大行進を計画していた。労働組合のほ

かに社会党両派、数千人の大学生、農民、婦人組織などが加わっていた。共産党の中核グループがこうしたさまざまなグループを巧みにデモ隊に編成していたのである。デモ隊は政府の治安維持法、防衛政策、アメリカとの同盟を非難するスローガンをうたった旗や垂れ幕などを掲げていた。行進が日比谷公園に着いた時には五十万人に膨れ上がっており、この一行に対するスピーチが予定され、集会が終わると一行は解散することになっていたが、そこでは終わらなかった。

デモ隊は旗を棒にくくりつけていたが、旗を剝ぎ取ると先端を鉄でかぶせた槍が現われた。公安当局が暴動に対する備えも喚起していたために、警視庁は当時日本が持ち得た唯一の準軍隊組織ともいえる警視庁予備隊一万人の応援を受けていた。

その日の昼すぎ私は大蔵省幹部との会合に向かうために都心を車で走っていた。カーブを切って皇居と日比谷公園の間の道を運転してくるとすさまじい光景に出会った。大きな交差点は走り回り、押し合い、叫び、闘う群衆であふれていた。交差点に着くとそこは多くの群衆で遮断されていた。どうすることもできずそこにとどまったが、荒れ狂った男たちが槍や棒を振り回して青いヘルメットをかぶり警棒を持った警察官と闘う光景が見られた。道の向こうでは横倒しにされた車に火がつけられ黒い煙がたちのぼっていた。左側の皇居前のお堀からそびえる石垣の上では群衆が叫びながらもっと厳しい闘いが展開されていた。私の車のまわりには、潮のように続く闘いの波に押された数百人の群衆が殺到してきて、殺気だった光景にあった。

私は暴動の真っただ中から群衆のむき出しの感情とその正気のたたきあいを実際にこの目で見たことはなく、圧倒されるばかりであった。車の窓を閉め切っていたが、目が恐れに満ちた年輩

の人たちが窓ガラスをたたき始めた。何を言っているのか分からなかったが、ジェスチャーからして、早く出て逃げろと言っているのが分かった。私もそうしようと思っていた時にデモ隊と観衆の間の隙間が広がった。パラオ軍が近くに迫り紅海が目の前で突然烈けたときにモーゼがしたように、私はシボレーのギヤをいれて交差点を抜けた。ナンバープレートからアメリカの軍人か民間人のものと分かる焼かれた数台の車の脇を通った。空中に燃え上がるゴムの匂いが重く漂っていた。

警察庁長官はこの日の死傷者をデモ隊側死者二人、負傷者二百人、攻撃を受けた外国人十二人、負傷した警察官七十六人と伝えた。多くの市でもこれよりは小規模な暴動が相次いで起こり、全国にショックを与えた。多くの日本人は社会党や労働組合の目指すゴールを認めつつも暴力行為を嘆いた。このメーデー事件は多数の人々を共産党や極左に背を向けさせることとなった。吉田内閣はこうした行動に制限を強める対応に出た。私たちは労働組合や社会党の指導者と連絡を取り合っていたが、極左グループが総評や社会党に浸透し大衆の気持ちを巧みに利用して日本の経済や政治に強い影響力をもっていたことがわかった。私たちは、日本が自由で豊かな国になるためには、さまざまな分野の友人たちがまとまって行動することへの支援が急務であると感じた。

一九五二年（昭和二十七年）の四月から五月にかけての活動の焦点は、五月末にアメリカのマキノ島で開催されることになっていた世界大会への代表団の選考であった。マキノ島やコーへの代表編成は毎春の年中行事となり、国の道義的精神的復興を担う指導者の育成に欠かせないことが明らかになっていた。二年前には夢物語であった海外旅行も指導者にとってはそれほど目新し

くはなくなっていた。政府や財界の指導者は他の国際会議に参加できるようになったので、こうしたトップクラスの人々からの申し込みが殺到することはなくなった。それでも相変わらず希望者は多く、今後の全国活動の責任を担えるような人々をいかに選ぶかが大きな課題であった。

最大の問題は一九五〇年（昭和二十五年）と同じく外貨交換の問題で、その後も私たちを悩ますことになった。政府は取得困難なドルを蓄えて一次産品や優先品目の支払いに充てようとしたので、海外旅行用のドル交換は厳しく限定されており、主に重要な公務に限られていた。星島は池田勇人大蔵大臣に話し、大蔵省幹部との面会の道を開いてくれた。われわれはコーやマキノ島の会議は日本の世界市場進出を妨げている壁を打ち破る絶好の機会を与えてくれる、という議論を展開した。この結果六人分に限って認めてもらい多少楽になったが、ほかの人々の経費はアメリカのMRAの助けに頼るしかなかった。旅行の支払いを賄える人からは円で資金を集めた。

階級を超えて

五月末二十人の代表がマキノ島に向かったが、その中には七人の国会議員、二人の労働組合指導者、外科医、神戸市の助役、それに大阪大学学生会委員長などが含まれていた。もう一人の有力な指導者は渋沢敬三で、大蔵大臣や日銀総裁を歴任し与党の有力者でもあった。彼はまた、だいぶ前にフランク・ブックマンのホスト役を務めた渋沢栄一子爵の孫でもあった。国会議員は左派社会党の加藤勘十と山花秀雄、旧華族で現在鉄鋼会社を経営する松平勇雄と繊維会社を経営する山田左一の保守党議員などを中心に魅力的な超党派のチームだった。松平は、メーデー事件や

ほかの暴力事件の原因の一つは、一般民衆のニーズに対する上流階級の無関心や政治家に対する若者のシニシズムにあり、こうした信頼の回復こそ私の責任である、と語った。

山花は国内における真の融和が緊急課題であり、マキノ島で育まれたような異なった主張を持った政治家同士の個人的信頼の和を国会の場で広げるべきだと述べた。理論家肌の長老加藤勘十は共産主義や革命への唯一の答えはMRAの基準の中にある、と説くとともに、「誰が正しいかではなく何が正しいか」の基準で共に働くことによって、一般大衆の信頼を得ることができる、と語った。大会終了後、日本代表はデトロイト、ワシントン、ニューヨーク、シカゴそして西海岸というおなじみのコースを回った。国務省で国会議員のために設けられた二つの会合で、一行は質問に答えて日本における対立の現状を率直に説明したが、党派を超えたチームワークの良さと明解な主張がアメリカ側を驚かせた。バークレイ副大統領主催のレセプション、上院における昼食会、そしてワイリー、スパークマン、スミス三上院議員による昼食会などが続いた。

ロサンゼルスでの忙しいスケジュールを終えて一行は最後の目的地サンフランシスコに到着した。この頃までには国会議員一行は名スポークスマンとなっており、お互いの間に生まれた融和の象徴でもあった。しかしここに至るまでの過程には派手なやりとりもあった。特に思い出されるのがサンフランシスコのシティーホールへの訪問である。市長は口先の上手な政治家で、一行を迎えることを約束していたにもかかわらず一行が市長室に着くと無造作に挨拶し、もう次の仕事に気が向いているそぶりを見せた。日本の国会議員はアメリカの要人への訪問を極めて真剣に考えており、政治、経済、社会問題についての鋭い質問を好み、答えを詳細にメモした上、日本

の状況について何でも答えられるよう周到な準備がしてあった。

市長はほんの二〜三分おざなりの挨拶をしただけでこの会見を終えてしまった。私が大きなドームの下の広い大理石の階段を降りてくると荘重なロビーにこだまする怒号が聞こえてきた。振り返ってみると加藤勘十で、真っ赤な顔をして腕を振り回し、気取ったアメリカの市長に馬鹿な子供扱いされるためにわざわざ太平洋を越えてやってきたのではない、と叫んでいるのだった。「火の玉」勘十のあだ名がついたわけがはっきりとわかった。

しかし勘十は翌日までには気分をとりなおし、三日後の帰国に際しては一行を代表して報道陣に声明を発表した。

「対立と混迷の続く昨今の世界にあって私たちは独裁主義か民主主義、奴隷か自由、戦争か平和という選択に迫られている。朝鮮戦争は共産主義の暴力による戦略に対しては力だけで勝利を収めることはできない、ということを教えている。勝利は優れたイデオロギーと優れたステーツマンシップによってのみもたらされる。私たち一行は政界、財界、労働界の異なる両極の立場を代表している。立場は異なっていようとも、この答えを日本にもたらし日本をアジアの灯台にするという決意は同じである」

帰国後、勘十、シヅエ、山花の社会党の強力なトリオと松平勇雄、山田左一という生粋の保守党議員の二人は工業倶楽部で各方面の大勢の聴衆を前に一緒に演説した。公の席に一緒にしかも仲良く登壇したことが広く関心を集めた。総選挙は十月初めに予定され、政党間だけではなく政党内、特に保守党内部での激しい闘いが展開されていた時期であった。

連合政権内で最大の自由党は二人の議員による激しい権力争いで二分されていた。吉田首相は、占領軍当局によって追放されるまで党首であった鳩山一郎の挑戦を受けていた。追放が終わった今、強力な派閥の幹部として彼は総理の座を目指していたのである。この保守の分裂に乗じて社会党は躍進を望んでいた。自由党内で信望の厚い星島は、ともに親しい二人に働きかけ、当面の和解にこぎ着け、鳩山は総理への挑戦を見合わせた。星島は後に、MRAで学んだ経験からこの対立回避を助けることができた、と私たちに語った。

翌一九五三年（昭和二十八年）夏の世界大会がスイスのコーで開かれ、産業界のチームワークが中心テーマであった。このテーマは当時、私たちが接触していた大企業の労使関係担当者を優先すべきであるという考えと一致した。日本の産業界はいまだに階級闘争の影響が大きく、これに対する答えを具体的に示すことが何よりも必要であった。八月初めにコーに向かった日本の代表には国鉄、東芝、小野田セメントの経営側の労使交渉責任者、二つの鉄鋼会社の副社長、東芝と日立の労働組合委員長が含まれていた。

この年は以前にも増してアジア諸国の参加が多く、一行は第二次大戦中に日本軍によって苦しめられた人々と直接顔を合わせることになった。この中にはマレーシアの国会議長、オーストラリアの国会議員、英国の労働組合幹部などが含まれていた。こうした人々は日本人に対する憎しみから自由になっており、憎しみを抱いたことを謝罪して日本人を驚かせた。こうした和解をもたらす雰囲気の中で、一行のほとんどが自分自身や家庭や仕事に影響を与えるような決心をした。国鉄職員課長の中畑三郎、神戸製鋼の田子富彦副社長、工進精工所の西海図至夫副社長、それに

電機会社の労使がここで行った決心はそれぞれの会社に大きなインパクトを与えることになった。

一行は帰国の途中ワシントンに立ち寄り、連邦議会議員や政府幹部などを訪問するという特別の日程をこなした。ハイライトは、当時は病弱でまもなくこの世を去った労働界の長老ジョン・ライフを自宅に訪ねたことであった。ライフは彼自身がいかに妻ローズや子供たちに対して正直になったか、対立していた経営者との和解、いがみあっていたＡＦＬとＣＩＯの指導者の間をとりもち「アメリカ労働総同盟・産業別組合会議（ＡＦＬ・ＣＩＯ）」を結成させた彼の役割などについて簡潔に語ってくれた。こうした解決への鍵は神の前で静かな時間（quiet time）を持つ時に得られる日々のひらめきや啓示にあって、組合組織や労働争議のもつれた糸をほぐす神の導きを求めることによると語った。ライフが日本の組合運動の状況について尋ねたのに対して日本側は、共産党が分断活動を進めている現状を率直に伝えた。ライフは、あなた方は、人や国を憎しみや欲望、恐れから自由にするという最も重要な闘いを担っている、と語った。

第九章　民主的労使関係を築いた人々

労使関係の変化

一九五三年（昭和二十八年）コーから戻った一行は、階級闘争的な労使対立にとって代わる産業チームワークの哲学推進の中核となった。帰国の翌日、一行は工業倶楽部で開かれた集会で報告した。東芝社長の石坂泰三が財界人、組合幹部、国会議員の前で一同を紹介した。

最後に発言した東芝勤労部長河原亮三郎と東芝労組委員長山村悦郎が最も大きな喝采を浴びたのは、誰もが東芝労使の暗い歴史を知っていたからである。山村は「今まで会社にばかり公平な利益配分を要求していながら、妻と子供には給料の三分の一しか渡していなかった。これからは何が正しいかの基準で労働者の権利のために闘いたい」と述べるとともに、進行中の賃金交渉をＭＲＡの精神で行いたいと宣言した。

東芝の労組が共産党に支配されていたために労使間の正式な窓口がいまだに存在せず、賃金そのほかの事項についても毎年二回交渉し直されるという状態だった。話し合いは長引きほとんど

進展がなく、決着がつかなければストライキを打つデッドラインを組合側は設定していた。河原と山村は直ちに行動に移った。河原は口数の少ない、きちっとした、あまり打ち解けにくいタイプで官僚かと間違いかねない男であった。一方の山村は屈強で厚い胸をもち、大きな口ひげをはやして派手な高笑いをする男であった。海外旅行を通して二人は多くの意見の違いについて率直に話し合い、敵対し合っていたことを互いに謝り、親しい友人になることができた。

この二人が交渉に加わるや否や雰囲気は一変した。交渉時間は短くなり、果てしない口論の代わりに、双方が申し入れを簡潔に発表し相手の言い分に耳を傾けるというようになった。組合は不合理な要求を突きつけなくなり、その代わり要求を裏づける具体的な数字を示した。ストライキのデッドラインの前日、河原は組合側の要求のほとんどに同意し、実際できるかぎりのことは正直にやったので、これ以上の譲歩は誰の利益にもならない、と言明した。組合代表は、もし河原が本当だというのであれば彼を信じて会社側の案を呑むと答えた。組合執行部はこの案を二十二対十二で承認した。

数か月後、東芝労組の長谷川元委員長は労使の新しい協力によって具体的な成果が上がったと次のような例を披露してくれた。ある工場が毎月八百万円の赤字を出しており、会社側はその閉鎖を決定していた。しかし河原と山村が帰国してから数週間のうちにその工場は三百万円の黒字を出し会社側も先の決定を取り消した。

東芝における前向きな改善はまもなくほかの五つの重電機会社でも見られるようになった。これらの会社の労使が参加した産業会議で、東芝の代表は自らの体験を詳細に報告した。このあと

重電機やほかの産業の工場において数々の会合が開かれ、河原と山村をはじめとした東芝の仲間が新しい労使関係とその具体的な成果について話した。それから間もなく三菱電機、富士電機、日立製作所やほかの電機会社でも同じような協調路線がとられるようになった。

日本の産業界全体にとって、これ以上時宜を得た協調路線到来のタイミングはなかった。数か月前私が東芝に石坂社長を訪ねた際、話の途中で彼は机に手を伸ばし、小さな琥珀色のプラスチック製品をとって私に渡した。

「この小さな物体がうちの会社や日本の産業全体に革命をもたらす」と彼は説明した。エレクトロニクスについて無知な私は彼にとっては悲観的な印象を与えたに違いないが、石坂のこの言葉は予言的であった。彼はアメリカの関連会社ゼネラル・エレクトリック訪問から帰国したばかりで、東芝や他の電機メーカーが受けた特許や、日本のメーカー自身が開発した多くの特許の先駆けとなるシリコン・チップを持ち帰っていたのである。

日本の産業が技術革新によって大きく世界市場や国内市場への躍進を始めたこの時期に、激しい対立の時代が建設的で人間的なパートナーシップの時代に取って代わり始めた。こうした協調関係なくして電機産業がこのような台頭を果たし得たかどうかは疑問である。電機産業における成功が〝日本の経済奇跡〟をもたらしほかの主要産業へも波及していった。合成繊維、造船、鉄鋼といった産業では工場や労働組合や経営組織で活躍するMRA関係者による働きの恩恵を受けた。合成繊維の代表的メーカー東洋レーヨン、八幡製鉄、石川島重工などではストの回避、労働条件の改善、賃上げ、生産性向上といった具体的な事例が起こった。

巨大な石川島重工業の労使関係を一変する中心的役割を果たしたのが組合の若き委員長柳沢錬造である。彼の人生が大きな転換を遂げたことで家庭が円満になって、妻はもはや〝組合未亡人〟ではなくなった。彼はコー滞在中にこれまでの組合活動の進め方と自分の責任とを見直し、それまで長引いていた賃上げ交渉に新鮮な風を吹き込んだ。彼は、組合側が分析した経営コストや利益の分析とともに、賃金や賃金外給付に対する率直な要求をすべて経営側との交渉のテーブルに乗せることで組合執行部を説得した。組合側はそれを実行する一方で会社の帳簿を組合側に提示させるという、前代未聞の要求を経営側に行った。

土光敏夫社長とは私たちも何回か活発なやりとりをしたことがあったが、広い視野とビジョンを持った人で後に石坂と同じように日本の産業界の頂上を極めた。土光は柳沢のこの挑戦を受け入れ、経営側と組合側の双方を驚かしたが、この会社の労使関係は極めて安定し、ほかの産業に対する模範となった。この新しい流れは直ちに三井造船や日立造船にも伝わり、造船業は大幅な拡大を遂げ日本を世界一の造船国に導いた。

コー代表団のほかのメンバーも、学んだ体験を実行していた。一万二千人の組合員をもつ日立製作所労組総連の石垣忠保委員長は彼が体験した心の変化を組合員全員に話した。給料の多くをギャンブル、酒、たばこなどに無駄遣いしていたのをやめて家庭も円満になったことを述べるとともに、組合の代表として自己規律に欠けていたことを組合員にわびた。組合員はＭＲＡに定期的な寄付をすることを投票で決定した。のちに彼の職場のトップが、自分の生活を正したいと彼の助けを求めて訪れた。工進精工所の西海図至夫副社長は従業員を集めてコーの報告をし、年金

の増額、全従業員に対する特別ボーナスの支給、重役と一般従業員が一緒に食事ができる食堂の設立などの改革を行った。

三人の若手活動家

こうしてますます広がる活動を助けるために、一九五三年（昭和二十八年）の秋には外国から数人の人々が加わった。ドイツのルール地方の炭鉱夫で共産党の活動家であったマックス・ブラデック、ナチ占領下でレジスタンスの闘士だったノルウェーの青年イエンツ・ウイルヘルムセン、ヒットラーの青年組織のメンバーであったフロウイン・ユンカーなどであった。

ブラデックら三人の来日は産業界ばかりでなく政党においても階級闘争的考え方を変える流れを進めることができた。当時日本人の間にはドイツに対する関心が強く、ブラデックたちは充分それを活かすことができた。彼らは国鉄労働組合執行部のほか全逓などの組合、東芝のトップと組合幹部、紙パルプ工業会、重電機工業会などを訪ねた。また全国都道府県知事会議で四十六人の知事全員を前に五十分間講演をしたほか、各政党の二十四人の幹部の議員が国会の委員会室で彼らの話を聞いた。

十二月には造船工業会、日本鉱業協会、鉄鋼協会がこの三人を昼食会に招いて話を聞いた。次は国家警察の百二十人の幹部への講演、そして最も画期的な出来事は、マルクス主義の影響を受けた人も含まれる全国紙の計十二人の論説委員およびデスクとの二時間にわたる記者会見であった。この内容の概要は日本新聞協会を通じて全国のすべての新聞に送られた。ＮＨＫもブラデッ

クの話の一部を放送した。

マックス・ブラデックが自分の人生を変えた体験やルール地方の共産党に与えたＭＲＡのインパクトの話に最も感激した一人が最高裁判所の田中耕太郎長官であった。夕食に招かれた彼は、ブラデックが道徳の絶対基準で自分の生活を検証し間違ったことを正すことによってキリスト教の信仰に目覚め、共産主義理論の矛盾を違った視点から認識できるようになった、という話に圧倒された。

「クリスチャンが信仰を正しく生きなかったために、ドイツでは共産党が社会に必要な変革の旗頭となることを許してしまった」と語るブラデックに、著名なカトリック教徒でもあった田中は畏敬の念を込めて聞き入った。

この冬、別の分野でもマルクス主義哲学に代わって建設的な考えに入れ替える絶好の機会が訪れた。戦後進駐軍当局は国家主義的な教えを取り除くために学校の教科書の書き換えを命じていた。新しい教科書の著者の中にはマルクス主義者もおり、その考えが歴史や社会科の教科書に影響を与えていた。この秋、文部省は内容をある程度変更することにしていたが、社会科ではＭＲＡについても教えることになった。ところが教師がＭＲＡについて教えるのにふさわしい教材がないことがわり、すべての学校に行き渡る文部省の雑誌に載せるため二千語の記事を書くよう私たちに依頼してきた。また私たちはすべての社会科の教師が使う本を書いている大学教授とも懇談する機会を与えられた。後にＭＲＡを紹介する記述が載った中学生用の教科書数冊が出版された。

教中学社会（3学年）　美濃部亮吉　小山文太郎著　清水書院
昭和28年検定30年使用

（訳者提供）

すべての仕事が休みになる正月には、約百人の労使代表に数人の国会議員も加わって箱根の温泉で数日間の会合をもつことができた。温泉というところは理想的で、ミーティングが終わる度に男性たちは大浴場へ、女性たちはもう一方の大浴場へと向かった。濃い湯気の煙が熱い湯船に身を沈めた人々を覆い、目まいを払う冷たいタオルを頭に乗せた顔だけがのぞいていた。国会議員も、会社の重役も、労働組合指導者も、湯船の中では自分の肩書から解放されて、ミーティングで取り上げられた話題について活発な議論をし本音の意見を述べていた。この週末ほどお互いに心を開いて具体的な話をしたことはなかった。

多くの議員や労使の代表が夫人を同伴したこともこの会議の新しい特徴であった。当時夫人がこうした会合に招かれること自体が稀であった。夫人同伴で出席したある実業家は、妻が二十七年の間に家を離れたのは買い物と実父の葬式の時だけだったと語った。しかし彼がコーに行って全く一変した。夫人た

ちがただ単に同席するだけでなく、はっきりと自分の意見を述べることも素晴らしいことであった。

高橋恒祐専務の率いる東芝代表団は最近合意したばかりの新協定に至るまでの素晴らしい体験を披露した。ほかの大手電機メーカーからも労使の代表が参加していた。多くの人々が酒、妻との正直な関係、夫や父としての責任などについての決意を語るにつれ、会場には奇跡のような雰囲気が漂った。社会党の戸叶里子国会議員はその場の参加者の気持ちを次のようにまとめた。

「私たちがコーやマキノ島で体験したことが日本でも起きるとは思いませんでしたが、それが起こったのです!」

この年の初めにカリフォルニアから着いたアメリカ人は、ブラデックたちが進めていたキャンペーンの大きな力となった。彼はジョージ・イーストマンというカリフォルニアの有力な実業家でロサンゼルスの商工会議所会頭を務めたことがあった。この頃日本は閣僚や国会議員をも巻き込んだ増収賄事件の発覚で揺れ動いていた。大手の造船会社が政府からの受注を目指して政治家に賄賂を送っていたいわゆる造船疑獄事件であった。調査が進むに従い、吉田内閣が崩壊するかも知れないというわさも流れた。ほかの産業にも波及しており、国会ばかりか実業界にも動揺が起こっていた。こうした状況下でジョージ・イースマンとマックス・ブラデックは正直の必要性と正直が失われたときの状況について率直な意見を述べた。二人は資本家と共産主義者としての経験から、汚職に侵された民主主義と自由は長続きしないということを警告した。

ブラデックとイーストマンが国鉄の幹部に講演したあと、十河総裁は監察官に就任したばかりで私たちの仲間でもある片岡義信に対して、国鉄内の汚職やスキャンダルを防ぐためにMRAを

推進するように指示した。

ブラデックとイエンツ・ウイルヘルムセンも社会党の左右両派の大会で講演し、同様に反響を生んだ。社会が変わるためには人の動機が抜本的に変わらねばならない、と二人は説いた。これはたばこの煙でもうもうとした会場に一抹の涼風を吹き込み、両派の大会とも二人は一番大きな喝采をあびた。ブラデックは政府の中枢である自由党の幹部にも話をし、歯に衣着せぬ話にもかかわらず大歓迎を受けた。ブラデック、ウイルヘルムセン、ユンカーの三人はNHKの最高幹部数人とも一晩意見を交換した。ブラデックはソ連や東欧向けの短波放送で話したあと、NHKの全国向け放送で西ドイツの石炭産業におけるMRAの影響について話した。四月中旬、日本を離れる前にブラデックは当時、労働界の最高実力者であった総評の高野実書記長と会った。彼は組織労働者を左の路線へ導いた男で、共産党の秘密党員かと疑う人もあった。二人は一時間以上にわたって意見を交換したが、ブラデックは、社会主義者として出発したのち、共産主義者になり、今ではそれに勝るイデオロギーを発見したと語った。人の道義的規律を育むMRAを高く評価すると高野は応え、MRAが革新的な行動であることを理解してくれた。

イーストマンとブラデックは、こうした講演を行う一方、東芝で芽生えた動きを広げるために企画された企業訓練プログラムに参加した。これには日立造船、石川島重工、三菱電機、国際電々、三井鉱山などの大企業が参加した。階級闘争や労使対立に代わるもう一つの画期的な進展があった。イエンツ・ウイルヘルムセン、マックス・ブラデック、中嶋勝治などによる積み重ねの結果、若手の左翼指導者との堅い友情関係が築かれたのであった。全員が後に炭労、国労、全電通、全

逓、化学同盟などの強力な労組の全国委員長を経て参議院議員となった。皆激しい気性をもった論客で保守党政府の政策にはほとんど反対し、アメリカに不信を抱いていた。一方、彼らが属する組合の乗っ取りを謀った共産党とも闘った経験を持ち、共産主義には反対であったが、それでも時々共産党の宣伝に乗って、同調させられることもあった

自分のあり方が国のあり方

彼らがMRAハウスを訪れる機会も増え、内外の問題について腹蔵のない意見交換をした。保守の人たちからみれば危険な急進主義者と見なされた彼らは、左翼陣営の中で建設的な影響を及ぼすようになり、暴力や過激な活動とは一線を画すようになった。特に親しくなったのは全電通委員長の鈴木強で、戦後の混乱期を代表するような人生を生きた人であった。

小さな町の郵便局長の息子として、保守的な仏教徒の家庭に育った彼の人生は戦争によって大きく狂った。陸軍に召集され、シンガポール進駐軍の一員として三年間不幸な年月を過ごした。この間東京の家は焼かれ、妻は田舎に疎開し農家で働き、父は栄養失調で亡くなった。東京に復員し電電公社に就職したが、妻子は東京に住む家がないため、田舎にとどまることになった。家族と別れて過ごしているうちに落ち込み、大酒飲みとなった。やがて彼は新しく結成された組合に深くかかわるようになったが、この組合は間もなく共産党に牛耳られることになった。久保等と共に彼は共産党の支配を退けることに成功するが、それ以後、共産党の攻撃の対象となってしまった。久保は委員長に選出され、鈴木がその後を継いだ。

分裂した二十万人余りの組合をいかにしてまとめようかと思案していた時期に、鈴木は久保を通じてMRAに会った。彼はMRAの人々に感銘し、久保をマキノ島で開かれる大会に送るための資金集めを買って出た。彼と久保は左派と右派の両派をまとめて組合の融合は大きく前進をした。

鈴木が規則的な生活に戻ったことから、妻子も上京して一緒に生活できるようになった。その年、年頭から彼は賃金交渉に奔走したが、電電公社の梶井総裁は彼の真面目な人柄に打たれ、彼が賃上げ要求の認可を政府に提出した際に、それを支持したほどだった。

イーストマン夫妻が受けた歓迎のお返しに、妻のジーンと共に私は石坂夫妻をはじめ何人かの方々を夕食に招いた。石坂はジョージ・イーストマンとブラデックの活動に満足を示し、日本における今後の活動について相談するために財界人を招集するよう一万田に提案した。一万田はそれに賛同し、一九五四年（昭和二十九年）五月に約十二人の一流企業や銀行のトップが日本銀行氷川分館に集まった。ここではMRAの日本における活動が評価され、具体的な支援が求められた。工場における新しい協調の精神が生まれたことや、政府や経済界に広がる汚職に立ち向かう正直を貫く闘いなどが報告された。一万田や石坂のほかに、三越百貨店の岩瀬英一郎社長、東洋レーヨンの袖山喜久雄社長、日本通運の早川慎一社長、富士紡績の堀文平会長などが発言した。

同じ年の暮れ、化学同盟の山花委員長、全電通の鈴木委員長、電機労連の山村委員長、全逓の横川委員長と全造船の柳沢委員長という有力な労働組合の指導者五人が一同に会する画期的な会合が開かれた。これは一月初めに熱海温泉で二日間のMRA労働会議を開こうという相談のためにMRAハウスで昼食を共にしたのであった。会議はもともと山花の考えであったが、ほかの人々

も加わり、一緒に責任を取ろうということになった。会議の詳細を決める以上に意義があったのは、お互いの信念を確かめ合うことであった。全員がマルクス主義の信奉者であった。午後を通して、組合員の賃金と労働条件の向上という正当な要求を続ける一方で、組織労働者の声を代表する総評の哲学を分断から国の融和へと転換させようという遠大な構想について長時間話し合った。

熱海での会議は前年の正月に行われた会合に準じたものではあるが、この五人のチームワークが実を結んだ結果であった。参加者の中には社会党の国会議員六人、産別の委員長五人と十五の大きな労働組合の幹部がおり、これらの組合員数の総計は百万人を超えていた。会議では「自分のあり方が国のあり方を決める」というテーマで、自分の家庭や職場での生活のあり方が国全体の新しい道徳の基準をつくるというテーマでの意見交換が行われた。海員組合の青木委員長は、会議の流れを次のようにまとめた。

「私たちは労働運動の中に存在する憎しみの気持ちに対処しなければなりません。労働者に対してばかりではなく経営側に対しても人類愛の気持ちを示すにはどうしたらよいかを私たちは学んでいます」

経営者側からは国鉄の交渉の責任者である中畑三郎が次のように語った。「私は鉄道で自分には対応しきれない問題にぶつかりました。ところが木村行蔵さんのおかげで、自分はプライドの高い人間であることに気がつきました。組合との対応が無愛想すぎるという評判がありました。今、私は労使関係が最も険悪な広島で、対立することなく問題を解決するには組合と共にどう働くべきかを学んでいるところです」

第十章　国政とのかかわり

保守党指導者の確執

一九五四年（昭和二十九年）の夏は日本にとって長く暑いものとなった。第一回の春闘となった賃上げ交渉は厳しく長期にわたり、多くの産業がこれに巻き込まれた。国にとってもっと深刻な問題は国会を麻卑させたほどの政治対立であった。吉田内閣はマッカーサーによって廃止された国家警察制度の復活を決めていた。国家地方警察と警視庁に分断されていることが犯罪と国民の無秩序状態に対する効果的な対応を妨げている、と考えていたからである。イギリスのスコットランド・ヤードやアメリカのＦＢＩのような、力を持った中央組織を望んだわけである。戦前の強圧的な警察国家の再来だと感じた革新陣営や知識人の多くはこれに激しく反対した。

自由党は国会の会期切れの五月二十二日までに法案を通過させようとした。その後会期は六月初めまで延長されたが、法案採決の前夜、社会党の議員は衆議院での実力行使を試みた。しかし、採決を防ぐことができなかった後は抗議して退場した。保守連合は法案を通過させたが、社会党

はこれは違法な強行採決であると主張した。国全体がこの問題を巡って大荒れとなった。

この春にはもう一つ論議をかもした問題が起こり、左右両陣営を二分していた。吉田首相は一年にも及ぶ舞台裏の交渉の結果、アメリカとの相互防衛援助協定の締結に成功していた。両国の安全と利益を維持するための相互支援の約束に加えて、この協定には次のような要素も含まれていた。

・近代的な日本の武装組織を小規模にかつ国家防衛に厳しく限定して組織すること。
・これらの組織を統轄する防衛庁の設置。
・警察制度の中央集権化。
・安全保障基準を権威づけるための防衛秘密保護法の設定。

共産党、社会党をはじめ多くの人々がこの国際協定を警戒した。軍国主義の復活を恐れる平和主義的立場と、アメリカとの相互関係は日本の厳正中立を侵すものだとして慣概する立場とがあった。ソ連や共産中国に対する適切な軍事力を持ち合わせない以上アメリカの支援を受けることは不可欠である、というのが政府側の主張であった。

吉田首相が行った占領に関するこうした改革は、トラブルの一部にすぎなかった。彼に反対する強力な勢力を遠ざけることには成功したものの、彼の独断的なやり方や、意見を異にする人々に対する高飛車な態度が多くの支持者や支援者をいら立たせていたのである。彼は舞台裏での話し合いや妥協からコンセンサスを作るという日本の政治や社会全体で重宝されてきた伝統を破っていたのであった。財界には新しい総理を求める声が高まってきた。しかし私たちが接触してい

る左右両派の指導者の多くはこの対立の収拾に影響力を行使していた。互いの意見はしばしば異にしたものの、両極端の要求をうまくはね返しながら、問題を平和裏に解決しようという努力を傾けていた。

ところが、政府はその秋にもう一つのトラブルに見舞われることになった。自由党幹事長佐藤栄作などを巻き込む疑獄が発覚したのである。鳩山は再び吉田の退陣を狙っていた。彼は民主党を強化し、改進党と名を改め、吉田が国会の過半数に必要としていた自由党との連立は不安定になっていた。もう一人首相の座を狙っていたのは独自の支援グループをもつ緒方竹虎副首相で、吉田との溝がますます深まっていた。しかももう一人の実力者石橋湛山までも権力の座をねらっていた。

首相の選択に影響力をもっていた三井、三菱、住友などの財閥は、再び吉田にいら立ち退陣の圧力をかけるに至った。しかし吉田は譲歩を拒んだ。社会党はこうした混乱を政権獲得の好機と捉え、日米同盟や警察の強化および反労働法の停止を迫った。社会党はまたソ連との全面的な外交関係の復活と共産中国の承認を主張していた。基幹産業の急成長もつまづきかけ、不況の到来によって革新陣営の勢力が強まった。十一月初め以降はこうした政治的対立の真っただ中にいる人々がそれぞれの心配を打ち明けてくれるようになった。私たちはできるだけ意見の違いを超えて政府に対する国民の信頼を取り戻すために協力し合うように促した。一万田は吉田に近く、星島は鳩山を支援するグループの中心にあり、木村行蔵は緒方の情報アドバイザーであり、毎週連絡を取り合っていた。石坂、渋沢、田代、諸井などの各氏は政界で活発に動く財界のかじ取り役

であった。加藤夫妻、戸叶夫妻、山花、久保は社会党両派の中核にあった。

ある晩夕食に一万田を招き、石川島重工労組の委員長柳沢錬造に引き合わせた。柳沢がコーとマキノ島で会った外国の労働組合指導者が建設的な労働運動作りに努力をしているという話は一万田に強い印象を与えた。柳沢は日本でも同じことを実現したいという決意を持っていることと、それに対して造船所の労使から支援を受けていることを述べた。昼食に訪れた加藤勘十は自分が取り組んでいる課題について語ってくれた。まず第一に、社会党両派の統合という政治的課題である。政府との対決に成功するためにはそうした動きが必要であるという考えが両派に広まっていた。しかし彼は、「その目的だけで統合をするのでは充分でない。統合は建設的な目標を立てて道義的原則に則って行われるべきである」と述べた。第二に、彼は政府と全逓、全電通、国労など公労協の組合との間に広がる大きな対立を心配していた。「こうした対立は、何が正しいか、の基盤に立って解決されなければならない」と彼は語った。彼はそれを実行しようとしているこれら組合のMRAと関係のある幹部と協力していた。「日本経済、とりわけ今のような不況時には平和な労使関係が不可欠である。私はそのためにあらゆる機会を利用して闘うつもりである」と続けた。

保守合同と社会党の統一

石坂夫妻を夕食に招いた時の話題は政治から経済まで広範にわたり、特に財界人の役割に話が及んだ。私たちは、柳沢や鈴木が組合で行っている果敢な努力や、社会党右派の加藤勘十や社会

党左派の山花や久保が極左に牛耳られずに労働条件の改善に努力している動きなどを伝えた。山花は次のように語ったことがあった。「失業者は現在八十万人に達した。共産党は厳しい状況を利用すべく周到な準備を進めているので、失業者が百万人に達すれば革命的状況が起こる」

石坂は、政府の指導性の欠如を憂慮していると述べるとともに、政界の指導者たちが相互の対立に決着をつけるように働きかけていると語った。彼は吉田退陣にやぶさかではないものの、鳩山は共産中国の承認やソ連との関係緊密化を唱えるなど外交政策がリベラルすぎると感じているようであった。信頼を回復するためには権力争いは何にもならない。政府指導者は新しい、利己心を捨てた行動とお互いの関係改善に向けての努力を示すべきである、と彼は語った。私たちはそうした考えに賛同している一万田や星島などと共に行動するよう石坂を励ました。

数日後、私たちは政府を取り巻く問題の核心にかかわることになった。当時、内閣総理大臣官房調査室長（訳者注）木村行蔵の直接の上司であった緒方竹虎副総理は、吉田首相が辞任すべきか否かを決断すべく静養している間、実質的に政府の運営にあたっていた。吉田は緒方に、当面の政治危機に関する世論と国の全般的状況に関する分析、ならびに今後の対応への提言をまとめるよう指示した。緒方は木村に草案を作成するよう命じたため、木村は私たちの意見を求めに来た。そこで木村、国鉄理事の片岡義信、相馬豊胤と私の四人は昼食をともにした。木村は吉田と鳩山の確執や、後継を狙う緒方や石橋の野心について率直に打ち明けてくれた。彼は世論が保守党指導者への信頼を失い、階級闘争の脅威が増していることを裏づける情報を持っていた。また政府内部の対立や労働者の賃上げと雇用の拡大ができない産業界の状況につけ込み、北京がイン

テリや労働組合指導者にくい込んでいることも述べた。

この話し合いの中から次のような考えが生まれた。それは保守党の指導者が互いの対立を解消すること、経済の改善に向けて政財界が一緒に取り組める前向きな政策を優先させること、かつての敵国、とりわけフィリピンや韓国の閉ざされた扉を開くための心を開いた外交を推進することであった。私たちは木村行蔵に、緒方が彼の同僚やライバルとのまとめ役として十分活躍できるために大胆に進言するよう促した。

木村はこの案を緒方に報告するとともに、その内容について説明する機会を求めた。緒方から昼食に招かれた木村は、自分の人生に起こった変化、特に自分の出世よりも人のために仕えるという生き方について語るとともにMRAの世界的な動きについても紹介することができた。緒方がMRAの人々に会いたいというので、MRAハウスに夕食に招くことになり、四日後に決まった。十一月末のその日は政治危機も深まり新聞各紙は吉田退陣と総理の後継者に関する予測でいっぱいだった。鳩山、緒方、石橋の三者による激戦という趣であった。

午後六時半きっかりに緒方の黒塗りの大型車がMRAハウスの門に滑り込み、報道陣の車が数台これに続いた。新聞記者たちはどこにでも彼を追いかけ、最新の状況を聞き出そうとしていた。緒方は素早く家に入り玄関が閉じられたので、報道陣はこのMRA訪問がどんな意味を持つかわからぬまま外に残った。彼は自信を内に秘めた温厚な人であった。聞き上手でその夜の発言も慎重であった。私たち夫婦は、木村、中嶋勝治、相馬豊胤夫妻などにも同席してもらい、当面の政治に関する話は一切避け、専ら日本や世界の問題に対する答えを紹介してこの客を励ますことに

した。中嶋がアメリカに対する憎しみから自由になり、マルクス主義に勝る道を発見したと語ったほか、私たちは一万田と柳沢、フランスのシューマン外相とドイツのアデナウアー首相との間の新しい理解の形成や対立に代わるチームワークの実例を話した。緒方はとりわけ強い反応を示し、これから数か月間、私たちは木村を通してばかりでなく直接緒方とも連絡を取り合うようになった。彼は舞台裏で、政治家同士の個人的対立を解消するために真剣な努力を払った。

この夕食会のあと私は鳩山と話をする機会に直面することになった。緒方のMRAハウス訪問を聞いた星島が私に鳩山に会うことを勧めたのである。私の考えが鳩山にとって役立ち、また鳩山の方もそれを受け入れる可能性があると星島は踏んだのである。最も注目の的の人でもあり、すべての動きが注視されている鳩山であり、私はその中し入れにちゅうちょしたが、結局会えたことに感謝している。鳩山は占領下で追放されるという屈辱を味わっていた。脳卒中を患い杖や車椅子を使い、疲れやすく、精力的とはいい難く、総理としての重責を担うことを疑問視するむきもあった。ゆっくりと話すが頭の回転は早く、手ごわい強敵との評判であった。数年前、吉田が鳩山から最高権力の地位をうまく手に入れたとして彼に苦い感情を抱いており、自分にふさわしいと信じる地位は、何としても確保したいと思っているように見えた。

星島は十二月七日の朝、鳩山が多くの訪問客を迎える家で私との面会を設定した。星島、相馬雪香、相馬豊胤が同行した。鳩山は丁重に私たちを迎え、星島が私を紹介している間私をじっくり見つめていた。大きな眼鏡の背後に鋭い視線が光り、丸顔で、なだらかな額、耳は大きく頭は薄くなっていた。星島が私たちの活動について簡単に説明したあと、鳩山は私の方を向いた。私

はまずこのような多忙な時に時間を割いて迎えてくれたことに礼を述べ、プレッシャーの中でさまざまな決断を強いられているだろう彼のために祈り続けていたことを伝えた（彼はクリスチャンであった）。外国人である自分は日本の政治に直接のかかわりはないが、たまたま重責を担う人々の活動や問題に触れる機会を得たので、当面の大きな課題については多少理解できるようになったと述べた。次いで私はアメリカについて触れ、自分たちがキリスト教の信仰に生きることに失敗したことで物質主義に走り、国内に分裂を生み出し、アメリカばかりか他の諸国にも迷惑をおよぼしてしまった、と述べた。さらに、「自分自身がこうした問題の一部であったことを認識した私は、変わることを決心し神の意思に従って生きようと務めています。率直な謝罪が正直な平和への鍵であることを学びましたが、フランスのシューマン外相とドイツのアデナウアー首相は、信頼があれば人間の知恵だけでは不可能に思える状況の中でも融和が生まれることを証明しています。日本の国会議員のあなたのお仲間の方々の真摯な謝罪がアメリカの国会議員や東海岸から西海岸に至る市民の心を開くことができました。これに反して、自由世界の指導者間の不和が共産主義を利したのです」と述べた。そして東ドイツ社会主義統一党のウルブリヒト第一書記が最近、「日本では民主主義は長続きせず、間もなくマルクス主義に向かうであろう」と語ったことを引用した。鳩山は私の来訪に丁重に礼を述べ、私たちはその場をあとにした。私の発言が生意気すぎたのかとも思ったが、次に彼と会った際にはとても親しげな態度を示してくれた。

政界の長老である私たちの友人たちの活躍もあって政治状況はやがて快方に向かった。財界の指導者は吉田に辞任して引退するように進言した。緒方は首相選挙への出馬を突如辞退し国中を

驚かした。鳩山は石橋に勝ち、彼の党から新しい首相として選出された。自由党と改進党の保守両党はこの二月の選挙にそれまでよりもまとまって臨むことができ、左右両社会党に対して比較的容易に勝利を収めることができた。選挙後、保守党系、社会党系の各政党に対して統合への圧力が加わり、十月には二つの社会党が統合した。こうした展開には私たちの友人たちもかかわっていたが、加藤勘十、シヅエ夫妻はその進展を次のように打ち明けてくれた。

初めてアメリカのマキノ島から帰国した時、加藤勘十は以前とは変わった（changed）人間として、左派の指導者たちに、野心に満ちたライバル意識を抱いていたことをわびた。しかしこうした努力にもかかわらず一九五二年（昭和二十七年）には左派と右派との溝はますます広がった。本来ならば左派にくみする勘十だが、左派の指導者同士の争いに愛想をつかし右派に影響力を行使するようになった。まず彼は、シヅエとともに、右派の指導者で社会党両派のあまりの対立に嫌気がさして委員長を辞任した河上丈太郎に会った。加藤夫妻は河上宅で河上夫妻と話し、最後に四人で静かな時間（quiet time）をもって、各自の責任について謙虚に神の導きを模索した。その結果、河上はしぶしぶ右派の委員長の職に復帰することに同意した。その後、最近の両派の統合に向けての会議の席上、河上は統合後はいかなる党の役職にも就かないことを宣言し、この己を捨てた指導性が両派の統合を可能にする大きな要因となった。

派閥を抱えた二つの保守党の統合も決して容易ではなかったが、社会党の統合の一か月後の十一月に自由民主党が誕生した。これは意義ある出来事で、その後四半世紀以上にわたり比較的安定した日本政府の基盤となった。ここでも、星島、一万田などが党内のさまざまな思惑や派閥

の間で効果的な和解役を果たした。

総理官邸で劇上演

MRAが産業はかりでなく政治の領域でも効果的な触媒の役割を果たしていることが明らかになってきた。MRAの考えを実践する人々は、対立のど真ん中に巻き込まれることがあるが、対立する人々の間にしばしば信頼と協調を築き上げることができた。こうして国政の中心に携わる人々数人が二週間ごとに集まり、一種の「閣議」を開くことになった。この会合は、政党や財界グループが権力を振るう「クラブ」に似ていたが、大きな違いはこのグループは特定の団体を代表するのではなく巾広く異なった利益を代表する人々で構成されていたことである。

MRAハウスで開かれたこれらのミーティングでは参加者が当面最も気にかかっている問題について話し合った。例えば、最初のミーティングで議題に上ったことを挙げると——国の統一に役立つための国鉄の使命（片岡）、労使関係に対する総評の姿勢を変えるためにMRAにかかわっている官僚と官公庁の職員はいかに動かすべきか（柳沢）、中国からの「平和攻勢」が強まる中で、政治指導者間の融和を図ることが急務（木村）、有力な雑誌に執筆する知識人にいかに接触するか（山花）、であった。

この直後に、国会議員たちも同じような動きを始めた。国会開催中は国会事務所での議員同士の話し合いや、われわれとの相談に時間を作るのは難しかった。そこで毎週火曜日にMRAハウスで朝食を共にすることになり、互いの胸中にある懸案について意見交換をするほか、私的なこ

とや政治上の問題について導き（ガイダンス）を求めることになった。参加者に言わせると、自民党と社会党の人が互いにはっきりとものを言い合い、共通の考えを持ちうる唯一の場所であり、超党派で建設的な戦略を練るための貴重な場であった。

共通の政策作りを図るこうした機会は正に時宜を得ていた。一九五四年（昭和二十九年）の秋、私たちは大胆なプロジェクトを企画したが、これを通して政治や経済の中枢に公にかかわることになった。コーへの代表がその年の夏ロンドンを訪れた際、MRAの劇『ボス』を観劇し、日本にも強いメッセージを与えることができると感じたのである。民主主義がマルクス主義の誘惑に対抗するには家庭でも職場でも道義的な背骨が必要であるというのがこの劇のテーマであった。西欧の実業家の自宅と工場が劇の場面であったが、日本人にもはっきりと明確に通じると日本人たちが感じたのである。

帰国後、出演者さえそろえばこの劇を上演することが決定された。相馬雪香と西山千が台本の翻訳にとりかかった。読みあわせも何回か行われ八人の配役を考えるとともに、この劇の意味についても話し合った。舞台に上がるなどということを考えること自体がショックであり、皆ぎこちなく、役柄がさまにならなかった。それでも役柄になりきるに従って徐々に生き生きとしてきた。こうした折に幸運が舞いこんだ。毎日新聞から年間優秀演出者賞を受けた菅原卓（木村利根子の叔父）が『ボス』を読み、リハーサルに招かれたのである。夕食を挟んでこの劇上演の目的を話すと彼はとても感激した。私たちは、一九五〇年代の重要課題は自由な民主主義への闘いで

あり『ボス』は民主主義を実践することに取り組む経済人、労働組合指導者、政治家などの決意を支えることができると述べた。私たちはこうした人々を招いての上演会をシリーズで開催することを想定した。

菅原はこれこそ正に劇場が社会に果たすべき役割だと語り、演出面での協力を申し出た。十二月以降、彼は辛抱強く演出の任にあたった。私たちの目的に思想性があるが故に、配役については、出演すること自体に意義のある立場の人を選んだ。実業家の役は、今では国鉄の理事となった片岡が演じた。組合リーダーは石川島重工労組の柳沢委員長に決まった。二人を説得するのは極めて難しかった。舞台に立つなどみっともないということに加えて、多忙を極める人たちだったからである。演技力に欠けるところは役柄に対する理解で補った。共産党の秘密党員である組合役員の役は、社会党の機関誌『民主社会主義』に携わる職員で、かつてはマルクス主義に傾倒し、今ではMRAに確信を持っている高木邦雄に当てられた。

一九五五年の一月から二月にかけて私たちは経済界の友人たちをくまなく訪ねた。新しく設立された日本生産性本部の会長となった石坂泰三、電電公社の梶井剛総裁、日本輸出入銀行の山際正道総裁、元ワシントン駐在大使で一万田に代わって日本銀行の総裁となった新木栄吉、東洋レーヨンの田代茂樹会長、日本航空の柳田誠二郎社長、三井銀行の佐藤喜一郎社長、日産自動車の浅原源七社長、経団連の石川一郎会長などである。これらの人々はただ単に経済の復興に中心的な役割を果たしたばかりでなく、自分が関係する大組織の運営を超えた国家的な問題にもかかわっていた。

政府の指導者として誰を支援すべきか？　ソ連や中国との貿易を推進する時期が到来したかどうか？　乏しい資金をどの産業に優先的に振り分けるか？　総評による春闘に対して企業はどんな戦略で応じるか？　といったことである。

私たちはこれらの人々に劇『ボス』の説明をするとともに、特定の人々を事前公演に招き批評をしてもらい、できれば関係企業や全国的にこの劇を活用して欲しいと申し入れた。日程調整した上で二月十六日と十八日が内輪のプレビューの日に当てられた。各回とも十数人程度の人数となるのでＭＲＡハウスの応接間でごく内輪な形で上演された。早目の夕食を済ませ、食後、直ちに劇が始まった。食堂と居間の間に幕が引かれた。家具は『ボス』の家の居間となるように置き換えられ、キャストは静かに所定の場所についた。やがて実業家や内閣それに何千という労働者の家庭に影響を与える劇の幕が開かれた。

この二つのプレビューに集まった二十数人の人々は金融界と産業界で力を持つ人々であった。二大経営者団体の会長、三井銀行、最大の保険会社、日本航空、石炭鉱山、金属鉱山、造船、重電各社の社長、日米協会会長、映画会社の社長、自衛隊統幕長、陸上自衛隊司令官などが含まれていた。観客は劇に圧倒された。素人くさい劇を予想してきた人々は人間味あふれるストーリーと思想を持った武器としての劇の力強さに打たれた。夫と妻、父と子、ボスと組合委員長との織りなす劇に感動し涙を浮かべる人もあった。第一回の上演が終わった時、最長老の石坂が立ち上がって次のように述べた。

「私共の会社が労使の代表をコーに送ったことは大きな投資でした。東芝の守衛の一人であっ

た山村さんが組合の委員長として行きました。この人の人生は一変し、今では全国の産業別組合の委員長になっています」

「私は、舞台で素晴らしい演技をされた柳沢さんと、土光さん（柳沢の属する石川島重工社長で、観客席にいた）が労使対立を見事に解決されて、産業全体の模範になるような協力関係を築かれたことを祝福したいと思います。この劇は（訳者注　イギリスの著名なジャーナリストで作家でもあるＭＲＡの指導者）ピーター・ハワード作で、そのうしろに私もコーでお目にかかったことがある世界的な指導者フランク・ブックマン博士が控えておられ、彼がＭＲＡを創設したのです。

皆さまご承知のように私は最近生産性本部の会長に就任しましたが、それはただ単に産業の合理化を目指そうとしただけではなく、国全体のチームワークを築こうと思ったからです。この点について労働大臣とも話しましたが大臣もまた私と同じようにＭＲＡに大きな期待を寄せております。今晩この劇をご覧になって、恐らく皆さんは『ボス』は自分の企業に役立つと思われていることでしょうが、それだけでなくこれは国全体のためになるということを認識していただきたいと思います」

石坂の論旨はこの上なく明快であった。あとは、この劇が最も効果的に使われるように石坂たちを後押しする必要があった。この四日後には三度目のプレビューが行われ、主に繊維業界の代表が顔をそろえた。プレビューが全部終わると直ちに私たちは石坂たちを訪問して彼らのイニシアチブを促した。経団連が七回の公演を正式に後援し、そのうちの四回を金融街の中心部でマッカーサー司令官の本部があった第一生命ビル最上階の劇場で上演することが決定された。上演の

期日は三月末と四月ということになった。石坂、石川、柳田（日本航空社長）など各回ごとに交代で実業家が劇を紹介することになった。輸出入銀行の山際総裁が舞台装置製作、劇場借り入れ、招待状や切符の印刷などに必要な資金集めの責任を引き受けた。経団連事務局が私たちと一緒に企業や各界の中心人物に切符を割り振りする作業に携わってくれた。

社会党や労働組合の人々にも同じように日曜日にプレビューが行われた。午後一時半の会議に集まった人々は夕食を終えた後で劇を見た。この中には五人の左派の参議院議員と五つの大きな産別の委員長が含まれていた。集会ではチームワークと団結を育むために必要な個人の決意、規律、勇気について率直な意見を交換した。中嶋、柳沢、山花は資本主義もマルクス主義も人間性に宿る野心、嫉妬、物質主義を癒すことには成功しておらず、社会を真に変革するにはもっと根本的な道徳革命が必要であるという点を強く主張した。『ボス』は実業家と同様これらの人々からも大きな反応があり、自分の党や組合の仲間のために劇を上演したいと熱心であった。

『ボス』の一連の上演は効果的だった。観客は多彩で大企業の労使、国会議員、皇族、言論界や教育界の人々であった。劇を見た人の多くが自分たちの組織でぜひ上演したいと言い出したが、私たちの関心はいかにして最も重要な人物たちに集中することができるかということにあった。木村行蔵は総理大臣が観劇する機会を持つべきとの確信を持ち、閣僚のためにどうやって上演できるかを星島や私たちに相談した。そして彼らはひそかにことに取りかかった。

私たちは既に鳩山の娘と女婿にあたる古沢潤一夫妻と知り合う機会があった。彼は日本銀行の理事であった。古沢夫人はとても上品な女性で『ボス』の上演に熱心に賛成した。彼女と母の鳩

山薫夫人がこの構想を実現する鍵を果たすことになった。

新宿御苑で毎春開かれる首相主催の観桜会にジーンと私が招かれて出席した際に『ボス』について簡単に説明する機会があり、ぜひ閣僚の方々と一緒に観劇いただけるとありがたいとお話しした。首相は劇についてはいろいろな人から聞いているので見てみたいとのことであった。

その一週間後、古沢夫妻が夕食に訪れ、夫人は父親が閣僚や党の役員と共に翌日首相官邸で劇を見たいと話したばかりであると伝えた。閣議を早目に切り上げ、正午ぐらいに閣僚を官邸の大きな部屋に誘って『ボス』を見たいということであった。われわれはこの急展開に備えて小さな舞台用のセットを作り、幕の準備もできていた。キャストの全員が仕事を休んで出演できる段取りもできていた。ぶつぶつ言う閣僚も数人いたが、大臣は全員次々と入ってきた。すでに劇を見ていた重光葵外相は、意義ある劇で公職にある人は一見すべきであるとほかの閣僚に薦めていた。

多くの新聞記者や三大主要テレビ局のカメラがホールに待ち構える中を車椅子の鳩山や閣僚が入場した。一同が入場すると国際コーラスグループが幕の前に出て日本語で三曲を合唱した。三井高維が簡単に劇を紹介し、欧米の多くの人の人生や考えに影響を与えたことを強調した。劇が終わり幕が下りてから、片岡と柳沢が短くこの劇のテーマと自分たちの生活や仕事との関連について語り、キャストを総理大臣に紹介した。これまで『ボス』を見た人たちに比べるとこの老練な政治家たちが最も世慣れた人々であったが、素直に感動してくれたようであった。重光と大蔵大臣なった一万田などがさらに多くの国会議員のために上演するという提案に賛成した。この劇の完成のために演出面で活躍した菅原も同席していて、観客の顔を静かに観察し、公演後のコメ

ントを聞いていたが、私のところに来て語った。「この劇は日本の演劇にとって極めて歴史的な意義をもっています。人の最善の生き方を鏡のように映し出し、劇が伝える真理を観客が取り入れるという、舞台の最も純粋な目的を満たしているといえます。きょう、これを見た人々がこの劇の伝えるメッセージを国民生活の中心に持ち込むことができるのです」

新聞とテレビはこの出来事を大きく報道した。あるテレビの解説者は「『ボス』のテーマは精神的革命こそが物質的革命に対する答えであるということである。これは日本にとって極めて関係の深いことで、総理が熱心に観劇したのもうなずけよう」と述べた。

エピソード　MRAハウスを訪れた多彩な人々

在日米軍との交流

東京で私たちが過ごした最初の三年間は、アメリカ軍の存在は占領時と変わらぬほど歴然としたものであった。朝鮮戦争およびその後の軍事的な膠着状態は日本における空軍、海軍の基地が最重要であることを示し、朝鮮半島の脅威が減少した後もソ連や共産中国との対立が日本と沖縄におけるアメリカの力の維持を必要としていた。アメリカ軍に対する態度も占領終結後変化を見せ、米軍の存在は世論を二分させていた。吉田内閣は、アメリカが日本の兵士による国家の防衛負担をほとんど取り除いてくれていることを認識して安保条約を堅持しようとしていた。経済界や金融界も米軍の軍事物資とサービスの調達によって拡大した貿易を評価していた。この景気が基幹産業に欠かせない市場と輸入必需品の購買に必要なドルを供給したことから、日本の経済復興と拡大の重要な前奏曲になろうとは当時は誰も予想しないことであった。

一方、軍に反対する世論も大きくなっていた。極左勢力はアメリカとのつながりを断って、日本が中立、もしくは親共産主義の外交政策をとることを強く主張した。穀倉地帯を巨大な空軍基地の建設のために奪われたことを憎む農民や、核戦争に巻き込まれることを恐れる人も少なくな

かった。政治的に無関心な人々の間にも一部の米兵の犯罪的な行為に慣概する人も出てきた。

アメリカ軍とのつき合いは韓国からの休暇に来ているGIをMRAハウスでもてなすことから上級の将軍を訪問することまで多岐にわたっていた。占領期間中は、私たちが自由に活動できるように軍の理解を得ることに関心があったが、その後はアメリカ軍と日本国民との関係改善を支援するようになった。私たちが来日したときはマッカーサー将軍の代わりにマッシュー・リッジウェイ将軍が最高司令官の地位を務めていた。彼はマッカーサーのような華麗さは持ち合わせず、働き者で、きちょうめんなやり手というまるで異なったタイプの人柄であった。私たちがアレキサンダー・スミス上院議員の紹介で彼を訪ねると、何かできることはないかと尋ねてくれた。

私はスミス、スパークマン両上院議員と日本人との夕食会のことを彼に話すと、それだけ影響力のあるグループをどうして集めることができたのかと聞くので、コーへの最初の大きな代表団とその後に参加した人々について説明した。彼はとりわけ、反米的な態度をとって彼を悩ませていた加藤勘十、シヅエ夫妻など社会党の人々の変化に興味を示した。彼は、私たちの日本における目的について尋ねたので、民主的憲法が安定して発展するには道徳的、精神的基盤が不可欠であることをこうした日本の友人たちが確信していると述べると、彼は心から同意した。

リッジウェイ将軍は誰がMRAに活発にかかわっているか、また批判的な知識人に対してどう取り組んでいるかを尋ねたあとで、MRAについての理解は不充分ながら、世界の問題に不可次な要素のようだと語った。また野蛮人が文明を脅かす時には闘わねばならないが、戦争は何の解決にもならない、と語った。信仰、道義、精神的な力の基盤がなければ、暴力が際限なく続くだけであるとも述べ、ほかのスタッフにも話を聞かせたいので改めて長く時間を作ってくれるよう

に私たちに要請した。

この二回目の会合で将軍は巧みな質問を私たちに投げかけて将校たちを教育しようとした。彼はまず日本と世界におけるMRAの活動を簡単に説明するように私に求めた。私は最初のコーヘの代表団に対する吉田首相の支援、その一行に対するアデナウアーやアメリカ議会の反応、さらに海外に出かけて、旧敵国の信頼を取り戻すための努力を日本人が度々行っていることなどをかいつまんで話した。

リッジウェイ将軍はこれに対して次のように答えた。

「今語ってくれたことを私なりに理解すれば、MRAの目的はキリスト教の基本的原則に則って個人および私生活において正直に生きることにあると言えるのですか?」

これに対して私たちは、その通りだが、ただほかとは違うブックマン博士の活動はキリスト教を誰にでも理解できるようにかみくだいて表現することで、これは日本のようなキリスト教国でない国にとって欠かせないことである、と説明した。

「キリスト教の用語を使わないで、何を使うのですか?」という質問に対して私たちは絶対の道徳基準に従う生き方、静かな時間（quiet time）をもって心の声（inner voice）を聞くことによって人が変われることについて説明した。

「でもそれでは、イエス・キリストの人格に触れない限り、人は自分勝手に基準を解釈するのではないですか?」私たちは絶対の道徳基準は山上の垂訓を具現化することで、キリストの人格へ導くものであると答えた。

将軍は、さらに「では、日本人には一体どこから始めるのですか」と尋ねた。そこで私たちは

人が変わる（change）哲学の核心に入った。静かになって自分の生き方の中で絶対基準に照らしてそぐわないところを見極めること、自分の生活をできる限り神に任せるように努力すること、自分が正せるところを正すことによって身のまわりに神の精神の働きによる革命的な結果が起こりうることを説明した。

「神などを信じない共産主義者にはどう話すのですか？」

共産主義の革命では不充分であると言います、と私たちは答えた。そして人の心と意思を革命的に変革しない限り、世界を変えることにはならず、これがマルクス主義に欠けている要素であることをドイツの共産党の炭鉱夫も認めていたことを紹介した。

リッジウェイ将軍はもう一つ質問した。

「ワシントンが自分の襟を正せないのに、日本の襟を正す手助けなどできるのですか？」私たちは「ごもっともです」と答え、「ＭＲＡは世界全体の問題に取り組んでおり、日本で私たち数人が活動している間に、アメリカではもっと多くの人がアメリカ自身の問題に対する闘いを展開しています」と答えた。別れ際に当たって、将軍は感謝の意を表し、私たちの活動にもはや何ら疑念はなく、むしろ最大の関心をもって見守っていきたい、と語った。

私たちはアメリカ軍の幹部将校との交流をできるだけ保ちながら一方では、多くの米軍兵士（ＧＩ）とも知り合いになった。一九五四年（昭和二十九年）はアメリカ軍に対する国民の反感が高まり出していた時だった。私たちは結婚生活がうまくいっていない夫婦と友達になったことから、軍の中枢と近づくことができた。この二人が妻のジーンと私をステファン大佐夫妻に紹介してくれた。彼は東京地区に駐在する軍の教育と情報を担当していた。私もかつて教育、情報担当官を務

めたことがあるので、彼が抱えている問題をいくらか理解することができた。遅まきながらペンタゴン（国防総省）と東京の最高幹部も海外に駐在する軍人の行動や性格にも関心を払っていた。反アメリカ分子に付け入られるような醜態を避け、G1たちに駐在する国の国民と生活様式を尊重させることがいかに大切かを認識していた。問題はどう実行するかであった。訓練計画などあっても通り一遍で、他にもっと重要なことがあると感じる司令官たちのおかげで実行されていないことが多かった。

ステファン大佐は第二次大戦中のヨーロッパでの私の任務に関心を示し、彼のかかわっている計画に何かいいアイデアはないかと尋ねた。ある晩、MRAハウスで私は彼を中嶋勝治に紹介した。中嶋は広島で被爆後アメリカに対して抱いた憎しみとその後その気持ちが変わったことを語った。ステファンは感動し、中嶋と私に、軍隊のオリエンテーション教育の責任者たちに話をしてくれるように依頼した。私たちはその人々に体験を語るとともに、「日本でアメリカの代表としてふさわしい生活をするにはどうすべきか」というその月のテーマに役立つ考えと材料を提供した。

ステファンはさらに一歩踏み込んで、極東アメリカ軍総司令部パーシング・ハイツの将校食堂の昼食会に私を招いた。私たちは参謀長クリステンベリー将軍を含む多くの将校と会うことができた。彼と副参謀長スチュアート将軍はMRAハウスでの夕食に訪れた。これにはジョージ・イーストマンとマックス・ブラデックも同席した。将軍たちは私たちに、来月行われる「軍人としての人格と行動」という情報・教育の月例会議で東京地域およびGHQで働く二千人の将校に話をしてほしいと依頼した。私たちは喜んでそれを受け、「イデオロギー時代に生きる人格と行動」というテーマでジョージ・イーストマン、マックス・ブラデック、イエンツ・ウイルヘルムセン、

そして私の四人が話すことにした。

全員を網羅するには一時間の必修ミーティングを六回こなす必要があった。最初のミーティングは東京の中心街アーニー・パイル劇場（宝塚劇場）で朝九時に始まった。高い舞台に座って、つまらなさそうに黙って待っている将校の列を下に見て、私たちには手に負えないことを請け負ってしまったかと感じた。将校たちの中には、忙しい業務をさかれてこの講演に招集されたことが気に入らず、時間の無駄だと感じている者もいると聞かされていた。

クリステンベリー将軍が司会をすることになっていたので、通常より多くの将校が集まっていた。将軍は私たちを紹介し、ついで私に進行役を務めるように求めた。私がプラデックの共産主義者としての経歴を説明し、プラデック自身の口から、イエンツ・ウイルヘルムセンの通訳を介して、ウイルヘルムセンが、彼の家に滞在している間に優れたイデオロギーによって彼の心を捉えたという話をすると、それまで退屈で眠たそうにしていた顔が生き生きとしてきた。

聴衆は一時間にわたる講演の間ずっと魅せられたままであり、あとの五回も同じであった。私たちを紹介した将軍や大佐たちがあとで、この一連の講演会は、参加者の数が最大であったばかりでなく全体のプログラムの中で最も大きな反響があったと言ってくれた。司令官が私に送った表彰状には、「欠かせない訓練を提供した極めて貴重な貢献」に感謝すると記されていた。

ロックフェラーと革新陣営の人々

これとは全く違ったアメリカ人との出会いはジョン・ロックフェラー三世夫妻であった。ロックフェラーは個人的に日本に大きな関心を持ち、金融上の関心もあって政府の公式使節団

も含めてしばしば日本を訪れていた。彼は経済復興ばかりでなく文化、教育面での発展にも注目していた。彼の付き合いはほとんど経済界や文化的な領域の指導者および保守系の政治家に限られていた。社会党や労働組合の人々と会う機会がほとんどなかったばかりか、アメリカに批判的な人々と直接接触することもなかった。前年、私は、ロックフェラーと日本に同行して彼の日程などを調整する弁護士ドン・マクリーンと会っていた。革新陣営の人々との交流の様子を話したところ、彼はロックフェラー夫妻が次回訪日する際にぜひそういう人々と非公式に引き合わせてほしいとのことであった。私はロックフェラー夫妻と帝国ホテルのロビーであった。短時間話したあと、MRAハウスでの社会党の人たちとの夕食に招くと二人は快く承知した。

次の日曜日、十二人が夕食のテーブルに着いた。化学同盟委員長でもある山花秀雄議員、加藤勘十議員、山村悦郎東芝労組委員長、全電通委員長の久保等参議院議員が同席し、相馬雪香が同時通訳を行った。ジョン・ロックフェラーは寡黙で、でしゃばらない、内気な人で自ら話すよりも相手の話に耳を傾けた。話題は日本の政治、経済、社会の状況から国際情勢に至るまで多岐にわたった。社会党の各氏は丁重な中にも、自分たちの主張を率直に述べた。ロックフェラーはどうしてこれらの人々がアメリカの政策を恐れたり嫌ったりするのかを聞き出すことができた。山花と久保はMRAで学んだ体験を述べ、山村は東芝における革命が階級闘争を時代遅れにしてしまったことを語った。

加藤勘十だけが論争的で、日本との軍事的、経済的つながりを求めるアメリカの思惑は信用できないと述べた。マックス・ブラデックも加わり、両国を含む民主主義諸国は道徳的理念を大切にすべきだと主張した。ロックフェラーは多くの質問を浴びせたが、居心地の悪い答えにも冷静

に対応しているようであった。翌日二人から巨大な花束と一緒に、とても楽しい夜であったとの手紙が届いた。今まで日本でこれほど興味深く、示唆に富んだ時はなかった、と二人が述べたと、のちにマクリーンが語った。

住友グループ総帥との出会い

私たちは日本のロックフェラーのような立場の夫妻に出会うことになった。ローランド・ハーカーとチームに加わっていたアメリカの青年ドン・リビーが山で休暇を楽しんでいた時のことである。そこで二人はハイキングをしている男と出会い、ドンはおぼつかない日本語で自己紹介し、たどたどしい会話を始めた。一見弱々しく、ぎこちない中年の極めて遠慮がちな人に、ドンは何とかうまく話を続けた。

とうとうドンは「アナタノナマエハ?」と尋ねた。「スミトモ」と彼は答えた。彼は二人を近くの豪華な別荘に招いたが、二人は彼が巨大な財閥グループの当主であることに気が付いた。ハーカーはこの人の地位を理解できたが、日本に来たばかりのドンは、ハーカーの当惑ぶりにも構わず、相変わらず質問を続けた。

「アナタノシゴトハ?」

「えーと、特に仕事というのはありません」

「デハ、リタイアシタノデスカ?」

「えー、まあ、そんなところです」

東京に戻ったドンからこの出会いを聞いた私たちは、ぜひこの友人と連絡を取るよう勧めた。

こうして相馬恵胤夫妻と共に私たちはある日曜日に鎌倉の近くの丘にある家に招かれることになった。吉左衛門、春子夫妻それに二人のお嬢さんははにかみがちであったが、やがて打ち解けて私たちや私たちの仕事について質問したり、自分たちについても話すようになった。

占領当局が財閥各社や財産の支配を彼から奪うまでは、住友吉左衛門は王族のような生活を送っていた。だいぶ後になってもっと親しくなった頃であるが、ある物の値段が話題になったところ彼はためらいながら次のように語った。

「私は物の値段については全く知らないのです。自分でお金を使ったことがないのです」店に立ち寄って何か気に入るものがあれば、翡翠（ひすい）であれ車であれ欲しいものをお付きの者に告げて店を出るだけでよかった、と彼は説明してくれた。

住友家の財産の多くは没収されたものの、かなり残されていた。ある時、それまで聞いたことのない家のことが話に出たので、いくつ家を持っているのかと尋ねた。彼は困った顔をして数を数えながらつぶやいた。

「七つ…だと思いますが」

このうちの一つ、京都の家は小さな御殿で、翡翠や多くのすばらしいコレクションを集めた美術館であった。

私たちがコーへの代表を集め始めた際、吉左衛門、春子夫妻にも一行に加わらないかと誘った。ためらったあとでK（と彼は私たちにそう呼ばせていた）はおずおずと同意した。対外的な場から退いていた二人、特に内輪の交流も避けていた彼にとっては大きな一歩であった。次いで彼は、住友の名に傷をつけるような言動を外でしないようにと心配する取り巻きや重役の警戒網をくぐ

り抜けねばならなかった。彼はこうした住友系企業の社長や長老たちに私を紹介した。この長老たちは住友の父が亡くなった少年時代以来行使してきた自分たちの影響が侵されることを警戒したのであった。内気で頼りない風貌とは異なる、極めて粘り強い一面をKは発揮し、春子の方も一旦意を決すると鉄の意志を持ち合わせていた。

住友夫妻は二人の娘と共に私たちと一緒に旅し、コーから、ルール地方、パリ、ロンドン、そしてアメリカを回った。住友の名は多くの扉を開いてくれた。Kは住友グループの企業が国の発展に果たすべき役割について熟考していた。正式には政策決定からすべて離れていた彼にとって、これは微妙な問題であったが、彼は住友グループが、誠実な企業活動、労使関係、社会への貢献などを通して他の産業のモデルになることを望んでいたのであった。

帰国とともに住友夫妻は各社の社長たちに対する行動を開始し、彼らが催した昼食会には十四社の社長と長老たちが集まった。Kは会社や国の行く末に対して無責任で無関心であったことを謝罪するとともに、階級闘争の答えになるような生き方を自ら行うことをコーで決心したと述べた。二人は社会党や労働組合の指導者とも親しくなっていた。住友系企業が日本において特徴ある役割を果たすべきであると夫妻は信じていた。一か月後には大阪と京都への訪問が企画された。住友の関係者が、住友系企業の多くの重役を招いての夕食会、大阪クラブでの財界人を対象としたミーティング、そして京都でも同じような集会を開催した。このことを通して私たちは日本の最も有力な産業界とかかわることができた。

住友夫妻と共にコーを訪れた一行の中に、日本社会の重要な領域へと導いてくれた二人の女性がいた。この年輩の二人はある日星島の紹介でMRAハウスを訪れた。二人は見かけによらない

人物であった。背が小さく小太りでお婆さんタイプの穏やかな外見の内に激しい精神力を秘めていた。八十歳台前半の井上秀夫人は卒業生の多くを国の指導者の夫人として輩出している日本女子大の前学長であった。七十歳台の大橋廣女史は現学長であった。二人は女性教育のパイオニアとして全国的に有名であったが、それ以上に数千人もの卒業生にとっての道徳的支柱であり、社会正義の象徴でもあった。

二人はコーへの一行に加えてもらいたいと申し出、元気よく出発することになった。二人は会う人々の心を捉えた。フランク・ブックマンは二人を自分のこけし人形、と呼んだ。丸い体形、輝く目、そして明るい性格を巧みに表現したものだった。高齢にもかかわらず二人は、工場見学であれ、ミーティングであれ、有力者への表敬であれ、常に先頭に立っていた。

東京に戻ってから二人は多くの扉を開いた。旧知の文部大臣を訪ね、学校における市民教育プログラムを進言した。卒業生の多くが住友系企業の重役と結婚していることもあって、こうした重役を啓発したいという住友夫妻の考えにも協力した。日本女子大創立五十周年記念式典では全国から集まった卒業生のために二時間のミーティングが開かれ、ジーンと私がメインスピーカーであった。その数日後、二人は六十五人の卒業生を選んで、「人を変え、啓豪（けいごう）する方法」を学ぶ目的でハウスを訪れた。

その後まもなく私たちは忘れえぬ人物に出会うことになった。ソ連は第二次大戦後に満州で捕えた日本人捕虜を徐々に送還し始めた。最初のグループは洗脳され、工作員もしくは共産主義のシンパとして送られた人々であり、次いで大多数の無関心な捕虜たちが帰国した。最後に帰還したのが日本軍の情報部隊にかかわった兵士や反共産主義者としてのレッテルを貼られた人々であった。

一九五七年（昭和三十二年）二月初め、相馬登喜子は兄の関辰二が次の帰還者の中に含まれていると知らせを受けた。捕虜になった時に彼は陸軍情報部隊に属していたため十一年間も抑留されたのであった。この間妻と娘は死亡し、十代の息子だけが残っていた。

帰国後まもなく私たちは関を夕食に招いた。やつれた姿や神経質な話し方と身振りとが彼の経験した緊張、窮乏、そして危険を物語っていた。彼の話は生々しかった。何十万人の捕虜と共にシベリアに送られたのであった。寒さと劣悪な生活条件の中で何千人もの人が死亡した。後に彼は建設作業のグループに入れられ、ロシアの生活を洞察することができた。各地を転々と移動させられたが、行く先々に未完成の建物が点在していた。地方官吏は工場や事務所建設のための資金をモスクワから受け取るが、無能であったり汚職があったりで、プロジェクトが完成する前に資金が底をついてしまうのであった。至るところ不正だらけであった。やがて、ハンマーやシャベルから少しでも目を離すとそれが盗まれてしまうことに日本人たちは気づいた。獄舎の倉庫の鍵はロシア人の監視ではなく、常に囚人に与えられた。さもなければ食物も道具も消えてしまうのであった。

関はコーに関する記事をロシア語の新聞で目にしたことがあった。記事は否定的に書かれていたが、道徳の絶対基準によって社会を再建しようと国際的なグループが幅広く活躍していることが十分わかった。そこで彼は、もし釈放されたらMRAと連絡を取ってみようと決めていたのであった。妹がこの仕事にフルタイムで打ち込んでいることを知って驚き、喜んだ彼は、自分も何かをしたいと申し出た。関と共に苦難を分かちあい、一緒に帰国した仲間に伊勢田富二がいた。この二人は健全な国作りを目ざす闘いに加わり貴重な戦力となった。

オーストラリアのギル・ダッシー国会議員を迎える石川島重工の土光敏夫社長（左）と柳沢錬造労連委員長（1955年）（訳者提供）

羽田空港でフランク・ブックマン博士を迎える（左から）三井高維、一万田尚登大蔵大臣、山田節男参議院議員、古沢夫人（鳩山一郎首相令嬢）、加藤シヅエ参議院議員、一万田蔵相令嬢（1956年）

天皇陛下に代わって勲二等旭日章をブックマン博士に送る重光葵外相（1956年）

首相官邸でフランク・ブックマン博士を迎える鳩山一郎首相夫妻。左は星島二郎衆議院議長（1956年）

MRAマキノ島会議（アメリカ）でブックマン博士を囲む約100名の日本青年団一行（1957年）

劇「明日への道」で貧しい百姓役を演じる住友吉左衛門住友家当主（中央）。左端は柳沢錬造石川島重工労連委員長（1958年）（訳者提供）

劇「明日への道」を観劇する東洋レーヨン（現・東レ）の従業員とその家族（大津）（1958年）

バギオ会議（フィリピン）でホスト役を務めるロス・リム上院議員。（左から）尹城淳国民議院外務委員長（韓国）、ロス・リム上院議員（フィリピン）、星島二郎衆議院議員（日本）、何応欽戦略顧問委員会委員長（台湾）（1957年）

石の獅子像と星島二郎衆議院議員。1957年星島議員は、所蔵していた石の獅子像とその台座を当時の駐日韓国代表部に返還した。これは暗礁に乗り上げていた日韓交渉の最も微妙な問題に触れることになった。韓国の国宝が日本による併合の間に日本に持ち込まれ、その多くが民間の手に渡っていた。星島議員は、両国関係改善への具体的行動として、他の日本人への範を示すべく自ら償いを行った

（訳者注）

この像について、当時星島氏は「乙巳保護条約の際に韓半島から搬出されたものであり、搬出した人は初代統監を務めた伊藤博文という説がある」と説明し、韓国の専門委員も調査の結果この獅子像が「国宝35号華厳寺四獅子三層石塔と類似した統一新羅時代の傑作であるとみられる」との報告書を提出した。しかし、その後日本の浅川伯教から「華厳寺四獅子三層石塔を搬出しようとしたができなかったので1930年に自分が複製し、木浦（モッポ）で製作した後に日本に送った」と証言し、韓国の専門委員もこれを認めた。

しかし、1965年の日韓国交正常化以後も駐日韓国大使館の庭に展示されながら歴史的事実はあいまいに忘れられた。しかし、2010年に駐日韓国大使館の新築工事で獅子像を韓国に送り返した方がよいという意見が出た際に、この事実関係が改めて確認された。そして、この獅子像は2013年に韓国に帰国した。複製であっても、韓国の文化財を返還したという星島二郎氏の行為の価値が下がることはない。

スイス、コー（Caux）の「マウンテンハウス」。1902年（明治35年）にホテルとして建てられたが、第二次大戦中は避難民の収容所として使われ荒れ果てた。戦後、「戦禍をまぬがれたスイスは、分裂した世界に融和をもたらす場を提供すべきである」と感じたスイスの百余りの家族がこれを買い取り修復し、以来MRA国際会議場として今日に至る。

終戦の翌年の1946年から1950年にかけて、大戦で戦った約四千人のドイツ人と約二千人のフランス人を迎え、独仏和解に貢献し、後のEU結成に貢献した。南アの黒人と白人、レバノンのキリスト教徒とイスラム教徒、旧植民地側と旧宗主国側、アメリカインディアンと白人など対立する立場の人々が世界中から集まり、さまざまな問題解決の場となっている。これまでに片山哲、中曽根康弘、岸信介、福田赳夫、羽田孜、鳩山由紀夫の6名の日本の首相経験者も出席している（訳者提供）

MRAハウスで外国人ゲストを迎える（前列左から）戸叶里子議員、加藤勘十議員、三井高維、戸叶武議員（前に出ている）、相馬雪香、木村利根子（訳者提供）

中国周恩来首相（左）と乾杯する日本青年団協議会訪中団長寒河江善秋（副会長）。労働組合幹部や作家など「招待外交」による日本人が多く同席する中で、彼に一番の上席が与えられ、最初のあいさつが求められたことが大きなセンセーションを呼んだ。寒河江の趣味まで知りつくし、サインまで望む周恩来の対応に、寒河江は“懐（ふところ）にすいこまれるように”感じたという（1956年）（訳者提供）

スイス、コーのMRA国際会議場玄関前に並ぶ（前列右から）福田越夫元首相夫妻、岸信介元首相夫妻、千葉三郎議員、周東英雄議員、坊秀男議員（1961年）（訳者提供）

ジェイムズ・ディクソン議員（スウェーデン）を迎える吉田茂元首相（1962年）
（訳者提供）

第十一章　二つの国際親善使節の来日

ミュージカル劇『消えゆく島』来日

一連の披露公演が終わった後『ボス』は教育者、国鉄、国会議員などのために上演されたが、新たな展開に備えて劇はしばらく中断されることになった。デンマークの元外相オーレ・ビヨロン・クラフトが有力な政治家の使節を率いてアジアを歴訪することをフランク・ブックマンに提案し、東京がその最初の訪問地になったからである。このニュースを聞いてまもなく、ミュージカル劇『消えゆく島』（The Vanishing Island）がこの〝ステーツマンの使節〟に随行することをフランク・ブックマンが伝えてきた。一行は総勢百人ないし二百人で本格的な舞台装置を伴うとのことである。このニュース自体は歓迎したものの、日本にとって戦後最大のこのようなイベントをこなすことだけでも大変なのに、わずか六週間後の六月中旬には一行が到着すると知って、いささか圧倒されてしまった。

しかし、この訪問は多くの人を巻き込み、多くの友人に積極的に動いてもらう絶好の機会となっ

た。石川、石坂両氏のような実業家、東京都や大阪府の知事、政界の長老その他多くの人が招待委員として名を連ねた。山際輸出入銀行総裁がこの事業の資金調達の責任者となり、ニッポン・タイムスの長谷川進一編集総務が広報の指揮をし、社会的に著名な女性たちによる委員会が当時としては極めて珍しいホームステイの準備を受け持った。

ある日一万田は彼の主催による一行の歓迎レセプションについて打ち合わせするために私を伴って鳩山首相を訪ねた。日本銀行の新木総裁、衆参両院議長もそれぞれレセプションを企画した。

一九五〇年（昭和二十五年）のコーへの最初の代表団以来、既に数百人の日本人がコーとマキノ島の会議に参加し、極めて意欲的な雰囲気に触れていた。一九五五年（昭和三十年）夏の今、日本で直接に何千人もの人々が劇場や、数々の会合や、テレビを通してそれらの会議の精神を生に感じることになった。羽田に到着した一行はこれまでに日本に上陸したことのないユニークな構成のグループだった。ミュージカルの出演者ばかりではなく、ヨーロッパ、アフリカ、アジア各国の政界の有力者が多数加わっていた。出演者の方も有名な俳優、女優に混ざって舞台が初めての人々もあった。ニューヨーク、ボストン、ワシントン、シカゴなどで社会的に活躍する女性もいれば欧米の実業家やさまざまな職業の人々が含まれていた。一行に唯一の共通点は、人が変わることによって世界を作り変えるという信念に基づいて生き、行動しようとしていることであった。来日して初めてお互いの来日を知って驚いた外国人も多かったと同時に、それら外国人に会ったり、テレビや新聞で目にして驚いた日本人も多かった。

ニッポン・タイムスは十日間に及ぶ駆け足訪問の模様を次のように伝えた。

「学び、かつ与えるために私たちは参りました」この心構えと目的を持って、十二の言語とすべての人種を網羅した二十五か国百八十人から成る〝ステーツマンの使節〟は日本における一週間余りの歴史的な訪問を終えた。

一行の中には英国労働党下院議員を二十五年間務めるジョン・マクガバン、チュニジアの国務大臣マームド・マスムディ、デンマーク保守党党首で元外相、元ＮＡＴＯ議長のオーレ・ビヨロン・クラフト、スイス大統領を十四年間務めたオスカー・ライムグルーバー、東ナイジェリアの国会議員Ｂ・Ｃ・オクウ、イランの長老国会議員兼新聞記者で今回パーレビ国王を代表して一行に加わっているマジド・モバガルなどが加わっていた。

羽田空港到着に際し、『消えゆく島』の作者ピーター・ハワードは次のように語った。

「ＭＲＡは西が東に与えるものでもなければ、東が西に与えるものでもない。それは人が人に与えるものである。私たちは日本がアジアの灯台になるというフランク・ブックマンのビジョンが実現されるよう皆さまに協力するために参りました」

鳩山首相夫妻はこの一行全員を六月十五日に首相官邸で迎えた。閣僚八人と招待委員会一同も同席した。

六月十五日国会においては対立する政党が一緒になってこの一行を歓迎した。両保守党および両社会党が四時間半にも及んだレセプションに同席し、参議院では正式の歓迎を受けた。河井弥八参議院議長は次のように述べた。「今日の日本の現状において、最優先課題はＭＲＡを基盤と

する国の再建である」

何千人もの人々が、この一行の理念を盛り込んだミュージカルを見に東京劇場や大阪の北野劇場を埋めつくした。皇室の方々も参席された。総理夫妻も三十人の人々を伴って観劇した。百人以上の国会議員、多くの国の大公使、それに産業、労働、教育、青年団体など各界各層の人々が観劇した。

ＮＨＫテレビはこれを録画し四十五分間全国放映した。この番組ではオーレ・ビヨロン・クラフト、ピーター・ハワード、三井報恩会理事長三井高維、『消えゆく島』に出演している有名な女優田中路子の各氏へのインタビューがあった。

ある国会議員はこのＭＲＡ使節団の影響を次のようにまとめた。「十年前は全世界から敵視されていた日本に今では世界の人々が訪れ、ＭＲＡ精神によって世界を再造するために日本が再び立ち上がるよう呼びかけている」

この新聞は社説でこの使節に次のような賛辞を送った。

全世界を代表する人々が示したＭＲＡの強烈な印象とその強さは、その数ではなく参加者の熱心な献身と人格とにあることが示された。これらの人々は政界、実業界などさまざまな分野での指導者であるにもかかわらず、一体感があり、しかも理想主義的な面と現実的な面との両面を持ちあわせている。ＭＲＡの理念は私たちが当たり前のように扱っている人間性を変える——革命とさえ言える——ことである。世界の各界の指導者による訪日はこうした根本的な革

命に対する大きな希望を与えてくれた。正直、純潔、無私、愛を人間関係に生かすという目的が決して不自然ではないということが十分示されたわけで、これが国家間の関係で実現された時に世界平和が達成されるという可能性に感動を覚えた。

フィリピンでの謝罪

ＶＩＰを乗せ台湾に向かって羽田から飛び立った一番機には四人の日本人が同乗した。外務省や台湾、フィリピン両大使館との緊急交渉の結果、星島二郎、加藤勘十、相馬雪香、中嶋勝治の四人がパスポートとビザを取得することができた。日本人を加えるということは極めて大胆なことであった。日本人が台湾でどう受け入れられるか定かではなかったし、フィリピンではいまだに恐れと憎しみを持たれていたからである。国会の長老の一人となっていた星島は、この一行に加わることを鳩山首相に相談し、そのリスクを負うことの支持を得た。

数日後、マニラで起こった歴史的出来事の模様が伝わった。劇の初演の後、舞台から聴衆に向かってスピーチするグループに加わって星島が前に歩み出た時である。日本人がいるのに気づいた観客の中にショックが広がった。そして彼の番が回ってくると、凍りつくような沈黙が劇場を包んだ。日本語で話し始めると、怒濤（どとう）のような野次が聴衆の中から起こった。涙ながらに通訳する相馬雪香を通して、星島はフィリピンに対する過去の残忍な仕打ちを謙虚に謝罪した。

「許してください。ＭＲＡは既に新しい日本を建設しております。ＭＲＡを通してアジアは融和することができるのです」

沈黙は観客の拍手にとって代わった。マグサイサイ大統領が一行を迎えた際、日本人もその中に加わっていた。彼らはそこでも謝罪をし、MRAが日本に必要であるとの考えを述べる機会が与えられた。心の広い人類愛に燃えたマグサイサイ大統領は日本人の真摯な態度に打たれ、二年後に死去する直前にはMRA使節の一員として日本人がフィリピンを訪問することを許可した。

一行のほとんどが台北に向かったあともクラフトほか十一人は韓国訪問の気持ちを抱いて日本に残った。韓国と日本の間にはまだ国交が開かれておらず、金大使を代表とする連絡事務所があっただけである。長身で穏やかで友好的な金大使はこのやっかいな仕事に最善を尽くしていた。当時両国政府は領土、通商、賠償の問題をめぐって暗礁に乗り上げていた。長年にわたって日本の搾取を受けた韓国は日本人の入国を許していなかった。『消えゆく島』を見、日本におけるMRAの働きを評価していた金大使を通して、クラフトとその一行には異例のスピードでビザが与えられ、ソウルでのハイレベルでの歓迎が約束された。数日間の滞在中に一行は多くの指導者と会う機会が与えられた。

平和の人フランク・ブックマン博士来日

この最初のMRA国際使節に続いて、翌一九五六年（昭和三十一年）四月末にはフランク・ブックマンがオーストラリアから来日し、第二の国際使節となった。ブックマンに同行した一行は多彩な顔ぶれで、ドイツ、ヘッセのリカード王子、英国のテニスのスター、バニー・オースチン、オックスフォード大学の哲学博士モリス・マーティン、ビルマのラングーンのジョージ・ウェスト司

教、英国の女優のフィリス・コンスタン・オースチン、アメリカの若手歌手トリオのコーウェル兄弟などが混ざっていた。ブックマンにとっては八回目の訪日であったが、前回の来日は三十年以上も前のことであった。今では七十代の後半で、弱々しく動作も遅く、時折の休息を必要とした。最後となったこの訪日では、国の指導者の最もよいものを引き出すという博士ならではの能力が見事に発揮されたのである。コーとマキノ島大会にはすでに六百人にも及ぶ人々が参加していたが、その多くが、博士が滞在していた帝国ホテルや、さまざまな催しの合い間に訪れ博士に感謝を表明した。一行が羽田に到着した際は一万田、加藤夫妻、戸叶夫妻、星島その他の国会議員を含む指導者を含むにぎやかな出迎えを受けた。選挙法改正法案を巡って混乱する国会から駆け付けたにもかかわらず、ブックマンを歓迎する気持ちに自民党も社会党もなかった。一行は直ちに一時間半に及ぶ記者会見に臨んだ。一方、コーウェル兄弟の歌に何人かのショートスピーチが加わり、友人や通行人も混ざって空港ロビーの一部は即興の集会になった。ロビーの反対側では赤旗とデモ隊が北京とモスクワのメーデー式典に参加する労組リーダーの一行の歓送に気勢をあげていた。

翌日は、オーストラリアからの長旅のあとでもあり軽いスケジュールの予定であったが、多くの会見で埋まってしまった。日米協会の小松会長は、石坂が講演をすることになっている昼食会にブックマンを招いた。石坂の家に滞在していたコーウェル兄弟は、この昼食会で歌を披露するように頼まれた。石坂はその午後ブックマンを訪れた。ブックマンは日本の経済面での彼の指導力をたたえる一方で、日本の道徳と精神の向上と、彼の息子たちにも十分時間を費やすよう促し

た、とのことである。この時の会話は決して忘れられないとのちに石坂は語った。続いて訪れた東洋レーヨンの袖山社長は、MRAのおかげで労使の調和が生まれたことをブックマンに語った。さらに英文毎日の藤本編集長が記者数人を連れてインタビューに訪れた。ブックマンはそこから夕食も取らずにホテルの劇場に向かい数百人が参加した二時間の集会に参加した。

翌朝日本銀行の荒木総裁が表敬に現れた。続いて一行は東京都知事に迎えられ、コーウェル兄弟は歌を披露し、ブックマンは安井知事から東京都の鍵を贈呈された。そこから一行は一万田大蔵大臣公邸での身内の昼食会に向かった。社会党は一万田に対する不信任決議案を提出したばかりであったが、彼は六十余人の客の中に加藤夫妻と戸叶夫妻も加えるという寛大なところをみせた。午後は住友が二人の長老を伴ってお茶に訪れたあとはニッポン・タイムスの長谷川によるインタビューが続いた。

天皇誕生日の翌日は首相によるインフォーマルなレセプションが行われた。この朝鳩山は老練な政治家とは違った一面を見せた。彼は心の温かい家庭的な人で夫人、子供、孫を一同に集めていた。ブックマンは用意周到であった。この首相はクリスチャンで原則を尊ぶ人だが内外の難問に悩まされ、身体の障害がハンディになっていることを心得ていた。ブックマンはまずコーウェル兄弟が鳩山一家のために作曲した歌を日本語で歌わせた。続いて一行を紹介しながら、世界各国で出会った人々との出会いを一人ひとりに簡潔で具体的に語らせた。笑いと、真理にうなずく沈黙が交互する一時間であった。鳩山は日本語版『リーダース・ダイジェスト』にこの一時間を「忘れ得ぬ時」とよびブックマンを「忘れ得ぬ人」と評した。

三井家と住友家の当主共催という極めて希な昼食会が三井クラブで催された。両家の人びとのほか三井、住友の系列会社の社長が招かれていた。住友吉左衛門は、かつて責任を放棄してしまった自分が人間として変わる必要を述べ、経営者が国の道徳と精神問題も担う必要があることを説いた。かつては内気で会話も苦手であった彼による勇気あるスピーチであった。ブックマンのこの日の最後は外務大臣主催の天皇誕生日祝賀レセプションであった。

翌日ブックマンは松野参議院議長の正式な出迎えを受け、貴賓傍聴席へと案内され、議長から正式に紹介され、全議員が立ち上がっての喝采を受けた。国賓や議員以外でこうした栄誉を受けた外国人は彼が初めてであると星島は語った。一行は参議院から衆議院の合同委員会室へと案内された。衆議院は選挙法改正法案を巡って危機的な状況の真っただ中で社会党はこれを葬ろうとして、荒れた状況であった。通常の昼間の審議のほかに夜間審議を二晩続けた後で神経も高ぶっていた。法案によって議席が脅威にさらされた五十人の社会党議員は実力行使も辞さない覚悟で翌日のメーデーのデモを使って一騒ぎ起こそうとしていた。自民党はかつての暗い時代を想い起こさせるような国会内への警察力の動員も検討していた。

こうした緊張した雰囲気の中で開かれた昼食会とその後の立すいの余地もない出席者によるミーティングにフランク・ブックマンは陽気でリラックスしたムードを作った。二つの主要政党の長老である星島と片山がブックマンを紹介し、この訪問がいかに時宜を得たものかを語った。MRAは「何が正しいか」という精神をもたらすために舞台裏で静かに活動していると星島が述べれば、片山は「このような危機の時にこの平和の人を迎えることは、両党間の行き詰まりに

対する解決策を見いだす希望を与えてくれる」と付け加えた。ブックマンはモロッコとチュニジアで激しく対立していた両極のグループ同士が劇的に和解した事実を細かく表現豊かに紹介して、日本における対立に関する展望を示した。

翌日の夜帝国劇場で開かれたミーティングで、星島、加藤夫妻、戸叶夫妻は、ブックマンが両党の人々と会ったことが衝突を食い止め、この危機を乗り切るための共通の意識を生み出し始めた、と出席者に報告した。これらの人々は両党の不満分子に主導権を握られないように、両党の指導者が一同に会して主な対立点を取り除くように促したのであった。

ブックマンは国会から秩父宮妃殿下の御所に向かいコーウェル兄弟の歌を混じえた思い出深い一時間を過ごした。そこから一行はホテルへ向かい、総評と全労会議というライバルとして君臨する二つの全国労働組合の八人の指導者と会った。二階のラウンジでのお茶のあと、八十万人の組合員をもつ全労会議議長滝田実は次のように語った。

「これは、メーデーの激しいデモを企てていたわれわれの世界とは違った世界だ」

最終日の五月一日はこの訪問のクライマックスであった。まず毎日新聞社主の本田親男との会合では、正しい考えを日本に伝える新聞の使命を担うステーツマンとして活躍してほしいとのブックマンのビジョンに、彼はとりことなり、十五分の予定が一時間にわたった。昼食後五十万人の労働者が街頭を行進する中を、ブックマンは十数人の金融産業界のトップによるレセプションが行われる日本銀行氷川分館のツツジの美しい庭へと向かった。新木総裁と石坂がホスト役であった。国鉄の十河信二総裁は地方訪問を六日間も切り詰めて出席した。一万田、渋沢敬三、渡辺忠

雄三和銀行頭取、山際正道輸出入銀行総裁、柳田誠二郎日本航空社長も出席した。

新木総裁はブックマンを次のように紹介した。

「MRAは戦後の日本再建に極めて重要な役割を果たしました。世界の理解のために国と国との心を融和するという偉大な功績に心から賛辞を贈るものです」

ブックマンはエジソン、フォード、ファイヤストーンとの長年の親交に触れ、これらの人々の発明を見事に生かした日本は今、その国民のエネルギーや技術を用いてMRAを世界に役立たせるべきである、と語った。

ブックマンはこのレセプションをあとに外務省へ急いだ。そこには重光葵外相が勲二等旭日賞を授与すべく待ち受けていた。大臣はリボンをブックマンの首にかけながら次のように述べた。

「貴下の我が国に対する多大な功績をたたえるために天皇陛下から授与された勲章をお渡しすることは私にとってこの上ない喜びであります」

この受賞の裏には劇的な対立があった。ブックマンの訪日の予定を知った星島は日本に対する彼やMRAへの恩義を示すために最高の勲章を授与すべきであるとして一万田と共にそのための動きを開始した。こうした勲章を外国人に与えることには内閣、宮内庁、それに当該大使館が関係していた。勲一等旭日賞は滅多に与えられなかったが首相、外相、その他の閣僚はMRAが日本に果たした貢献を確信しており、日本政府に関する限り何ら問題なしと星島と一万田は見ていた。しかしアメリカ大使館は別であった。私たちはアメリカ大使ジョン・アリソンはMRAに好意的でないと注意しておいたが、それどころではなかった。

推薦の公式要請が外務省から大使館に送られた時の反応は否定的であった。次いで星島と加藤夫妻はアリソン大使を訪ね、ブックマンが授賞すべきだと強く主張した。彼は初め言い逃れをしていたがやがて無礼な態度に変わり、三人は大使の偏見と乱暴な態度にショックを受けて帰ってきた。あとで話を総合してみると、アリソンは外務省や宮内庁の幹部にブックマンやMRAを中傷していたことが分かった。彼はMRAは共産党の路線に追従し、ブックマンは自らの功名を求める野心家で、大使館にとっては好ましからざる人物（persona non grata）であるとふれまわっていた。彼の強硬な反対にあって宮内庁は、ブックマンが天皇陛下と皇太子殿下に謁見を受けるようにとの外務省の要請に応じることを断念した。

鳩山や他の閣僚はブックマンを叙勲すべきであると強く感じており、内閣は難しい立場に置かれたが、アメリカ大使に反抗することははばかった。政府はこの強力な同盟国との友好関係を維持することに気を遣い、公に意見を異にすることは控えた。一万田が発言した際には、慎重派の閣僚たちは一切何もすべきでないと反対した。小柄で情熱的な大蔵大臣は、内閣が自らの良心に従って行動することを妨げようとする臆病さを面罵し、ブックマンは叙勲に充分値する、と主張した。閣僚はいずれもMRAが日本にとって内外ともに重要な価値を持っており、偏見を持ったアメリカの一官吏に邪魔される筋ではないことを知っていた。そこで、勲一等の授与には大使の推薦が必要であるので、アリソン大使を無視して勲二等に決定されたのであった。

日本での最終日は外務省での受賞式以外にも盛りだくさんであった。帝国ホテルで最後のミーティングが行われたあと、友人多数が午前二時出発の見送りのために羽田まで同行した。政、財、

労働界の指導者からこの訪問への惜しみない賛辞が寄せられたが、それは一面に過ぎなかった。一方では、いつも一般庶民に思いやりをもっていたブックマンの側面があった。ブックマンが日本を去ったあとのミーティングで、彼についていた運転手が発言した。「二十年間運転手をしていますが、ブックマン博士のような人に会ったのは初めてです。最終日の真夜中に空港までお送りする途中、私は心のうちをすっかり打ち明けることができました。あの人は私に生きがいを与えてくれました」

第十二章　アジアとの架け橋作り

コロンボ・アジア大会に招かれて

一九五〇年（昭和二十五年）にケン・トウィッチェルと私が来日した時、この国が道義的、精神的、社会的、経済的に生まれ変わるには他国との関係が含まれると認識した。経済の生命線を握る対外貿易の拡大は外国市場の再開にかかっていたし、新しい民主的制度の強化も安定した対外関係を必要としていた。これがなければ国内の勢力による転覆活動や外からの介入にさらされるからであった。もっと基本的には、国民精神の回復には戦争中の行動に関する罪意識の償い、外国からの尊敬の回復、国際社会への復帰が必要であった。一九五〇年の日本の代表団の世界一周は欧米との関係修復のささやかではあるが画期的な一歩を踏み出していた。

しかしほとんどのアジア諸国との関係正常化はこれよりも困難な問題であった。一九五一年（昭和二十六年）の講和条約は、日本が侵略した国々に賠償を支払うことを義務づけていたが、その条件は旧敵国と個別に決定することになっていた。一九五〇年代前半は日本自身が荒廃から立ち

上がるにきゅうきゅうとしており、実質的な賠償を支払うことは不可能であった。しかし通商や外交関係以上に抜本的なことは、戦争中に生じた傷や憎しみを癒すことであった。フィリピン、マレーシア、インドネシア、ビルマ、そしてとりわけ韓国にとっては忘れることも許すこともできなかった。

一九五一年（昭和二十六年）日本で初めて家族と共にクリスマスを過ごした私は、翌日東南アジアでの今後の戦略についてインド、ビルマ、タイで活動しているＭＲＡの仲間たちと模索するためビルマのラングーンで開かれた会議に参加した。これらの国々の有力な人々が、フランク・ブックマンの一行をこれら諸国に招待していたが、アジアの諸国が西欧側との緊密な関係から撤退しがちであったこの時期としては画期的な動きであった。

私たちは、それぞれが関係の深いアジアの八か国の政治的、経済的、イデオロギー的状況について分析した結果、二つの強い勢力があることに気がついた。今やアジアの大陸にしっかりと根を下ろした共産主義とさまざまな形での西側に対する反抗。民族主義、独立への情熱、仏教をはじめとした東洋の宗教の台頭の二つである。こうした一触即発の状況の中ではＭＲＡの役割が大きいことを感じた。許しと和解の主張は東洋と西洋の架け橋であり、両方の宗教にアピールでき、何百万人もの一般の人々に受け入れられ、共産主義と反共産主義との対立にとって代わる道を指導者に示すことができるからである。そこで私たちはブックマンがこの招待を受けて、出来るだけ早く選りすぐった国際チームと共にアジアを歴訪するよう進言するレポートを作成した。

ラングーン訪問のハイライトはウー・ヌ首相との会見であった。敬虔（けいけん）な仏教徒である彼はまた、

学者や哲学者タイプで、世界大戦の終わりに英国から独立を達成した愛国者アウン・サン将軍の片腕であった。アウン・サンと閣僚の数人は反対勢力の手によって暗殺され、ウー・ヌがこの分裂した国を統治することになった。二つの共産主義グループ、対立する少数民族や、多くの盗賊集団が存在していた。彼はカレン族を除いて国の統一を果たすことに成功していたが、私たちがラングーン滞在中は内戦と盗賊集団の出没とによって、飛行機以外でビルマ各地を巡ることは不可能だった。

暗殺の脅威は依然として存在し、首相や政府高官の家は一つの区域にまとまってあり、高い鉄条網に囲まれ兵士が昼夜を分かたずパトロールにあたっていた。ホストのウェスト司教が私たち一人ひとりとどこから来たかを紹介すると、えびす顔のウー・ヌはにこやかに応えた。しかし、日本と聞くと表情がこわばった。日本の侵略によってビルマも彼自身も被害を被り、日本には親近感も抱かず、日本の最小限の再軍備にも公に反対を表明していた。私は戦争犯罪に対する悔い改め、アメリカ議会での栗山、北村両議員の謝罪、官公労の労働者と警察官との間の正直さと関係修復、家庭や産業における新しいチームワークなど日本に起こっている実際の変化の話を紹介することができた。ウー・ヌは興味を示し、こう語った。

「MRAが日本の指導者をこうした気持ちに変えることが間にあえば、日本の再軍備に対するわれわれの態度も和らぐであろう」

フランク・ブックマンはアジア諸国からの招きに応え、これら諸国に訪問団を送ることを決め、彼も一九五二年（昭和二十七年）十月にセイロン（現・スリランカ）のコロンボで開かれるアジ

ア大会に彼も参加するという電報がこの年の夏に届いた。彼はまた日本の代表を伴って私たちにも参加するよう求めて来た。国会議員は選挙後の新しい国会に忙殺され、実業家は不況からの脱出のために悪戦苦闘中、労働組合のリーダーたちは賃上げ攻勢の真っ最中という時期であるのに加え、参加者は反日感情に十分耐えて敵を友と変え得るような人でなければならず、これは至難の技であった。やっと右派社会党の国会議員である戸叶武・里子夫妻、一万田が推薦する日本最大の海運会社飯野海運の飯野雄二社長、三井高維・英子夫妻、相馬恵胤・雪香夫妻が参加することになり、トム・ギレスピーと私が同行した。

この会議は仏教世界の中心であるビルマとセイロンでMRAの存在意義を高め、両国の仏教界からも正式に認知されることになった。私たちの一行がグランドオリエンタル・ホテルの会場に入ると、壇上では僧侶十数人が座って会議の進行に当たっていた。日本人一行は壇上に案内され、戸叶里子議員が一行を代表して簡単にあいさつした。

到着の翌日、ダドリー・セナナヤケ首相は公邸の庭でレセプションを催したが、何百個もの木々が色彩豊かな電球で飾られていた。立食式の夕食を通して多くの指導者と交流を深めることができた。上院、下院、新聞社、港湾局、市議会などもそれぞれレセプションを主催した。毎日午前と午後に学生、経済人、警察、郵便局、港湾労働者などとの会合が開かれた。新聞各紙はすべての行事と会議での発言を逐一大きく報道した。日本人はしばしばミーティングで発言を求められ、スポークスマン役を務めた戸叶夫妻をはじめとして戦時中の体験によって描かれたイメーシとは異なる日本の姿をアジアの人々に示すことができた。

一九五四年（昭和二十九年）の初めには、別の日本代表団が東南アジアを訪問した。タイの指導者が企画した会議にアジア諸国の代表と共に招かれたのである。相馬豊胤夫妻が率いたこの一行には広島出身の山田節男参議院議員と全電通の鈴木強委員長が含まれていた。会議は文化省で開かれルアン・ビッチェン長官がタイ政府を代表して一行を歓迎した。参加者はアジア十二か国を数え、各国の有力な人々が含まれていた。マレーシア国会議長、セイロンの国会議員と労働総同盟議長、インドからは二人の労働組合のトップ、ビルマの一行の中には鉱山協会会長、国鉄総裁、それに仏教の高僧グループが含まれていた。

会議は冒頭から公的な色彩をおびることとなった。ピブン・ソンクラム首相が会議でスピーチしたほか首相夫人は多くの会議に参加して、相馬登喜子と親しくなった。バンコックの市長も務める教育大臣や外務大臣のナラディップ殿下も参加した。期間中を通してタイ側は模範的な歓待をしてくれた。それはタイ民族固有の柔和な国民性とともに、国内が政治的にもイデオロギー的にも緊張の渦中にあるためでもあった。タイは戦乱が進行している隣接諸国の真っただ中に位置し、マレーシア、ビルマ、ラオスとの国境においては非常事態が宣言されていた。政府はMRAを問題解決の勢力と見なしていたようで、あらゆる助けを惜しまなかったわけである。

アジア諸国との関係修復

日本と近隣諸国との関係は、星島議員がマニラで公に謝罪をした時に前進をみた。その後一九五五年（昭和三十年）も暮れにさしかかり、私たちはアジアとますます深くかかわっている

ことに気がついた。日本人医師による夫人のガン治療のため台湾の何応欽将軍夫妻が夏から来日していたのである。MRAハウスの隣の家を借りていたこともあって、しばしば顔を合わせることになった。将軍は戦前日本の士官学校で学び東京に友人が多いので、日本での生活には慣れていた。アメリカの強い指示もあって、台湾は一九五二年（昭和二十七年）に講和条約に調印しており、旧敵国の中で唯一日本との外交関係を樹立していた。しかし両国の間にはぎすぎすすることが多く、一九五五年（昭和三十年）日本政府は台北での外交を強化すべく堀内謙介を大使に任命した。私たちは何応欽夫妻と堀内夫妻とを夕食に招いた。両夫妻とも自らの生き方や国のあり方についても神の導きを重んじようという考え方を持っており、両国の関係を緊密にするために働く人々のチーム作りについて話し合うことができ、きわめて有意義な夜であった。もう一つの貴重な機会は何応欽将軍と鳩山首相との会談であった。将軍はMRA一行の台湾訪問と星島議員ら日本の一行が果たした貢献について報告した。

十二月の初めにもう一人台湾の客が四日間来日した。台北の新聞「新生報」の編集長謝然之である。最初の夜に彼のための夕食会を開き、何夫妻、中国大使夫妻、堀内夫妻、星島夫妻を招いた。彼は日本銀行新木総裁、毎日新聞本田社主、加藤夫妻など政財界の人々とも会談した。彼は日本、韓国、フィリピンの関係が暗礁に乗り上げていることの脅威を日本側に率直に説いた。これら非共産主義の国々の間の悪感情は、共産中国やロシアに乗ずる機会を与えることになる。特に韓国に対して、文化財の返還、漁業規制の緩和、韓国に対する政府筋の強行発言の撤回などを日本側のイニシアチブで行う必要があるのではないかと提案した。対韓政策で対立している両党

に属している星島と加藤勘十との会談は特に貴重であった。

韓国に対する絶好の機会がこの年の暮れに訪れた。私たちと共に働いていたスイスの若い女性クレア・ウイドマー（訳者注　後にイエンツ・ウイルヘルムセンの夫人）がスイス赤十字の看護士からソウルへ招かれたのである。彼女は、過去の過ちを謝罪し、両国の友好のために全力を尽くすことを誓うとの加藤勘十・シヅエ夫妻の手紙を携えて韓国に向かった。加藤夫妻はその手紙を誰に渡してもよいと頼んだ。クレアはそれを清廉の名声の高い空軍司令官催容徳将軍に渡した。将軍はこれに感動し、「普通の日本人にこんな手紙が書けるはずがない。報道機関を通して韓国国民にこれが伝わるように計らいたい」と述べた。

マニラの米国大使館の文化担当官の女性マーガレット・ウイリアムスが十二月半ばに来日した。そして私たちにフィリピンを訪れて現状を直接見聞するとともに、友達になった人々との親交を深めるのをぜひ手伝って欲しいと頼んだ。クリスマス後私たちは秘書のジューン・リーとオーストラリアの青年スタン・シェパードとともにマニラに飛んだ。ジーンと私は港湾労働組合委員長バート・オカ夫妻の家に滞在した。

オカ夫妻は温かく私たちを迎えてくれ、家庭や、職場での問題まで打ち明けてくれるほどの友達になった。スタンと私は八日間の滞在の間に彼のほかに三人の労働組合指導者と交わることができた。この四人とその夫人たちを含む数人がMRAチームの中核となった。私たちはまたアウレロ・グティエレス夫妻という医者と社会的に著名な夫人と何回か食事を共にすることができた。もう一人特筆すべき人物は若き上院議員ロス・リムである。ダイナミックで何でも買って出るタ

イプの男でいつも論争や政治対立の真っただ中にいた。ところが最近彼は政敵に率直な謝罪をして相手を驚かせた。私たちはリムと労働組合協議会財務局長ジェネ・マドリガルに一月八日から九日にかけて熱海で開かれる労働組合と社会党の会議に参加するように招待した。日本にあえて行こうと思うフィリピン人はごく稀な時代であった。

箱根連山の麓の海岸沿いにあるのが日本の代表的な温泉地熱海である。参加者の一人全逓の横川正市委員長が組合の保養所を手配したのである。組合指導者、国会議員、それに数人の夫人の合計六十人が参加し、影響力のある人々の集まりとなった。加藤勘十、山田節男、片岡が会議の企画と運営に当たった。柳沢、山花、戸叶夫妻、加藤シヅエなどは政治活動だけではなく家庭においても新しい決意が必要であることを説いた。リムとマドリガルは、日本の問題の位置づけを日本人に認識させる上で大きく貢献した。

会議のあとも二人は多くの人と会う一方、観光などで忙しい日程をこなした。その中でもハイライトは労働運動の左右を代表し、互いに敵対し合っている総評と全労との共催による夕食会であった。二人は日本占領下の戦争の傷から自由になれた体験を心を込めて話したほか、両国の労働組合組織に属する何百万人にものぼる庶民の福祉のために両国が協力すべきであることを力説した。外務省高官とも突っ込んだ話し合いが行われ、東京とマニラの全面的な外交関係修復の協力を申し出た。最終日に星島は鳩山総理との短い会見を設けた。リムは両国がより親密になるよう努力してほしいと総理に快活に促し、そうした地ならしをしているＭＲＡの貢献を評価した。

一方オーストラリアからはＭＲＡに関係している有力な人々が日本訪問を考えているとの手紙

が寄せられた。侵略の一歩手前まで来ていた日本に対して、オーストラリアの大多数の人々は反感を抱き、両国関係は極めて低調であった。労働党の中央執行委員で国会議員のギル・ダッシーと実業家で自由党のビクトリア州議会のリーダーも務めたレスリー・ノーマンが、戦争中は空軍のパイロットで現在はMRAで働くジム・コーターと共に来日することになった。対立する政党に属した二人ではあったが日本を憎むことでは同じ気持ちであった――ダッシーの弟はビルマの日本軍捕虜収容所で亡くなり、ノーマンは悪名高きシンガポールのチャンギ捕虜収容所で三年を過ごしたのであった。

一九五五年（昭和三十年）三月にこの一行が到着した翌日、木村行蔵と緒方竹虎は鳩山首相との会談を設けた。まずオーストラリア側から口を開き、謝罪をしたいと切り出した。この言葉が通訳されると総理がそれを遮り、オーストラリアに謝るのは自分の方だと述べた。戦争中のことではなく戦争に至るまでの時期のことですとオーストラリア側は続けた。危機に瀕した経済状態の中で民主主義を信じる日本の人々が民主主義国家の協力を期待していたその時期に、オーストラリアは自国のことばかりを考えた政策をとってしまったために、軍事力で経済活動を牛耳ろうとしていた日本人グループの支配を容易にさせてしまったと、彼らは感じた。

隣国の信頼と感謝を勝ち取るために

新しい友情のシンボルとして一行は小さなコアラの剥製を総理に贈呈し、日本に対する憎しみを捨て、MRAを通して共に新しいアジアを築く機会が与えられていると語った。鳩山総理はそ

のコアラを大きな机の上に置き、その言葉を思い出すようにずっと飾っておきたいと語った。同じ日に一行は衆議院の議長室で催された昼食会で民主党、自由党、左、右社会党の議員たちに紹介された。右派社会党の幹部は会議を中断し、その席でオーストラリアの人たちに話をしてもらうことにした。ノーマンは自分と同僚議員は対立する政党に属すると前置きして次のように語った。

「MRAでなければ、これほど政治的立場の違う私たちが一緒にやれるのは不可能だと思います。コーの世界大会で日本人が戦争中の行動を謝罪したことで、悪感情を抱いていたわれわれも間違っていたことに気がつきました。両国間の融和のために、政治的立場を超えた新しい目標を見いだすことができました」続いてダッシーは次のようにつけ加えた。

「政治面でも国民生活の面でもあらゆる層に新しい要素、新しい目標が必要です。道徳の絶対基準に従って間違いを正し、正しいことを実践することです」

鳩山総理への訪問の数日後アメリカで教育を受けた松本滝三外務次官から電話が入り、総理がノーマン、ダッシー両氏を通してオーストラリア国民に桜の木を贈りたい、とのことであった。彼の国会の執務室でテレビや報道陣の前で簡単な贈呈式をするのが最も効果的だと私たちの意見が一致した。松本次官はこの機会を利用して、対立する国々の壁を取り除くMRAの働きをたたえた。ダッシーとノーマンは総理からの贈り物に深く感謝するとともに、日本が道徳に根ざした考え方を受け入れていることに感銘を受けたと述べた。テレビがマスメディアとして登場し始めた時期にこのシーンが放映された。

私たちは一行のためにMRAハウスでレセプションを開催し、政界、財界、労働界のグループと共に数か国の駐日大使館の代表を招いた。大使の一人が私に向かってこう尋ねた。

「あなたはしばらく日本に滞在し、日本人とも親しく付き合ってこられたようですが、どうですか、日本人が罪を意識するということは可能なのですか?」

私はこれにはがくぜんとしたが、それは可能であり、そうしたことが実際に起こるのを幾度となくこの目で見ましたと答えた。彼は日本人を人間以下に見ているようで、これでは外交がうまく行かない訳だと思った。

ノーマンとダッシーの来日は劇『ボス』の披露公演と時を同じくした。私たちは一つの公演の中で舞台上から二人にスピーチをしてもらったが、とても効果的であった。ノーマンは、オーストラリアの退役軍人と女性の有志が日本のMRA活動用にと車購入のお金を寄付してくれたことを紹介し、三井高維にその小切手を手渡して次のように語った。

「この百二十五万円はすべて数年前まで日本と戦っていた人々の心からの贈りものです。MRAを通して、これらの人々は抱いていた悪感情に対する答えを見いだしたのです」

帰国を前にした復活祭の日曜日、二人はMRAの人々と懇談し、奇跡のようなものが漂っていると話した。ノーマンは次のように語った。「ここ二週間の間に、私は皆さんの数年にわたる信仰と犠牲の成果を見ることができました。あなた方の中にチーム精神が生まれ、それが国全体に広がっていることを感じます」

ギル・ダッシーは次のようにつけ加えた。

「キリストは普遍的であるにもかかわらず、それにそぐわない生き方がされたことがしばしばありました。フランク・ブックマンはキリスト教の真理を示す新しい基盤を見いだしたわけで、それをはっきりここ日本で見ることができました。こうした考え方をもった日本の指導者の一行をぜひオーストラリアに迎えたいと思います」

一九五六年（昭和三十一年）夏コーの世界大会に出発した一行は今までとは異なる構成となっていた。機上には著名な政治家の朴賢淑夫人、大学学長の朴博士、プロテスタントの邊牧師の三人の韓国人が加わっていた。三人ともMRAの関係者と自認してはいたものの、日本人に同行するということは極めてきつい経験であった。三人とも日本の占領下で苦労をしたが、とりわけ朴夫人は、レジスタンスに加わった夫が捕らわれ、拷問を受けた結果一生病身であった。ブックマン博士からの電報で、一行はまず、ロンドンに飛びプリンス劇場で上演されている『消えゆく島』を見ることになった。ほぼ毎晩のように一行はほかの国々の人々と共に幕間に舞台に立った。十数人の人々が話し、世界の国々の間の融和をもたらす勢力が動いていることを聴衆に示した。

日本人はロンドン東部ウェストハムの公民館での会議でスピーチするように招かれた。会場は好意的な聴衆で一杯だった。会議のあと、日本軍によって夫や息子を失った人々も壇上に上がり日本人と握手を交わした。翌日開かれた代表団のミーティングで朴夫人は立ち上がり、韓国を立って以来日本人に対する憎しみのあまりずっと苦しい思いをしてきたことを涙ながらに語った。そして、この間日本人の誠実さと謙虚さに心を打たれたが、前日の会議での日本人の発言を聞いて、やっとこの気持ちに打ち勝つことができたのだった。彼女は、自分に許しの気持ちが必要であり、

二度と同じような苦しみが世界に起こらない生き方をしたいと語った。

一九五七年（昭和三十二年）の正月に箱根の湯河原で開かれた会議には政界、経済界、労働界で影響力をもつ、常連の顔ぶれが集まった。二日間のハイライトは、㈠社会党が、国会でただ反対する代わりに、韓国やフィリピンとの新たな関係を築くための戦略に関する戸叶武議員の前向きな提案。㈡家庭の夫婦間で新しい雰囲気が生まれたという率直な体験の紹介。㈢労働組合指導者の、とりわけ経営側に対する態度の、成熟した考え方などであった。この会合の特筆すべき点は、参加者が皆国内の問題をアジアの隣国に対する日本の責任という観点から捉えているということであった。家庭や産業や国会におけるチームワークは自分たちのためばかりではなく、韓国、フィリピン、台湾などの隣国の信頼と友情を勝ち取るという意味からも極めて重要であった。韓国に関しては直ちに良い機会が与えられた。

第十三章　国民外交

フィリピン・バギオ会議への招待

一九五七年（昭和三十二年）一月の後半、韓国国会議員四人がアメリカからの帰途日本に立ち寄ることになっていたが、東京での短い滞在の間にＭＲＡハウスを訪問したいとのメッセージが届いた。このハウスでの私的な機会以外には日本人と交わらないとのことである。羽田空港で真夜中過ぎに彼らを出迎え、翌日の夕食に招いた。相客として星島、加藤シヅエ、戸叶夫妻、住友、相馬恵胤夫妻、それに神戸製鋼田子社長が招かれた。全員日本語が上手であったが誰も日本語を話したがらないので、相馬雪香が彼らの慣れない英語を通訳した。食事の終わりに、いつものように私たちの子供たち、ビー（九歳）とフレッド（七歳）がゲストに挨拶に現れ歌を歌いたいと申し出た。驚いたことに二人は習ったばかりの日本の歌を歌いだした。韓国人に対するその効果は正に電撃的で、四人は日本語を話しだし、冷たい警戒的空気が一転して記念すべき夜となった。

同席した日本人は心のこもったもてなしをし、その謙虚さと、新しい前向きな日韓関係を築こ

うという熱意とが韓国人の心を開いた。韓国側も、日本側から始めるこうした動きを両方から進めなければならないという強い確信で応えた。一行は朴賢淑女史などMRAの関係者との協力を始めた。そして翌週、国際的な友好関係樹立のためのMRAの役割について韓国国会で演説した。

冬の間にフィリピンの友人たちと連絡を取ったところ、アジア会議をフィリピンで開きたいとの関心が高まっていた。マニラから北の山の中にある避暑地のバギオが候補地に選ばれ、日本からも参加者を迎えたいと言ってきた。三月の初めにはフィリピンの有力者から正式な招待状が届き、期間は三月二十九日から四月八日であった。

この招待状を契機に、住友は友人たちを招いて昼食会を開いた。一万田、加藤夫妻、戸叶夫妻、久保参議院議員、星島衆議院議員、十河国鉄総裁、柳沢委員長が招かれたが、皆大賛成で、多くが出席を希望し、アジアとの緊密な関係に向けて大きな一歩を踏み出す絶好の機会であるという気持ちであった。この昼食会の雰囲気を中嶋勝治は次のようにまとめた。「われわれ日本人はこれまで多くの会議でいつも与えられる側にいたが、今回は与える番である」

日本人がフィリピンに渡航するというのは容易なことではなかった。両国間にはまだ条約が存在せず、従って正規のビザは発行されなかった。マグサイサイ大統領の支援と、外国代表歓迎のために大統領自らが参加するとの約束とをもって、東京のフィリピン連絡事務所は日本人に特別の入国許可を与えることができた。ところが突然衝撃的なニュースが伝わった――フィリピン国民の崇拝の的であったマグサイサイ大統領が飛行機事故で死亡したのである。国全体が喪に服し、すべてがストップしてしまった。やがてロス・リム上院議員から、フィリピン側はバギオ会議を

予定通り行うという電報が入った。後任の大統領になったカルロス・ガルシアが会議に参加するとの約束を取り付けたのであった。

マニラに渡航する十二名の日本人にパスポートを発行するには日本政府首脳の意思決定を必要とした。ところが政権の交代が起きていた。鳩山は、共産中国およびソ連に対するリベラルな姿勢を恐れた財界の有力者の批判の的となってしまった上に、健康上の問題から強い指導性を発揮できないという点も疑問視されていた。前年の秋からは最大の経済団体が辞任を要求していた。鳩山はソ連との外交関係を回復する交渉の成立に成功したものの、それ以上この圧力に抗することができず、健康も悪化して辞任した。当然後継者と目されていた緒方竹虎も最近死亡しており、指導者争いでは石橋湛山が勝って首相に選出されたが二か月後には病気で引退することになった。二月には財界および金融界の支援で岸信介が首相に就任した。彼は出演者の一人で親しい女優兼歌手の田中路子の招きで劇『消えゆく島』を見に来ていた。また信頼する星島と神戸製鋼の田子副社長からＭＲＡについて聞いていた。二人は日本の代表がバギオ大会に参加することの重要性を岸に説き、岸は星島が一行に加わることを快く賛成した。国会議員の朝食会ではバギオの大会が話題となり、戸叶夫妻、加藤夫妻らが役所の手続きのスピードアップに取り組みすべての手続きを出発前に終えることができた。

台湾の新大使沈覲鼎、韓国政府代表金容植の両氏の尽力も大きかった。この両国からのバギオへの参加は最も重要であった。日本人が参加する国際会議に韓国人が正式に参加するということは前例がなく極めて微妙な問題であることは金が最もよく承知していた。彼は、ソウルからこの

会議に参加しようとしている人々を支援するよう本国政府に要請した。

数々の障害を乗り越え、会議の開会を前に日本、韓国、台湾の強力なグループがマニラに集まった。他のアジアのほとんどの国々からも代表が参加した。韓国代表団の中には、コーに参加したこともある女性唯一の閣僚経験者朴賢淑女史、国会外務委員長の尹城淳、それに鄭濬国会議員が加わっていた。何応欽元首相が台湾の代表団長であったほか、インドネシアは国営ラジオの役員、マレーシアは国会議長がそれぞれ代表を務めていた。アジア諸国のほとんどの代表が国家元首からメッセージを託されており、会議は準公式レベルの位置づけであった。

バギオは国際会議のメッカであった。東南アジア条約機構（SEATO）のセンターもここにあった。マニラの暑さに比べ山の空気は快適であった。（四月はこの国で最も暑い季節である）パインズ・ホテルの庭は熱帯の花で鮮やかだった。周囲はのどかであったが会議は激しかった。会議への参加は招待者に限られていたものの、何か普通とは趣きが違うといううわさが広まり、かなりのフィリピン人がいつのまにか会議に入り込んでいた。十二年間にわたる沈黙のあと、日本軍の手による恐怖と拷問を味わった人々にとってその憎しみと心の傷から解放される機会が訪れたのであった。

激しい攻撃の火にさらされることを覚悟して、日本側はできるだけ成熟した代表団を構成していた。一行の二十人の中には加藤シヅエ、星島二郎、住友吉左衛門、片岡義信、柳沢錬造の他に幾組かの夫婦が加わっていた。この中には占領に加わった人やフィリピンで戦った人はいなかったが、最初の数日間はフィリピンばかりか韓国、ビルマなどかつて抑圧を受けた人々の苦い思い出が浴びせられるのを静かに聴き入り、受け入れていた。それは精神的苦痛を伴う体験で、あら

ゆる勇気のいることだった。日本人のほとんどは涙を流している時が多く、「申し訳ありません。たとえ忘れることはできなくとも、何とかお許しください。皆さまがおっしゃることを受け入れ、皆さまの尊敬と友情を受けるに足る国になるように、私たちが生き、働くことを決心しました」と言うことしかできなかった。ジーンと私は日本人に同情するとともにその立派な態度に敬服した。韓国人やフィリピン人の中にも私たちと同様に感ずる人が出てきて、アジアと世界とを子供たちにとって安全なものにするためには、自分たちや自分たちの国も変わらなければならない必要を感じ始めた。日本人の参加は新聞にも報道されてガルシア大統領をちゅうちょさせたが、リム議員やほかの人々に促され、大臣、議員、報道陣など多数を引き連れて到着した。国際コーラスグループがタガログ語の国歌で大統領夫妻を迎えた。会議では西側や東側諸国の代表が人種、階級、国家の間に橋を架ける体験にガルシア大統領は聞き入った。司会をしていたリムに向かって大統領は「ロス、この人たちの言うことはもっともだな」と語った。三十分の予定で参加した会議だが彼は結局二時間とどまった。

韓国代表との和解

会議の最も劇的な成果は韓国人と日本人との間で起こった。両国の最高指導者の速やかな承認のもとに参加した有力者が加わっているために、両国グループは個人同士の和解から相互信頼の誕生、さらには日韓条約に立ちはだかる主な障害について真剣に討議できることになった。恐れと憎しみの遺産に加え、両国間には久保田発言と日本の財産請求権というやっかいな問題が立ち

はだかっていた。前者は、日本占領下で韓国が受けた恩恵に韓国人は感謝すべきであるという見解が日本の高官の報告にあったというものである。これが公表され、反論がなかったため、韓国側はこれが日本政府の公式見解だと見なしたのである。財産請求権は日本占領の末期の所有物への支払いを企業や個人が要求したもので、その合計は数十億円にも及び、政府はこれらの補償請求の合法性を支持していた。

バギオにおける韓国人と日本人の和解の詳細は日本で第三位の発行部数を持つ読売新聞四月八日の朝刊で以下のように全国に報道された。

日韓問題解決へ糸口　ＭＲＡ大会で両国代表瀬踏み交渉

【バギオ山口特派員七日発】日韓両国の国交樹立のための非公式な話し合いが、ＭＲＡ大会に出席中の両国有力者間で行われており、これによって両国間の諸問題解決のための糸口が開かれようと非常な期待がよせられている。この大会には日本側から星島二郎（日韓協会理事長）加藤シヅエ（すでに帰国）両氏など二十人、また韓国側から尹城淳氏（民議院外務委員長）鄭濬氏（民議院議員）朴賢淑女史（元無任所長官）らの五人が出席しているが、とくに星島氏は同大会に韓国からこれらの政界指導者が出席するため、日本出発に当たり前もって岸首相と協議、これを機会に長年懸案となっている両国間の問題解決のため、瀬踏み的交渉を図ることに同意をえて来比したもので、同氏は加藤女史とともに同じく大会に出席中の国府の何応欽将軍を介して尹氏らと連日にわたり会談を行い、韓国側の国内事情を聴取するとともに、同政府の

意向打診に当たった結果、日本政府がまず久保田発言の取り消しと財産請求権放棄に関する声明を発表すれば、李承晩ライン、竹島、抑留者の交換などの諸懸案を個々に解決してゆくことができようとの見通しをえるにいたった。

ことに星島、加藤両氏がMRA大会の席上、日本側が朝鮮統治時代に行った圧政について謝罪したことが、韓国側によい反響をよんだようで、韓国与野党有志からは同代表らに対して、これによって日韓会議に明るい光がさしこもうとの希望ある電報がよせられたといわれる。

［尹委員長談］MRA大会には個人の資格で出席しているので、将来の日韓会談について政府の立場で発言することはできない。しかし韓国には朴夫人の夫君のようにかつて、日本官憲からきつい拷問を受けいまだに口がきけず十数年来病床にあるというにがにがしい経験をもった人が多く、対日感情は非常に悪く、日本に対する猜疑心は強い。星島、加藤の両氏を通じて日本の善意を知ることができたのは幸いだった。

この意義あるスタートが今後の展開を約束していたことは、一行がバギオを発つ前からはっきりとしていた。何応欽将軍は、大きく報道された閉会式の演説の中で次のように述べた。

「私たちが戦後十年間努力しても成就しなかったことが、ここでは十日間で達成された。民主主義のためにも、こうした動きをこれからも長年にわたって続けるべきである。韓国と日本との和解が、この会議の最も重要な出来事である」

星島と加藤シヅエが帰国した二日後に五人の韓国人がソウルへの帰途日本に立ち寄り、バギオ

で始まった動きを進めるための戦略と戦術について相談しようということになった。韓国側はMRAハウスでしか日本人と会わないということになっていたので、私たちの結婚記念日に当たる日に韓国人を昼食に招待し、これに加藤勘十、シヅエ夫妻と星島が加わった。手作りの韓国料理が準備され、キムチというこれまで口にした中で最も辛い漬物までそろっていた。話し合いは午後いっぱいに及んだ。家族的な和やかな雰囲気の中でキムチのように熱い諸問題について行われている話し合いを傍聴するのは素晴らしい経験であった。韓国側は尹氏、鄭氏、それに李承晩大統領と親しい朴夫人の三人が大統領と国会に対して日本側との話し合いのすべての報告をするとともに、交渉の道を開くように全力を挙げて韓国側を説得することとなった。星島と加藤シヅエの側もそれぞれの属する政党に働きかけるとともに、星島はできるだけ早く首相に報告することになった。両方の側とも難しい役目を担ったわけである。韓国側にとっては日本とのいかなるかかわりに対しても反発する全国民的な壁を打ち破る必要があったし、日本側も久保田発言と財産請求権に関する政府見解の変更を取り付けなければならなかったからである。発言を否定することは政府の公式宣言が間違っていたことになるし、請求権の撤回は、できるだけ多くの返済を取り付けようとしていた強力なロビーとぶつかることであった。

星島は、多くの日本人がしたように、日本が韓国を支配下においた期間に韓国の貴重な文化財を取得していた。中でも最も価値ある逸品は石の獅子像であった。彼はこれを本来の国に返す決心をした。しかもこの行為を公に発表したことによって、その真摯な態度を示しただけでなく、ほかの人もこれを見習うようになった（訳者注　この獅子像は複製であったことが二〇一〇年に

韓国政府によって確認された。複製であっても星島氏の行為の価値が下がることはない。詳細は口絵参照）。それから二週間、星島とシヅエが何回か相談した結果、参議院の外務委員であるシヅエが、委員会で岸首相に質問することになった。星島は、その質問に対する答えの中で、できれば政府が丁重に方針を撤回する方法を総理が表明し、かつ日韓両国でそれが報道されるよう準備を進めた。この時の模様は一九五七年（昭和三十二年）四月三十日の参議院外務委員会の議事録に以下のように残っている。

国会における加藤シヅエの質問

［**委員長**（笹森順造）］それでは、これより国際情勢等に関する調査を議題といたします。

［**加藤シヅエ**］総理大臣は、国会が終了いたしますと、まず東南アジア数か国、それから続いて米国を訪問なさるということを承っております。それで私は、東南アジアの国々をご訪問なさるにしても、まず日本としては一番近いお隣の韓国との問題をどうするかということにつきまして、長い間ご当局も非常なご苦心をなさって、会談をなさっておいでになったようでございますが、ただいまのところ、何か行き詰まっている、これを打開しなければならないというところに到達しているというふうに伺っておりますので、今こそ総理大臣として、この日韓の問題をどんなふうに打開したらいいかという、そのはっきりしたご所信を表明していただくのに一番いい機会だと思うのでございます。それにつきまして、去る三月二十九日から四月八日まで、フィリピンのバギオにおきましてＭＲＡが主催いたしましたアジアＭＲＡ会議に、二十七か国の人々が集

まりまして、ここでは、非常に精神的な面の国民外交というようなことを求められたのでございます。日本からも二十人が出席いたしまして、国会からは星島二郎代議士、そうして野党として私が出ておりました。

また韓国からは、五人の方が出ておられたようであります。アジアのほかの国々からも、それぞれ指導的立場の方が来られましたけれども、私どもとしては、特にこの会議を通じて、日本と韓国とが、和解がどのようにすればできるかということにつきまして、たくさんの時間をもっていろいろ努力いたしました。その結果といたしまして、初めて韓国の方々と私ども日本人とが気持ちを打ち開いて話し合いができるというような空気を作ったことが非常な成功であったと思うのでございます。ここでは、あくまでもお互いにほんとうに信頼のできるような、そういう関係を作ろうということに努力いたしました。そうして、かけ引きというようなことは一切放棄して、お互いに人間としてほんとうのことを言い合い、お互いの信頼感を作るということに努力いたしました。

韓国の方たちで出席されましたのは、自由党の国民議院外務委員長尹城淳さんとおっしゃる方です。この方は、国会の外務委員長ですから、この方のお気持ちがどういうふうに動くかということは、韓国の外交方針に大へんな大きな影響があると思います。それから、政友会という名前の党に属していらっしゃる鄭さんという国会議員もこられました。そのほかに、朴賢淑夫人と申しますか、この方は韓国の無任所長官、韓国解放後初めて婦人として閣僚になられた方で、やはり李承晩大統領などに大きな影響を与えるところの地位にいらっしゃる方です。この方たちと星

島代議士と私どもがいろいろの機会にお話し合いをいたしましたときに、私どもが知りましたことは、やはり私ども日本人として三十数年にわたって韓国を、まあ日本の立場から言えば、合併をしていたという言葉で申し上げますけれども、それは合併というような対等な立場のものではなくて、何といっても日本が韓国を支配していたというようなことからくる長年の感情のいろいろうっせきしたものがあるのであって、そういうものに対して、私たちが日本人として本当によく知らなかったのじゃないかと思います。

たとえば朴夫人という方は非常に教養の高い立派なご婦人でございますが、この方の御主人も、韓国の独立運動のために長年日本の官憲には抵抗を続けてこられた方です。この方が日本の官憲のためにどういうひどい扱いをお受けになったか。長い十八年以上も監獄の生活を続けられまして、今はもうお宅に帰っておられますけれども、体は全部不具者のようになってしまったというような、そういう方でございますから、そういう方たちは一朝一夕に日本人と融和な感じを持つことができないというようなことも、本当に理解できると思います、それで、私どもはそういう向こうの方の立場というものを十分尊重して、気持ちを分かって、そうしてお互いにほんとうに対等な立場に立って、この日韓の融和をはかろうというところから解きほぐして参りませんことには、いろいろの法律上の解釈とか何々の権利をどうするかというようなことにいきなり飛び込みましても、お互いの信頼感というもののないところに外交というものはあり得ないということをつくづく感じたわけでございます。

星島代議士も私も、日本が韓国にたいしてやってきたところのたくさんの過ちに対しては、率

直に謝罪をいたしております。このことで非常に向こうの方のお気持ちもよくなられまして、私どもがそういうことを率直に申しましてから、韓国の方がまるで見違えるような表情を持って私たちに話をしてくださるようになったのです。今までは、韓国の方は私どもに対して決して日本語を使われないのです。日本の大学を卒業して日本語で十分に話をなさっても、私たちに対しては英語で話をされるということにまず問題があったわけです。今度は本当に対等な、感情の融和ができるようになりましてからは、率直に日本語で話をしてくださるということにもなったのでございます。

今、日韓の会談で、いわゆる久保田発言、それから韓国における日本人の財産の請求権、この二つが一番デッド・ロックになっているように伺いました。このことにつきまして、私どもは、国会においてあらゆる努力をいたしますということを誓って参ったのでございます。

それで、私どもがそういうことを誓ったということを、この外務委員長の尹さんと申しますか、この方が去る四月の十六日に向こうの国会で報告されました。このバギオの会議で、日本の与野党の国会議員が日韓会談の行き詰まりの打開に対して、誠心誠意努力することを誓ったということを報告していらっしゃいますのが新聞に出ております。四月二十四日ソウル発のUP電報によりますと、李承晩大統領が、UP通信に日韓問題に関する声明書を寄せられまして、日韓両国はできるだけ早い機会に国交を正常化しなければならないということを述べられた。従いまして、岸総理大臣におかれましても、この外務委員会を通じて、この李承晩大統領にも、ほんとうに日本の誠意のあるということを、韓国の一般の方々にもわかるような、誠意あるご発言をきっとし

てくださると私は信じて、今日ご質問申し上げるわけでございます。とにかく久保田発言なるものは、日本人が韓国人に対して非常に優越感を持っているというような印象を与えたものだろうと思います、これは単なる個人の発言と見るよりも、多くの日本人がそういうような優越感を持って韓国に対していると考えられますので、この久保田発言を通じての日本の韓国に対する優越感というものに対して、これは撤回すべきものではないかと私は考えますので、その点をまず最初にご答弁をお願い申し上げます。

［**国務大臣**（岸信介）］日韓の国交正常化の問題につきまして、今加藤委員のお話しになりましたこと、私一々同感でございます。私、外務大臣になりましてから、韓国の代表の金公使にもしばしば会見をいたしました。その際に、私は両国の歴史的な関係からいい、また経済的にお互いの国を繁栄させる上からいって、この両国がこういう状態にあることは、私は非常に悲しむべきことだ。私は日本に関する限り、従来の主張にとらわれずに、将来長く両国がほんとうの友好関係を結び、そうして国交が正常化された後においても長く友好関係が続くようなその基礎を作る意味において、一つ本当に現実に即して、しかも公正な立場から、とらわれずに、謙虚な気持ちで一つ話をして、この問題を解決したいと思うという私の気持ちを述べたのであります。従来条約の解釈であるとか、いろいろな法律解釈でなくして、今、加藤委員のお話のように、精神的な基礎ができないというと、お互いにお互いが信頼をし合い、お互いの誠意を、少なくとも疑わないという気持ちにならない。それには、先ずわれわれの方からそういう態度を示さなければならないという考えでおります。今、具体的な御質問のありました久保田発言につきましても、久保

田発言なるものは、実はもちろん政府を代表しての正式の発言ではなかったのであります。私はこの久保田発言が政府の意思を代表していっているものでもないし、これをその意味において取り消すという、撤回するということについては、政府としてもやぶさかではないということを、はっきり申しております。

従って、私は率直にこれは撤回するということを、この国会を通じて明らかにいたしておきます。

［加藤シヅエ］ ただいまの総理大臣のご発言はまことに結構だと思いまして、私も非常に共鳴いたします。もう一つの問題は、日本側の財産の請求権の主張でございます。

戦時国際法の問題その他でいろいろ法律の解釈もおありになるだろうと思いますけれども、サンフランシスコ条約の締結によって、いま四つの島およびそれに付属したところの小さい島々ということになったことを、日本は了承しておりますので、やはりこの財産権主張の問題も、この際は日本側の積極的な意思を総理大臣がご発表くださることが非常に望ましいと思うのでございます。個々の方々にしてみれば、あちらに何十年もおられてたくさんの財産を持たれ、非常にお困りになるという感情もあるだろうと思いますけれども、これは国内の問題として政府が善処して頂くべき問題で、韓国に何か日本人がいつまでも何か請求するというようなその態度、あるいはその気持ちというものが、やはり大きな暗礁になっておりますので、この機会に総理大臣のはっきりしたご所見を伺いたいと思います。

［国務大臣（岸信介）**］** 財産権問題は、過去の会談においては、日韓両国の法律解釈が正面で食い違っておったのであります。それが日韓会談を行き詰まらせた一つの理由にもなっております。

私はこの問題を処理するのに当たって、従来われわれがとっておった法律解釈に拘泥しない。問題を現実的な基礎において、両国のほんとうの友好関係を将来に作り上げるという見地から、この問題を一つ取り扱おうということを、考えております。現実に即して、公正な見地から両国の長き友好関係を作り上げることが必要であるという見地を取ってこの問題を処理しよう、こう考えております。

［加藤シヅエ］まず最初に、今、総理大臣が表明されましたような、ほんとうに積極的に日本が打開するために、謙虚な気持ちであくまでも誠意をもって当たっていこうという、そのお態度があちらに通じますならば、むずかしいあとに残っております数々の問題も、必ず打開できると信じております。政府に、さらに韓国の方々の信頼を得るような態度および方法をもって、交渉をぜひ妥結してくださるようにお願いをいたしまして、私の質問を終わります。

総理のこうした姿勢は韓国で大きく報道され、国会においても公式に評価を受けた。長い間暗礁に乗り上げていた講和条約交渉に向けての扉が再び開かれた。懸案が解消され条約調印と外交的承認がなされ、賠償および通商協定が結ばれるには、これから数年を要した。これらすべての課程を通してＭＲＡの人々が主導的役割を果たした。

（訳者注）

一九六二年（昭和三十七年）十月二十二日、ＭＲＡアジアセンターが神奈川県小田原市に建設

された。アジアにおけるＭＲＡ運動の拠点として建設されたこのセンターは、工藤昭四郎都民銀行頭取を理事長とし、十河信二国鉄総裁、山際正道日銀総裁、渋沢敬三元大蔵大臣、千葉三郎衆議院議員などが理事を務める建設後援会が中心となって建設された。

開会式には池田勇人首相や岸信介前首相、吉田茂元首相、片山哲元首相などの政財界の指導者をはじめ、海外からも多くの要人が出席した。韓国からは金鍾泌中央情報部長が来日した。当時韓国では朴正熙将軍の革命政権が誕生した直後で、両国政府間の交流は中断に近い状況だった。そうした時期に朴大統領の側近の金鍾泌氏が、ＭＲＡアジアセンターの開所式への出席を理由に来日を認められたのは極めて異例のことであった。金部長は小田原での行事の後に数日間東京に滞在し、大平正芳外務大臣などと内々に会談した。その結果が、「大平・金メモ」として結実し、三年後の日韓国交正常化への布石となった。

第十四章　明日への道

若者との出会い

一九五〇年代も中頃になり、産業の拡大に伴って雇用の増えた都市に若者が移動し日本の農業人口は減少をみた。それでも全労働人口全体の三分の一以上を占めていたが、その割には静かな存在であった。農村家庭は第二次大戦までは兵士供給の中心を担っていたが、戦後は保守的で、島国的で、変化に抵抗する存在であった。しかし田舎の青年男女も変革期を迎えていた。経済環境は悪く、長い労働時間、現金収入は少なく、生活水準は低かった。都市の住民が比較的豊かになったのを見て、地方の青年はだんだん反抗的になってきた。町に出る人たちが増す一方、地元に残る青年たちは社会的活動を組織化するようになった。

こうした組織の中で圧倒的な力と規模を擁していたのが日本青年団協議会（青年団）である。主に二十代から三十代前半の青年四百万人以上のメンバーを持ち、北海道から九州に至る町や村の指導者多数を擁していた。青年団は正式には、地方の文化活動の推進を目的とした非政治的団

体としてアメリカの占領下で復活していたが、実際には右翼、左翼、隠健派の対立の場となっていた。

一万田大蔵大臣は日本青年団の名誉会長を数年間務めたことがあり、私たちに、青年団の指導者と会うように勧めた。共産党が指導部を乗っ取ろうとしていることを心配してのことであった。私たちは彼の勧めを受け入れたが、これが青年団の方向づけに大きな変化をもたらすばかりか、団員たちが大きな企業での労使協調精神の高揚に大きな役割を果たすことになろうとは夢にも思わなかった。そればかりかのちには国家の危機に際しても、青年団関係者がこの協力組織をリードして解決に一役を買うことになったのである。

一九五六年（昭和三十一年）の春には、青年団の理事会のグループがコーへの日本代表に加わった。それ以来、その何人かが定期的にMRAハウスを訪れ、組織を健全化するために自分たちに何ができるかを話し合うようになった。その一人が寒河江善秋で、古参で最も影響力のあるメンバーであった。諸事に精通した彼は戦後の状況に幅広い展望を持っていた。同世代が抱える問題のより良き解決案をいつも見いだすことを考えていたのが彼であった。しかし彼は本来、芸術家肌であり、陶芸のロクロを回している時が最も楽しいときであった。

私たちと知りあった直後に、彼は北京の招きで農村青年を率いて中国を訪問した。中国のさまざまな姿は彼にとって目を開かせるものであった。売春や都市の暴力団などの社会悪を中国革命は追放することできたと語った。国民生活の改善にかける中国の若者の情熱と決意に感銘を受けたが、彼自身は統制など到底受け入れられない荒削りの個人主義者であった。この訪問で最も印

象に残ったのは一行が周恩来と食事を共にしたときのことである。この国で二番目に力を持つこの人が、時間を十分とって懇談したり質問に応じてくれたのである。寒河江は周恩来の脇に座ったが、彼が「寒河江さん、あなたが作る焼き物について聞かせてください」と語りかけ、さらに生活や仕事などについてこと細かく質問するのにはあっけにとられた。彼は、この政治家が彼について詳細に報告を受けていることと、これだけ忙しい人が若い日本人のためにわざわざ時間と手間をかけていることに驚かされた。

ＭＲＡハウスを定期的に訪れたもう一人は若宮きぬ日本青年団副会長で女性メンバーで最も強い指導力を持っていた。彼女と寒河江を通して二宮尊徳前会長も私たちの友達となった。バギオ会議を終えてマニラから到着したアメリカのコーウェル三兄弟は、二宮の招きで、青年団の全国大会に参加した各県代表と理事に歌を披露することになった。コーウェル兄弟の日本語に訳されたウェスタン調の歌と日本人用に作られた新曲とが聴衆の心を捉えた。彼らはイエンツ・ウイルヘルムセンや相馬豊胤たちと共にスピーチも行った。それ以来ほとんど毎日のように青年団のメンバーがＭＲＡハウスに出入りするようになった。

一九五七年（昭和三十二年）の初春、二宮が訪ねてきて、その夏にモスクワで開催される国際青年祭に青年団五百人を招きたいとの招待状が届いたと語った。青年団理事の共産系グループはこの招待をテコに多くの幹部へ吹き込もうとしていた。二宮はこれに対する対抗案がＭＲＡにないかを求めてきたのである。私たちは、彼らが、各県の指導者百人をマキノ島に招いてもらいたいとブックマンに要請する手紙を作成するお手伝いをした。これは信仰に基づいた賭けであった

が、フランク・ブックマンは直ちにこれに応えた。日本の青年たちが自前で旅行できる状況にはとてもなく、ブックマン自身に資金もなかったが、博士はこの青年団の価値と今後のイデオロギーの闘いが重大局面にあることをよく認識していた。彼は正式な招待状と百人の渡航費およびマキノ島での一か月の滞在費の保証書を送ってきた。それから数週間の間に貧富を問わずアメリカの友人多数が奔走して必要な資金を集めた。

この招待状は青年団の中枢に嵐を巻き起こした。これはソビエト側よりもはるかに魅力的な招きであり、理事会全体では熱い議論が繰り広げられた。共産グループのリーダー西山は激しい攻撃をしかけたが、結局は私たちの友人たちが勝って理事会では八十五対六十五でブックマンの招待を受け入れた。これが承認を得たのは五月中旬であり、マキノ島大会の開会式に一行が出席するにはたった二週間しか準備期間がないという、至難の業であった。

騒ぎが収まると、百四人の青年男女が招きを受け入れ、渡航の手続きを済ませた。一行はすべての都道府県を網羅し、ほとんどが青年団の県委員会の役員であった。モスクワの招きにいったんは応じたが気を変えた人も何人かいた。結局共産主義青年祭に参加したのはごくわずかであった。ほんどの参加者にとってこの訪米は想像をはるかに超えた冒険の旅であった。一人ひとりは立派な指導者ではあったが、それまでの活動範囲は主に自分の農場、村、町、県に限られていたからである。

青年団の他に五十人ほどの日本人がマキノ島に向かって出発した。星島、加藤シヅエ、戸叶夫妻、鈴木強参議院議員などである。ちょうど出張でアメリカを訪れていた国鉄の十河総裁も到着

した。青年団には英語を話す人が一人もいなかったので、私たちはチームの中から可能な限り手を尽くして通訳団を構成した。三井高維・英子夫妻、相馬豊胤・登喜子夫妻、相馬雪香に加えて、日本の近代産業の父として知られ四十年前にフランク・ブックマンのホスト役を務めた渋沢栄一の曾孫で最近ＭＲＡ専従の仲間入りをしていた渋沢雅英などである。食品会社の代表として勤務していたロンドンで彼はＭＲＡと出会い、ＭＲＡこそ世界で最も重要な仕事であると感じていた。父には反対されると思っていたところ、逆に父の渋沢敬三は大学教授や財界人などの友人を集め、その前で雅英の決意を語らせた。その夜敬三は、いかに祖父栄一が封建時代の家屋敷を出て明治維新の奔流に身を投じたかを思い起こした。歴史が作られるのを見た栄一は、自分も何か役割を果たしたいと感じたのであった。同じ血が今や息子に流れており、今日の歴史を作り変えているＭＲＡに彼が身を投じようとしているのを自分は支持したい、と渋沢敬三は語った。

日本青年団マキノ島大会へ参加

青年団を動かすことができたのはスティーブ、ポール、ラルフのコーウェル三兄弟に負うところが多かった。ＮＨＫラジオで歌ったり、新聞のインタビューを受けたりして有名になりつつあった。星島はアジア諸国およびアメリカを歴訪する岸首相の壮行会で三人に歌ってもらうように依頼し、閣僚や国会の長老議員も列席したがこれは大ヒットであった。

青年団の一行はマキノ島の大会の話題の中心となった。アメリカ人はこんなグループを見たことはかつてなく、青年団にとっても同じ思いであった。温かい歓迎と行き届いたもてなしを毎日

受けたものの、日本の青年の多くは極めて不安な思いであった。というのも慣れない人々や言葉や食べ物、そして全く違った生活様式に囲まれたからである。しかも、道徳の絶対基準に従って、世界の思想の闘いの中で自己を見つめる、という挑戦に会っていた。政治的には保守的な人が多かったが、中には「原水爆禁止」や「米軍基地の撤廃」といった反米主義を信奉する人もいた。道徳的な挑戦をそらすために理屈を展開する者や、自分の世界に逆戻りする者もいた。——わざと時計を東京時間のままにし（マキノ島の正午は東京の午前三時）、それに合わせて食事や睡眠を取ろうとするのである。同室になった若いヨーロッパ人やアメリカ人にとってもこれは手荒い体験で、身振り手振りで何とかコミュニケーションをはかろうと必死であった。

会議中はイヤホーンで同時通訳を聞き、食事中もテーブルごとに通訳がついた。盗み、浮気、賄賂、恨みといった問題を直視し、そうした過ちを正して、違った生き方をしようと決心をする者も出てきた。

星島と青年団の数名はワシントンに飛び、アイゼンハワー大統領の招きでブレアハウス迎賓館に滞在していた岸首相に面会した。そしてクレムリンが青年団を利用しようとした企てに対するフランク・ブックマンの配慮とマキノ島大会が日本の若者に与えた影響について報告した。岸は日程上マキノ島を訪問できないのは残念だが、ぜひブックマンと電話で話がしたいと申し出た。翌朝二人の電話による長い対話を、マキノ島の大ホールのスピーカーを通して青年団や千人ほどの参加者は聴くことができた。岸がブックマンに日本の青年たちにどう対応しているのかと尋ねると、「右でも左でもなく真っすぐに進むよう教えています」と答えた。対話の中で、青年団の

一行もこの模様を聞いているのを知った岸は彼らに向かって「皆さんはＭＲＡを十分理解するとともに、その精神を身をもって吸収して日本に持ち帰ってください」と語りかけた。

その数日後の夜、日本人は歌や踊りと寸劇を次々と演じて大会に大きな衝撃を与えた。この公演は自分たちに起こった内面の変化と成長が花開いたものであるとともに日本固有の文化の最もよいものを表現したものであった。優雅さと美しさ、そして素直なユーモアが混ざり合っていた。フランク・ブックマンはこれを大変喜び、真夜中まで付き合った後、青年団はこれから訪問する先々でこれを演ずるべきだと提案した。出発までわずか二日しかなく、普通であれば狂気の沙汰と思われるところだ。しかし、昼夜を分かたぬ作業で舞台クルーが編成され、移動可能な舞台装置が作られ、劇場が予約され、招待状がデトロイト、ワシントン、ニューヨークの友人たちへと送られた。

日本人にインド人、フィリピン人が若干、それに随行者を加えた約二百人の一行は夜行列車でデトロイトに向かった。そこでは商工会議所での夕食後に公演の一部を披露した。ワシントンでは青年団のリーダーが農務省や労働省の次官と懇談したほか、夜はショーハム・ホテルで各界の人々の前で公演した。翌日は国会議事堂でワイリー上院議員主催の昼食会が開かれたあとレイバーン議長を訪問した。その夜は日本大使館での夕食会とレセプションで終わった。

ニューヨークでの公演を終えた一行は、ナイアガラの滝とカナダを経由してマキノ島に戻った。そこで青年団の幹部の一人で小さな町の農家出身の経営者山本義則が青年団の寸劇をまとめて劇にした。それは農家と村の生活を描いた素朴な劇だったが、一行の多くに共通する体験に基づい

ているためきわめてリアルで感動的なものであった。これは「日の本」家を舞台に、封建的な生き方や思考をもつ両親と戦後に育った子供たちとの対立を描いている。この一家の不和は、ロシアの抑留生活から帰還した関辰二の演ずる「日の本」が、農地の水不足のために助けを求めに来た農民の訴えに耳を貸さないことから起こる村の対立へと発展する。この対立が広がるさなか、息子の一人が劇的に正直に変わることから、予期せぬ結果が村全体に起きるのである。

その頃までに青年団の一行と親しくなっていた住友吉左衛門に、「日の本」家から水を盗む貧しい農民の役を演じてもらってはと、青年の一人が思いついた。この誘いを聞いた彼は大きなショックを受けた。舞台に上がるなどとは夢にも思わなかったことで、彼は丁重に断ったが、出演者たちが強く勧めたために結局承諾した。初めはぎこちない様子だったが、徐々に自分とは社会的にまるで正反対の男の役を演じることを楽しむようになった。『明日への道』というこの劇は洗練された出来栄えではないが、出演者が地で演じる強みで迫力のあるものであった。一行はマキノ島で幾度も公演し好評を博したのち、帰国の途上再びロサンゼルスで公演した。

帰国した一行にとってこの劇がその後の活動の焦点となった。劇が当時の国の状況を突いていただけでなく、この全国組織で何百人もの青年を動員し訓練する良い手段となったからである。しかしこれを軌道に乗せるまでにはいくつかの難関があった。演出や制作の専門家の助けが必要だったが、またしても菅原卓がその大任を買って出た。仕事や職場を離れて出演するキャストをそろえることはさらに困難なことであった。長く外国に出かけたあとにまた数週間家を空けるというものは大変厳しいことであった。そこで先ずは故郷に戻り家族、友人、隣人などとの関係を

正すということから始めた。その上で劇と行動を共にすることへの支援を得られるかもしれない。二日間の東京での会議ののち一行は、十一月初めに再会する予定で、各自の家庭へと向かった。

『明日への道』西日本巡業

そこから戻った彼らは故郷で出合った素晴らしい体験を語ってくれた。まずかった人間関係も癒され、彼らの改善した生活態度に周囲も応え、ほとんどのメンバーが劇と共に行動することへの支援を得ることができた。中には誤解や反対の波をくぐり抜けなければならない人もいたが、来たるべき試練に向かって各自が強固な意志を固めることができた。

初演は、かつて『ボス』が上演された第一生命ビルで行われたが、全国大会を終えた青年団幹部のための試演も行われた。この大会ではマキノ島への百人の団員の参加と『明日への道』が討議の中心であった。MRAに対する共産党の反対は大きく激しいものであった。若宮きぬと二宮前会長はマキノ島で正式に青年団を代表しているかの印象を与えたという理由で攻撃を受けた。これは、共産グループがこれまで二年間にわたって組織を獲得するために固めた大きな基盤を失っていることに対する焦りを隠すためのものであった。しかし二宮と若宮を糾弾する決議は否決された。

初演では出演者が勇ましく演じ、各界から参加した聴衆は劇そのものと、幕のあとで行われた出演者の短いスピーチに感動した。大阪、神戸や多くの県、国鉄や日立造船などでの公演依頼が殺到した。そこで翌月は劇を改良したり、小グループを各地に派遣して訪問の準備に充てたりす

ることにした。

新年恒例の会議は一九五八年（昭和三十三年）伊豆半島吉奈温泉の電電公社の保養所で開かれた。国会、労働組合、経営者の仲間に混ざって青年団の核になる人々が参加し、『明日への道』のスケジュールが話し合われた。茨城県が手始めで日立製作所が、その工場がある三つの市で六回の公演を企画した。帝国ホテルの劇場もＶＩＰ用に予約された。住友夫妻は特に住友系列会社のために二月の初めに劇を大阪に招いた。神戸市に続いて広島、日立造船、呉市、それに住友銅山のある四国からも招かれた。東洋レーヨンも大津市にある主要工場での公演を計画した。これらはすべて日本の代表的な企業で、ＭＲＡが普及していた会社や深刻な労使問題を抱えている会社もあった。

劇の巡業が始まると、各劇場は埋まり観客は魅了された。出演者やそれに同行した片岡夫妻、鶴田夫妻らは劇が終わったあとは観客に囲まれ彼らの家族や問題についての聞き役となった。多くの人々や家庭が変わり、初めて何か生きがいを見つけることができた、といった礼状が労働者から出演者に寄せられた。私たちの訪問の数週間後にある工場の幹部が語ったところでは、それまでは若手労働者の自殺率が脅威的に高かったものが、それ以来一件もないとのことであった。

舞台裏では全く違ったドラマが進行していた。住友吉左衛門が劇に出演しているばかりでなく、貧しい不正直な農民を演じているとのニュースが二週間前に住友各社のトップに到達したのであった。長老たちは、これは住友帝国全体の名誉にとって重大な打撃になるとの危機感をもった。グループの「最高顧問」で住友銀行元社長の岡橋林と吉左衛門の番頭役で住友本社元常務理事の田

中良雄は特に動揺していた。グループ全体のスポークスマンとして田中が上京し、一同の動揺を伝えると共に吉左衛門がこれ以上出演を続けるのを思いとどまらせようとした。彼は吉左衛門・春子夫妻に会って二人の誇りと忠誠の気持ちに訴えようとした。吉左衛門は、人をリードするだけではなく、人に仕えることが自分の責任であるとの明確な信念で劇に参加している、と語った。さらに、これは実業界の人々が、必ず理解してくれる教訓であると思う、とつけ加えた。

住友の番頭たちはそれでも諦めず、岡橋と田中は劇の大阪公演の前夜に、住友各社の財政援助も打ち切るとまで迫った。吉左衛門はそれにも揺るがないばかりか、劇の終わりに、なぜ自分が出演したのかを舞台から話すと申し出た。彼は全造船の委員長となっていた柳沢錬造と共に舞台に立ってその通りにスピーチを行い、激しく反対していた人々の心を勝ちとることができた。田中は翌日の夜の、『明日への道』の紹介役をさせて頂けないかと買って出て、その中で、それまで吉左衛門に反対してきたことを丁重にわびた。

一行は神戸から星島の出身地の岡山県の玉野に向かった三井造船労使のために四回公演したあと瀬戸内海を渡って四国北岸の産業都市新居浜に向かった。新居浜は住友グループ発祥の地であり、住友金属鉱山が操業を始めたところである。この工場の野村技師長も青年団と共にマキノ島に参加していた。会場は労働者とその家族で満員であった。彼らは過酷な条件の中で貧しい生活をしていた。二回の公演のために一行は銅山の近くの村に登った。炭鉱夫と家族は床に座り、にわか仕立ての舞台が作られた。劇が終わっても一人としてそこを動こうとしないので、コーラス

グループとコーウェル兄弟は次から次へと歌い続け、その間に出演者のスピーチが行われた。

住友吉左衛門が舞台に上がり、スピーチをしたということは、この素朴な人々にとってはまるで天皇陛下が来訪したかのようなセンセーションであった。住友六社の経営者主催の昼食会、組合指導者との会合、そして新居浜市長の司会による一般集会と続いたが、その頃には、ここでの三日間の与えたインパクトは明らかであった。この市に到着したときには会社側と実力行使の脅しをかけていた組合側との対立が爆発しかねない雰囲気であったが、今では緊張が和らぎ、双方が問題解決の途を模索し始めていた。

瀬戸内海を引き返した一行は市長と知事がホスト役を務める広島を訪れた。市の公会堂における二回の公演のほか、原爆記念碑での被爆者に対する献花の式典や市長と知事主催による各界代表との昼食会などが企画された。献花式典では、出演者の一人で両親と姉を原爆で亡くしたという女性が次のようにスピーチした。

「この外国人のグループは私の憎しみに対する答えを与えてくれました。私の感情が共産主義によって憎しみや社会の破壊に使われるのではなく、新しい世界を築くために自分にも役割があることを教えてくれました」一行は広島から海上自衛隊基地のある呉市に向かい、そこでも公演したが、これまで最大の人数の観客が会場を埋め尽くしていた。

『明日への道』は西日本の旅を続けた。本州の西端の宇部では日立造船や小野田セメントの工場で公演した。その後再び四国に渡り、四国電力その他の工場を訪問したあと、最後は大津の東洋レーヨンの主力工場で公演した。この全行程を通して五万人以上が観劇し、行く先々で希望を

与えるとともに家庭や工場やコミュニティーに融和をもたらすことができた。

巡業の前半で浦和市で公演した際には国鉄の十河総裁が観劇していたが、終了後舞台に上がり、労働組合に対する独裁的態度を正直に認め、それを改めたいとスピーチした。国鉄労働組合の小柳勇委員長も観客席にいたが、二人は公演後に両者の間に横たわる問題について率直に話し合った。組合の強硬派は労働者の不平不満を扇動して春闘でのストライキやスローダウンを目指していた。その晩舞台の劇で見たような精神が労使の不信に橋を架けるために必要であることを二人は確認した。小柳は直ちに行動に移し、一行が帰京した三月の初めに国労本部に一行を招き、四十五万人の組合員の中心となる幹部全員を集めて公演が行われた。他の組合の幹部も招かれ、公演は最高の出来栄えだった。ストライキは回避され、十河総裁は後に、この春暴力と流血を防いだのは『明日への道』のおかげだと語った。

一行が巡業を続けている間に、重要な意味をもつ青年団の理事の選挙が行われた。過激派の激しい選挙運動にもかかわらず、隠健派が圧倒的勝利を収めた。MRAと関係のあった立候補者は全員当選、あるいは再選され、これ以後過激派は衰退した。

第十五章　謙虚な心のステーツマンシップ

総理の謝罪

一九五七年（昭和三十二年）秋、岸総理は東南アジア七か国およびオーストラリア、ニュージーランドを歴訪する方針を固めた。政府と財界との協議の結果、外交条約や通商条約の存在しないこれらの国々との交易が極めて限られているので貿易を拡大することが緊急の課題とされた。賠償問題が未解決のため、これら諸国のほとんどはいまだに日本との講和条約に調印していなかった。戦後十二年目を迎え、日本の工業生産は既に戦前の記録をしのいでいた。日本が生き残り経済成長を遂げるには海外市場の拡大が急を要していた。岸はこの訪問が通商活動の促進につながることを期待していた。

岸歴訪の計画が発表されると、日本の友人二人から鋭い反発が出た。『明日への道』の東京公演が始まる前日、東南アジアを回って日本に着いたオーストラリアの友人ゴードン・ワイズ、加藤シヅエ、相馬雪香と私は昼食を共にした。もともと加藤シヅエは劇の紹介の内容について話し

たがっていたのだが、席に着くと二人は岸の外遊のことで頭がいっぱいだった。

「人々の心を開かずに貿易の話を持ち出してアジアを回るなんて無理な話じゃないかしら。憎しみがいっぱいでとても商売の話に入る気持ちが起きるわけないでしょ」と雪香が切り出した。

「ではどうしたらいいと思いますか?」と私が尋ねると、「過去について謙虚に謝らないことには何もできないことがバギオではっきりとわかりました。もし岸さんが本当に東南アジアとの関係を正常化したいのであれば、まず、同じように始めた方がよいと思います」とシヅエが答えた。

日本に対する気持ちについてフィリピン人と話して来たばかりのワイズもこの考えに強く賛成した。私が「ただ、総理大臣の立場からして、すべて公の記録に残ることになるので、そこまで決断できるだろうか?」と慎重に尋ねると、

「韓国問題について話した際、総理は日本が償いをすべきだという点では誠実であり、官僚の反対を押し切って久保田発言の撤回を断行しました」とシヅエが答えた。

「しかし、あまりに型破りのことをしたら外務省や通産省の集中砲火を浴びるのは目に見えている」

「だからこそ私たちが応援しなければならないのです。何ができるかを雪香と相談していたところです」

帝国ホテル旧館のにぎやかなレストランのテーブルを囲み私たちは一緒に静かな時間を持ってこの国の外交政策の一大転換をはかる戦略が授かるようにと神の導きを求めた。しかも、二週間後に迫った岸の出発までにことを運ばなければならなかった。四人が別れるまでには、暗礁に乗

り上げた韓国問題に解決をもたらしたやり方に似た対策を女性たちが考え出していた。まず現在は衆議院議長を務め総理への大きな影響力を持つ星島の協力を加藤シヅエが求めることになった。単なる経済的計算よりも先にまず訪問国の国民の気持ちを優先することが肝要であることを岸に認識させるのが彼の役目であった。これと並行してシヅエと雪香は、今回の外遊の計画作りに参画し、岸がよくアドバイスを求めていた松本滝蔵外務政務次官と会った。彼は社交性に富み、柔軟な人柄で私たちの良き友人でもあったが、一国の総理がたとえ何であれ謝罪することに大ショック受ける役人たちとやり合うのが彼の役目であった。そしてシヅエ自身が参議院外務委員会で岸に対して質問する権利を行使するという段取りである。

すべてがうまくかみ合った。総理は星島に前向きに耳を傾けた。松本もこれを後押しする意見を述べるとともに、岸のイニシアチブを支援してくれるだろうと雪香が太鼓判を押した訪問国におけるMRAの要人リストを岸に手渡した。シヅエは、過去の償いをしたいという総理の気持ちを公にする扉を開くことができた。役人の反対にもかかわらず、岸は役人が準備したスピーチ原稿を書き直すことをあくまで主張した。

最初の訪問地フィリピンのマニラで、彼は戦争中のフィリピン人に対する日本の仕打ちを謝罪し、議会をあっといわせた。オーストラリア到着の前日には、新聞が、〝戦犯〟を招いたことに対する在郷軍人会の激しい政府批判を報道していた。帰国後岸は、オーストラリア議会において日本が戦争中に起こした損害に対する人としてまた総理としての謙虚な謝罪から演説を始めたときの劇的な模様について報道陣に語った。冷たい敵対感情が温かい信頼へと変わっていく雰囲気

の変化を自ら感じることができたと、彼は述べた。オーストラリアの報道姿勢も一晩のうちに疑いの目から好意的な論調に変わった。ニュージーランドや他のアジア諸国でも同じような反響があった。

閣議への報告の中で岸は、「東南アジア諸国一帯にMRAによって築かれた前向きで協力的な人々のネットワーク」に賛辞を送った。信頼回復を果たそうとする自分の努力をこうした人々が支援してくれた、と彼は語った。この岸の訪問の影響は世界中に報道された。例えば、十二月十八日付のワシントン・イブニングスター紙の論説は次のように述べている。

一国の指導者としては前代未聞の歴訪を終えた岸首相は東京に戻った。過去三週間にわたり彼は日本が占領したり侵略の脅威を与えた九か国を訪問した。そして彼はこれら各国において戦争中の日本の行動について公に謝罪した。

この時期は、岸の提案で数か月前に始まっていた日韓両国政府による交渉が重大な局面にあった。最終的な条約を締結させるための一般条項や条件を盛りこんだ予備宣言が調印される可能性が出てきた。この年の大晦日にこの宣言が調印され、立場が異なる懸案事項を一歩一歩解決する道が開かれた。この合意に至るまでには岸、星島、シヅエやバギオ会議での韓国国会議員代表をはじめとする双方の善意がその背後にあった。

韓国からは、指導者に引き合わせる欧米人をぜひ送って欲しいとの要請が以前から私たちに寄

せられていた。そこでローランド・ハーカーと他の二人を派遣し、三人は韓国人の家庭に滞在することにした。これとは入れかわりに、アウレオ・グティエレス博士がスタン・シェパードに伴われてマニラから到着した。彼もフィリピンの仲間と共に日比間の合意の足固めのために奔走していたが、前年の会議で芽生えた相互理解をさらに進めるために第二回バギオ会議を開催することを決定していた。グティエレスはこのアイデアについての私たちやソウルや台北の友人たちとの意見交換に来訪したのであった。星島は岸との会談を設けたが、彼はバギオ会議がアジア諸国の関係を緊密にするのに役立ったと岸に報告した。そして日本との関係改善のために春に第二回バギオ会議を開催したいというフィリピン側の意向を伝え、ぜひ日本からも強力な代表団を送って欲しいと要請した。岸は、先の会議が日韓の新しい雰囲気作りに大きな影響を与えたと述べ、第二回会議への支援を約束した。

与野党の国会議員と会談したあとグティエレスはソウルに向かい、シェパードと私が同行した。私たちはバギオ会議の参加者や東京のMRAハウスでもてなした人々による韓国特有の温かい歓迎を受けた。尹城淳国会議員がいくつかの会合を設営したが、その中で最も重要だったのは李起鵬国会議長で、彼は李承晩大統領の国会における代弁者であった。私たちは日韓の問題について率直に話し合った。彼は尹、朴夫人、鄭の三人からバギオでの体験について報告を受けていると語った。グティエレスは次のバギオ会議に対する韓国からの強力な参加を要請した。

再び日本に戻ったグティエレスは、行く先々で精力的に第二回バギオ会議の勧誘を行い、同じ目的で香港、そして台湾へと飛び発った。その数日後に今度は同じフィリピンから、カルロス・

ガルシア大統領補佐官のパライパイ空軍少佐が来日した。彼は日本軍の捕虜となり拷問を受けたこともあったが、マキノ島の大会で日本に対する憎しみを捨てて、今では両国間の関係改善に全力を尽くしていた。星島は岸総理に引き合わせ、彼は、第二回バギオ会議に日本から強力な代表を送って欲しいというグティエレスの要請を改めて伝えた。

こうした訪問の結果、会議の下準備も進み日程は一九五八年（昭和三十三年）三月十八日から二十五日に決定された。グティエレスが日本代表団の中に『明日への道』の出演者を加えて欲しいという大胆な提案をすると、青年団の仲間はこれを受け入れた。星島は与党長老の森下国会議員に同行するよう説得した。彼は岸に近く、岸は自分の正式な代理として彼を派遣し、次のようなメッセージを会議の参加者宛てに託した。

「この一年の間に、私は今回の会議に参加されている多くの国々を訪問するという光栄に恵まれました。分断された国民同士の間に融和を築くというＭＲＡの功績に私は感銘を受けました。私自身、過去の傷を癒す正直な謝罪の力を体験しました。健全で平和な人類社会を築くために謙虚な心のステーツマンシップが必要とされております」

第二回会議は第一回よりもはるかに規模が大きく、マニラで公職にある多くのフィリピン人が参加した。日本代表は五十人で、ほとんどのアジア諸国からも代表が参加した。ブックマンはアメリカで彼と行動を共にしていた三つの劇の出演者を含むアメリカとヨーロッパのグループを送り込んだ。会議は前年よりも穏やかに始まり、憎しみの表現よりもアジアの融和に向けての建設的な意見が多く出された。代表の中には自国で責任ある立場にいる人が多く、個人の変化だけで

なく視点の変化による国の新しい政策作りにも関心を抱いていた。

ガルシア大統領は歓迎のメッセージの中で、「私たちは、経済や防衛を強化するだけではなく、他国に対して対立するのではなく道徳的イデオロギーに立脚したアジアの国民同士の交わりを推進する必要があります」と述べた。彼はフェリックス・セラノ外相を大会に派遣した。彼は劇を鑑賞し、会議の発言を聞いたあと次のような情熱的なスピーチを行った。

「通常子は親に似るものだが、MRAは憎しみと恨みに対して献身と無私で応える。この精神で私たちは世界を変えることができます」

これを直接聞いた森下は圧倒されたようだが、帰国を前に次のようなスピーチをした。

「私はこれまでの五十年の生涯を通して、これほど深く、リアルで、人生に意味を与えてくれるものを見たことがありません。これまでは革命といえばマルクスとエンゲルスしかないと思っていました。国会に出たのも社会の悪を追放するために闘いたかったからですが、この会議の精神こそこれからのわが国に必要なことだと思います。ここでの模様をすべてもらさず総理にご報告します」

次代の平和を築くために

バギオに参加したフィリピン人の中には、『明日への道』をマニラで上演したいと強く感じた人がいたが、まだ反日感情が強かったときのことで勇気のいる決定であった。日本の代表は会議のあと滞在を延長し、他のアジアの代表と共に集会でスピーチをしたり劇を上演するようにとの

招きを受けた。あまりに突然のことで、唯一空いている劇場は、マニラ中央部の古い城壁都市で、かつてマニラ湾がアメリカ軍に奪還される直前に日本軍が建物に火を放って何千人も虐殺したイントラミュロスの中心の大きなホールだけであった。

開幕が近づき、満員のホールには緊張感が高まった。幕の開く前、舞台裏で出演者が祈っているときゲリー・パライパイ少佐が舞台裏から壇上に上がった。彼は日本軍に受けた拷問による憎しみと、それを克服した体験を語った。この劇や出演者の気持ちの中に宿る新しい日本となら、われわれフィリピン人は新しい世界を作るために一緒にやっていけると感じた、と彼は述べた。劇は大喝采を浴び、終演後何百人もの観客が壇上に上がって、子供たちのための平和を築くため、日本人を許し日本人と共に手を携えたいという気持ちを表した。

ちょうどこの時期に日本、フィリピン両国政府代表は、外交通商関係の復活の前提条件と賠償協定を結ぶために水面下の会談を続けていた。交渉に当たっていた湯川盛夫大使は日本人一行を日本代表部での夕食会に招いた際、行詰まっていた話し合いの雰囲気が、バギオ会議や劇に対する反応がマニラの新聞で大々的に報道されると一変し、交渉の打開に直接つながったと語った。

それから六か月以内に両国間の賠償協定、外交承認そして通商条約が成立した。その年の十二月に、ガルシア大統領は関係正常化を記念する公式訪問を行ったが、テレビで彼は次のように語った。

「イデオロギー的にも地理的にも親密な両国は、永続的な友情と平和を共に抱く強い絆を持っています。過去の恨みは思いやりと許しとによって水に流されたと申して過言でないと思われます」

バギオ会議の最中に、こうした国際間の架け橋作りを続けるために劇、スポークスマン、国際

コーラスを伴ったグループでアジアを歴訪するという案が出された。参加者はこれを積極的に支援し四月初めにマニラから出発し台湾を皮切りに、日本、ベトナム、ビルマを経て月末までにインドに到着するという計画にたちまち発展した。

こうした大きな事業を打ち上げるには日本では忙しい時期にぶつかった。総選挙の選挙運動が始まろうとしており、春闘もスタートしており、しかも、またしても、極左グループがMRA関係者や穏健派グループに挑む青年団の理事選挙の前夜であった。こうした状況にもかかわらず、日本側はこの来訪を歓迎した。星島は直ちに岸を訪ね、次のような歓迎のメッセージをもらった。

「皆さまの携える思想はわが国の歴史のこの重大な局面に最も必要なものと信じ、皆さま方と劇の来訪を心から招待したいと思います」私たちは帝国ホテルの劇場を三晩予約したほか、レセプション、夕食会、ミーティングなどを企画した。最も重要な催しは岸総理主催レセプションであったが、その二日前に兄（訳者注　佐藤市郎元海軍中将）が亡くなり、岸に代わり松本滝三外務政務次官がホスト役を務めた。このレセプションには多くの政府関係者や国会議員が参加した。松本は、日本が他国からの尊敬を回復するために果たしたMRAの役割に対して異例の賛辞を送った。彼はその歩みを年代順に以下のように述べた。

一、一九四〇年代後半、戦後初めて日本人の外国渡航が許されたのはアメリカでのMRA会議への参加であった。

二、一九五〇年（昭和二十五年）の歴史的な「西欧へのミッション（使節団）」はヨーロッパとの再接触をもたらし、また日本の国会議員がアメリカ議会で演説する機会が与えられた。

三、一九五一年（昭和二十六年）のサンフランシスコ講和会議への日本代表をアジア、アメリカ、ヨーロッパ諸国の代表と引き合わせる労を唯一とってくれたのはフランク・ブックマン博士とそのグループであった。

四、一九五五年（昭和三十年）の「ステーツマンのミッション（使節団）」に日本も加えてもらい、日本人として戦後初めてアジア諸国を訪れることができた。

五、堀内駐台湾大使の賢明な外交が、当時日本が唯一親密な外交関係を持っていた国民政府との深刻な亀裂を防いだ。

六、二回にわたるバギオ会議を通して旧敵国との幅広い接触を確立することができ、これが後の韓国およびフィリピン政府との交渉の外交的打開につながった。

まとめとして彼は一行に次のように語った。「日本政府特に外務省の名において、これまでのさまざまな難しい局面においてその都度MRA関係者の支援を受けたことを申し上げます」レセプションの最中に彼は私を脇に呼び、数日前に今度の国会議員選挙をMRAの原則に則って戦うことを決心したと語った。そして彼はそれまで使っていた演説を全部見直し、対立候補について攻撃していた箇所を削除した。

日本はアジアの灯台に

翌月MRAの二十周年とフランク・ブックマンの八十歳の誕生日を祝う集会がもたれ、この席でもMRAの日本における影響が評価された。梶井電電公社総裁は通信の驚くべき技術だけでは

世界をまとめることはできない。公社の中の人々に心の融和をもたらし、平和をもたらしたMRAのような理念を加えることが必要である、と述べた。

十河総裁は劇『明日への道』が国鉄内の調和にいかに大きな役割があったかを述べた。四国電力の宮川社長は、この劇が四国の工業地帯を円満にする働きを果たしたと述べた。最近圧倒的多数で再選されたばかりの全造船の柳沢委員長も、造船界の労使に新しい精神が生まれたと語った。加藤シヅエはここ数か月の出来事を振り返り、日本はアジアの灯台に、というフランク・ブックマンの挑戦が実現し始めていると語った。

これがジーンと私が出席した大きな催しの最後となった。そろそろ帰国の機が熟したと感じていた。日本の人々が自分たちで責任をもってやっていけるようになっていたので、私たちが長くいることはその妨げになるかもしれないと思った。

皆がこれまでの成果を祝っているのを聞きながら、私は心の中でこの国で過ごした十年ほどを振り返った。これらの変化は日本にとっての生命の復活の一部であったに違いない。私たちが到着したときこの国は戦争と敗戦の傷によって揺れ動き、外国の占領下で世界から孤立していた。一九五八年（昭和三十三年）となった今、廃虚から立ち直り、独立を果たし、孤立を克服したばかりか、日本は今や世界の第一級の産業国の仲間入りを始めていた。日本製品は量の面ばかりか質の面でも競争相手を脅かすようになっていたが、こうした物質的、経済的な変化以上のものが起こっていた。先行きへの不安、不自然な謙虚さ、不確かな存在感が、将来に対する前向きな姿勢と現在の進歩に対する自信に満ちたプライドへと変わっていた。

こうした復興期には激しい対立や落胆や混乱もあったが、日本人は過去から学ぶという非凡な能力を発揮し、看過できない障害を一丸となって克服することができた。しかも、内外からの圧力にもかかわらず、個人の自由とまとまって規律正しい社会とを両立させる民主主義を世界に示すとともに、伝統と革新という相反するものを見事に調和させ、エネルギーを発して世界の注目を集めるに至った。

こうしたすべてに私たちの友人たちは際だった役割を果たした。それがいかに偉大な役割であったかは歴史の評価をまつしかない。今は、こららの人々の友人と同志であったことに感謝するだけである。

残された東京での日々は慌ただしいもので、送別会を計画する暇もないほどであった。夏の参加者を多数募集するための集会が開かれたり、政党間のチームワークの向上が明らかになった国会議員による朝食会も毎週行われた。衆議院議長に再選された星島二郎に対して加藤勘十は、星島が「何が正しいか」を目指して闘うのであれば全面的に協力すると誓った。何応欽将軍はマキノ島大会に送る青年代表について相談するために台湾の青年グループの代表を連れて到着した。私の最後の仕事は『明日への道』の作者山本義則と共に石坂泰三を自宅に訪ねて劇の公演について説明し、石坂の助けを借りるということであった。

当時「財界総理」と呼ばれていた彼は懐古的な気分に浸っていた。彼は私たちが初めて来日した戦後の歳月は、日本の進路について国民の間に多くの混乱が生じた難しい時代であったと語った。石坂は、マッカーサーによってもたらされた秩序、改革、そして援助に感謝しつつも、進駐

軍が持ち込む変化のスピードについてゆけるのかが心配だったと語った。

「民主主義は素晴らしいことだが、アメリカが民主主義を持ち込もうとしたやり方は、金魚鉢に消火ポンプで水を入れるような勢いで入ってきたので、金魚はみんな目を白黒させてしまい、金魚鉢からはじき出されたものもいた」と彼は表現した。過去の最も優れたものの上に積み上げるように改革を呼びかけた私たちのやり方が、日本人にとって最も受け入れ易いものであったと感じていた。

「あなたたちは最もふさわしいときに、ふさわしい答えを持ってやって来られたのです」と彼は語った。後に私はこの「時宜を得たこと」について考えた。日本の民主主義がいかに脆弱なもので、かつ伝統的な文化の中心を喪失する危機にひんしていたかは、恐らくこの時期を生きた人にしか分からないことであろう。迫り来る階級闘争と労使対立の中で、伝統的な文化を抜きにしてはコンセンサスによる意思決定や集団に対する忠誠心といったものを失っていたに違いない。石坂など財界人は、正にこうした局面で健全な社会の維持に貢献した。彼らは民主主義が機能することに、とりわけ産業界で尽力した。東芝のような巨大企業で石坂のとった創意とイニシアチブは日本の経済成長を推進するうえで不可欠のものであった。しかしこの成長は、生産性よりも人を優先するという重要性を彼が学んだことから起こり、激しい労使対立から労使協調への転換を電機産業全体に及ぼすことができた。同様に、石川島重工でも柳沢の勇気と忍耐とが組合をして「誰が正しいかではなく何が正しいか」の原則で経営側に交渉を挑むことを可能にし、こうして築かれた信頼関係が他の造船所にも広がった。

時の経過が日本における階級間の融和と隣国との敵対関係の解消を果たしたであろうと唱える人々は、この騒然とした五十年代には、のんびりと打開を待つ時間の余裕などなかったことを認識していない。一九五二年（昭和二十七年）のメーデー事件の暴動、マルクス主義に情熱を傾けた労働組合指導者、政治的極右と極左との相いれぬ対立、韓国人やフィリピン人の日本に対する鬱積（うっせき）した憎悪などを目の当たりにした私には、平穏裏に進んだこの国の歴史の流れが当然の成り行きであったと受け入れることは決してできない。信仰と思いやりを持つ人々による支援なしに、自然にその進路を任せるには、当時の日本の民主主義の基盤は至ってもろく、日々の生活は苦しく、北京やモスクワの働きかけはあまりにも巧みであったからである。

あとがき——信念の少数派

私たちが去って二年後に、日本は重大な危機に見舞われたが、私たちの友人たちは国内が暴力や混乱に陥ることなく、国をまとめ、事態が正常に収まるよう鮮やかな働きをみせた。一九六〇年（昭和三十五年）の春、岸内閣はアメリカとの安保条約の改定をはかろうとしていた。一九五二年（昭和二十七年）に締結されて以来、この条約は自民党と社会党の最大の争点となってきた。経済界からほとんどの支援を受けた自民党はこの条約を外交政策と貿易の柱としていた。社会党はこれはアメリカへの身売りであり、中立外交政策への裏切りであるとしていた。一九五九年（昭和三十四年）はこの改定をめぐって国を二分する論議が展開された。岸政権は主要条項を維持しながら日本の立場を強化しようと、改訂の意向を強く表明していた。反対勢力は廃案を目指す世論の形成を組織的に展開していた。その中核は社会党、共産党、最大の労働組合である総評と戦闘的な左翼の学生組織である全学連であった。この勢力は大衆にアピールすることを計算したテーマで巧みに訴えた。

安保条約の改定案が国会に提出された五月までに社会党は徹底抗戦の行動に入っており、与党が多数を占める国会で議事の妨害をはかったが、これに失敗すると国会での実力行使に入った。マスコミや左翼の広報活動に啓発されて、条約は国を挙げての大問題となった。アメリカ上院は既に条約を承認し、岸はアイゼンハワー大統領を六月中旬に公式訪問として招いており、首相は

それまでには国会で批准されるものと期待していた。岸は野党との妥協は不可能との結論に達し、社会党がボイコットをしていた早朝に国会の抜き打ち審議を行い、与党議員が直ちに批准を承認した。

岸のこの行動に対して、国会内や社会党員ばかりか全国で怒りが爆発した。かつての吉田のように、しかももっとあからさまなやり方で岸は妥協と合意という神聖なる取り決めを破ってしまったのである。争点は、過半数の有権者が恐らく賛成したであろう条約のメリットそのものではなく、批准のされ方にあった。左翼勢力はこの絶好の機会をとらえて世論を激しくあおった。総評を中心に大規模なデモやストライキが打たれた。全学連も毎日国会の周辺で暴力的抵抗を行い警官隊と衝突した。六月に条約は自動的に発効したものの騒動は収まらず、岸の退陣とアイゼンハワー来日の中止を要求した。

ＭＲＡに関係していた国の指導者はこうした一連の動きを深く憂慮した。内外の政策については異なる見解を持っていたこの人々も、民主社会が危機にさらされ、日本と世界の民主主義諸国との関係が危うくなっているという認識では一致しており、それぞれの立場から行動を起こそうということになった。

まず、彼らが一緒に総理を訪ね、一行の考えを伝えて岸の真意を聞き出すとともに、彼の支援を取りつけようとした。

岸は断固とした姿勢を貫くと述べるとともに、「国を共産主義から救うためには自分はいかなる危険をも辞さない」と語った。彼の真剣さは尊重しながらも、日本の自由と安全を脅かしてい

る騒動に終止符を打つためにはさらなる努力が必要であると一行は岸に伝えた。「誰が正しいか」ではなく「何が正しいか」で対立の解決に当たるべきであると。そして彼らは行動に入った。

加藤シヅエは十五回以上テレビの全国放送に出演したのをはじめ、毎日、朝日、読売などの全国紙や地方紙の合計三千万人以上の読者に次のような声明を発表した。

共産中国やソ連の支援を受けた共産主義者は人民戦争を結成して政府を破壊しようとしています。しかも日本全体を反米闘争にかりたてて、日本をアメリカから孤立させようとしたのです。安保条約の是非や岸首相による強行採決の是非が最重要な問題ではありません。今根本的な問題は私たちにそして子供たちの時代に必要なイデオロギーは何かということです。MRAがそのイデオロギーです。社会党の一員として私は、ここ数週間自分が正しいと思ったことを述べずに臆病な態度を取ったことについて国民の皆さまに謝りたいと思います。数々の会合において間違った決定がなされた際にも私は発言をしなかったのです。これから私は真の民主主義を築くためにすべてを捧げて闘うことを誓います。

参議院全国区で最高点で当選していた有名な加藤シヅエのこの発言は国に衝撃を与えた。彼女のメッセージが現れるや否や、電話が鳴り響き、多くの手紙や電報が殺到した。それらのほとんどが国を心から憂うるもので、彼女の勇気に感謝を表すものであった。テレビやラジオ、雑誌でのインタビューも相次いだ。最大の日刊紙となっていた朝日新聞も第一面の論説での論調を変え

て、他の政治家も加藤シヅエに続くよう呼びかけた。

広い支援に応えて、加藤は第二の声明を発表したが、それはＵＰＩ通信を通してアメリカに伝えられた。

今日、日本では自分が何に反対するかは誰もが知っているようですが、今最も必要なことは私たちが一緒に何を目指しているかということです。全国のさまざまな立場の方々からの絶大な反響で私が感じることは、日本が暴力と唯物論的独裁に屈してはならないという私の信念を圧倒的に多数の国民が支持してくださっているということであります。腐敗されない指導者を通してのみ、国のあるべき権威と力とが築かれるのです。ＭＲＡの強さは、世界中で民主主義の生ぬるい信奉者を何が正しいかのために闘う闘士に変えることにあります。

六月二十七日付の月刊誌『ライフ』は、アイゼンハワー大統領が来日しても社会党や労働組合はそれを阻止しないと約束したと報じるとともに、民社党も岸の収拾案に同意したと述べた。さらに、「社会党を支配する日本最大の労働組合組織の総評内部でアイゼンハワーに対する羽田でのデモは中止しようとの声が起こっている」と報じた。

この決定的な動きの背後には全造船の委員長で中立労連の事務局長をしていた柳沢の必死の努力があった。彼はまず九十万人を擁する中立労連内部で基本的な問題を確認するよう働きかけ、その結果、中立労連は羽田での反米デモに参加せずアイゼンハワーを歓迎するという決議をした。

続いて彼は中立労連の組合幹部と一緒に三百五十万人のメンバーを擁し、マルクス主義の影響の強い総評の幹部と会い、総評は予定していたデモを中止した。

政界でも重要な動きがあった。騒乱が続いた最初の三週間は、左派グループとの対立から社会党とたもとを分かった民社党はその対応を決めかねていた。MRAとのかかわりも長い愛田新吉国会議員は、党の会議で次のように発言した。

「私たちは党内政治に左右されるのではなく、国の歩むべき道に則って動くべきである。わが党は恐れることなくアイゼンハワー大統領の歓迎に加わり、国を正常に導くべきである」

MRAと関係していた他の国会議員も彼を強く支持し、西尾委員長や他の幹部も、岸退陣や国会解散にこだわらずにアイゼンハワーの歓迎を正式に表明した。

日本新聞協会事務局長でMRAとも長い交流のあった江尻進は危機の真っ最中に主な全国紙と地方紙の編集長を集め、世論の混乱を助長し騒乱をあおった報道の責任を取るように訴えた。ラジオやテレビを通しての彼のニュース番組も争点をはっきりさせるのに役立った。この頃になって報道の論調も変わり、大衆デモを容認するのではなく批判的になってきた。

もう一つのMRAによる動きは日本青年団協議会に対してであった。これは各界の青年七百万人からなる日本国際青年協議会の中の最大組織である。マキノ島やコーの会議に参加した青年団の指導者は協議会としてマッカーサー将軍の甥のダグラス・マッカーサー大使に次のようなメッセージを送った。

「日本の大多数は日本の自由の推進に大きな力を貸してくださったアメリカに対する尊敬と感

謝を抱いてアメリカ大統領を歓迎いたします。共産中国やソビエト連邦から影響され、党派主義にかられたごく一部のグループは、こうした心情を無視して大統領の訪問を阻止しようとあらゆる手段を講じて活動しているのです。平和を愛する九千万人の日本国民は、このような少数の反抗的な政治家や扇動家によっては代表されるものでないことを強く表明するものです」

こうした強力な組織による暴力に対する非難や収拾を求めるアピールはたちまち効果を表した。全国の都市で企画されたデモも開催できずに終わった。長老の政治家一人が暗殺され、岸も暗殺未遂で傷を負ったが世論は無法状態に反対する流れに変わった。アイゼンハワーは危険を冒すべきではないというアドバイスに従い訪日しないことになったが、アメリカとの絆は維持された。強行戦術によって人気を失った岸は辞職したが、政権は池田勇人に受け継がれた。安保条約は維持され民主主義体制も生き残った。

一年後岸はスイスのコーを訪れ、国の難局に当たって果たしたMRAの役割に賛辞を述べた。彼は会議で次のように演説した。

「私は学生、労働組合、政治家の中にMRAの理念を信じ、何が正しいかのために毅然と妥協せずに闘った少数派の方々に深く勇気づけられました。こうした人々がもっと多くいたならば、あのような破壊的な活動は起こり得なかったと思われます」

さらにその一年後岸は再び、今度は日本国内のMRA会議（訳者注　神奈川県小田原市のMRAアジアセンターの開所式）で演説した。戦後のほかの総理三人――片山哲、吉田茂、池田勇人もアジアを中心とした十数人の大使と共に参加した。財界や労働界の指導者そして労働者

を含む千人以上が出席した。こうした人々の出席は、それまでの十年余りにわたって小数派の人々が推進した道徳的精神的哲学が幅広い層に認められたことの証しであった。この小人数の人々がその確信を実現すべく行った闘いが、その後に続く日本の偉業を築く固い基盤となったのである。

訳者あとがき

——日本のかじ取りへの指針——

「今、日本は多くの友人を急速に失っている」と、最近アジアの女性から指摘を受けた。実際〝顔のない異質な国〟としてのイメージは高まり、問題を輸出しては迷惑がられ、一部にはソ連よりも恐れられる存在となってしまった。しかもこの一人歩きをする日本丸を制止することを、日本自身が諦めてしまっているかに見える昨今である。放っておけば孤立して沈んでしまう船の中で、自分のやり方にこだわり、外圧だけにその調整を委ねようとする風潮である。さらにはその外圧に反発するナショナリズムが、ますます外国の神経を逆なでしている。

では、〝世界との共生〟にしか生き残る道のないこれからの日本が、一九五〇年代に日本丸のかじ取りをした人々から何を学ぶことができるだろうか。

まず第一に、本書の登場人物に共通してみられる謙虚さである。これは新しい考えを柔軟に受け入れ、自らの糧としていかすことができると同時に、他国の恐れを取り除き信頼を獲得できる大きな宝でもある。本書の舞台となった当時の方が今よりも真の友人に多く恵まれていたと感じるゆえんである。第二は、立場の異なる少数グループによる〝水ももらさぬ〟チームワークと連帯である。自らの立場を捨てて大きな目的に一緒に取り組む姿は、自分の都合や利権での動きが目立つ現在の政、財、官の在り方とは異なる。また外国の友人たちを仲間として受け入れ、〝内

輪の問題〟の解決に一緒に当たっている。つまりこれは外圧によらぬ自己改革の動きであり、変革は常に少数者が始めるという歴史の法則を実証している。

第三に、これらのことを可能にしたのは人種、階級、宗教、言語などの違いを超えた心の触れ合いである。文化的、社会的違いは古今東西存在するわけで、これ自体が〝異質論〟の原因ではない。異なる宗教や文化をつなぐ共通な心（モラル）のあり方と基準とを示したのがMRAの創始者フランク・ブックマン博士である。金とモノとを駆使してたやすく国境を越えた経済大国日本は今異なる文化と社会のハードルにつまずいているが、当時の日本人はブックマン博士の唱える共通の心（モラル）を基盤に国境を往来できたのである。

ブックマン博士は一八七八年アメリカに生まれた。神学を学んだあと一九二一年のワシントン軍縮会議を傍聴し、「いかに優れた平和計画も人の心を変えないかぎり無意味である。むしろかえって争いの種となる」と悟った。第二次大戦の風雲急をつげる一九三八年、軍備の再武装に狂奔する欧州各国の醜い姿をつぶさに見せつけられた彼は、軍備の再武装（Military Re-Armament）よりも道義と精神の再武装（Moral and Spiritual Re-Armament）こそが世界平和への道であり、それは世界的なスケールで進められなければならないとしてMRAを提唱した。

「世界を変えたいと思う人はたくさんいる。だがその多くは、自分勝手な方法でやろうとしている。事態を正しく判断している人はいるが、正しい解決方法を知らない。人の性質を変えることなしに世界を変えようとして混乱や、憎しみや、戦争を誘発する。また他の人が、また他の国が先に変わってくれるのを待っている。まず自分から、また自分の国から始めることである」

このブックマンの思想は、アジア以外でもさまざまな問題解決に向けて触媒の役割を果たしている――戦後の独仏の和解とEUの基礎作り。黒人、白人各派の和解によるジンバブエの無血独立。サハロフ博士のノーベル賞受賞やソルジェニーツィンの国外脱出への支援。レバノンのイスラム教徒とキリスト教徒の対話の仲介など――今でも毎夏スイスのコーのMRA世界大会には数十か国二千名程の人々が集まり、平和を築くための具体的活動が続けられている。

本書はバズル・エントウィッスルのJapan's Decisive Decade : How a determined minority changed the nation's course in the 1950s（Grosvenor Books, London）の翻訳である。一九八五年に出版された原書が五年後の一九九〇年に日本の読者にあらわれることには大きな意味がある。なぜならこの五年の間に、「プラザ合意」や東欧の激動など世界の政治経済秩序が大きな変化を遂げるとともに、冒頭で述べたような日本の孤立化への徴候が顕著になったからである。その意味で本書が、世界に貢献する日本丸のかじ取りを担うさまざまな日本人の指針となれば幸いである。

こうした時期に本書の出版を快諾してくださったジャパンタイムズの小笠原敏晶会長と石田政之出版部長、さまざまなご協力をいただいた相馬雪香、米沢慧、斎藤博子、杉裕雄、小門八重子、藤田玲子の各氏に、心から感謝を申し上げたい。

翻訳に際しては正確を期したつもりだが、四十年前の事項を英語から日本語へ逆転換した訳で、人名や肩書、団体名の表記などに誤りがあるかもしれない。それらも含め読者のご教示をお願いするしだいである。

藤田幸久（一九九〇年三月）

戦後史関連年表（1945-1960）

年	日本事項（MRA関連事項）	外国事項
一九四五（昭和20年）	3 東京大空襲 8 広島（6日）・長崎（9日）に原爆投下 日本無条件降伏（15日）。第二次世界大戦終わる 11 連合国軍総司令部（GHQ）、財閥解体を指令 農地調整法改正公布 12 労働組合法公布	2 米英ソ、ヤルタ会談 10 国際連合成立 11 ニュルンベルク国際軍事裁判開廷 12 フレミング（ペニシリンの発見）ノーベル医学・生理学賞 ※アメリカ電子計算機完成 ※ユネスコ創立
一九四六（昭和21年）	1 天皇人間宣言 4 第22回衆議院総選挙。女性三九人当選 5 第一次吉田内閣成立 8 日本労働組合総同盟結成　経済団体連合会創立 11 日本国憲法公布（3日） ※生活保護法・民生委員令施行	7 アメリカ、ビキニ環礁で原爆実験 中国全面内戦へ 10 ニュルンベルク国際軍事裁判判決 12 インドシナ戦争はじまる
一九四七（昭和22年）	2 参議院選挙法公布 3 教育基本法・学校教育法公布 4 労働基準法公布 第一回参議院選挙 6 片山内閣成立 ※流行語・斜陽族、アプレゲール	6 マーシャル・プラン（欧州経済復興計画）発表 8 インド独立 10 エリザベス女王結婚

一九四八（昭和23年）	1 帝銀事件 3 芦田内閣成立 4 新制高校発足 10 第二次吉田内閣成立 12 GHQ、A級戦犯容疑者岸信介ら一九人の釈放を発表 **（戦後初めて渡航を許された日本人九名がロサンゼルスMRA世界大会に出席）**	4 国連世界保健機関（WHO）発足	
一九四九（昭和24年）	2 第三次吉田内閣成立 6 日本国有鉄道、日本専売公社発足 7 下山事件（5日）、三鷹事件（15日）、松川事件（8月） 11 湯川秀樹ノーベル物理学賞 ※ベストセラー『きけわだつみのこえ』 **（片山哲元首相夫妻が、日本人として戦後初めてスイスのMRA世界大会に出席）**	4 北大西洋条約機構（NATO）創設 ドイツ連邦共和国成立 10 中華人民共和国成立 10 ドイツ民主共和国（東ドイツ）成立	5 イスラエル（ユダヤ国家）誕生 8 大韓民国樹立 9 朝鮮人民共和国樹立 12 国連、世界人権宣言
一九五〇（昭和25年）	4 公職選挙法公布 6 GHQ、共産党幹部の公職追放を指令 **（戦後初めて渡航を許された大型使節七二名がスイスのMRA世界大会に出席し、後に欧米諸国を歴訪。二人の国会議員がアメリカ議会で戦争中の日本による過ちを謝罪）**	2 アメリカ、マッカーシー旋風 6 朝鮮戦争はじまる	
一九五一（昭和26年）	1 NHK第一回紅白歌合戦放送 6 日本、ユネスコ加盟 10 社会党、左派右派に分裂 ※結核が初めて死因第二位に、一位は脳出血	2 世界平和評議会第一回総会（ベルリン・アピール） 3 第一回アジア競技大会（ニューデリー）日本参加	

		※パチンコ大流行 （サンフランシスコ講和条約調印前に、ＭＲＡが日本代表団と講和条約反対が多数を占める各国代表との調停活動を行い、講和条約調印への環境づくりを行う）	
一九五二（昭和27年）	4	対日講和条約・日米安保条約発効。ＧＨＱの廃止（28日）	1 国連軍縮委員会設置 韓国、李承晩ラインを設定
	5	第二三回メーデー（血のメーデー事件）	7 第一五回オリンピック大会（ヘルシンキ）日本戦後初参加
	7	破防法公布施行	
	10	第四次吉田内閣成立 ※流行語・赤線青線、ワンマン、忘却とは忘れ去ることなり （ＭＲＡ活動の拠点となるＭＲＡハウスが東京都港区に誕生）	11 アイゼンハワー、アメリカ大統領に当選
一九五三（昭和28年）	3	中国引揚第一船、舞鶴入港	1 ユーゴスラビア初代大統領にチトー就任
	4	保安大学校開校（のち防衛大学） 日本婦人団体連合会設立	3 ソ連邦首相スターリン死去
	12	奄美群島返還協定調印 ※街頭、店頭テレビ人気 （国鉄、東芝、小野田セメント、神戸製鋼の労使関係担当の役員、東芝と日立の労働組合委員長がスイスのＭＲＡ世界大会に出席。産業界全体の労使協調路線への転換の契機となる）	7 朝鮮休戦協定調印 8 ソ連、初の水爆実験 9 フルシチョフ、ソ連共産党第一書記に就任
一九五四（昭和29年）	1	日本航空の東京―サンフランシスコ線認可	9 東南アジア条約機構（ＳＥＡＴＯ）創設
	2	自由党副幹事長有田二郎逮捕（造船疑獄）	

	3	MSA日米相互防衛援助協定調印
	9	ビキニ被爆で第五福龍丸久保山愛吉死去
	12	吉田内閣総辞職。鳩山一郎内閣成立（10日）
		※ヘップバーンスタイル流行、プロレス人気
一九五五（昭和30年）	1	第一回春闘
	2	日本生産性本部設立
	7	自動車損害賠償保障法公布
	8	トランジスタラジオ発売（ソニー）
	10	社会党統一大会
	11	自由民主党結成
		※輸出船ブーム（神武景気）
		（MRAのミュージカル劇『消えゆく島』が来日。NHKがその一部を全国放送）
		（MRA劇『ボス』が首相官邸で上演）
一九五六（昭和31年）	5	水俣病の発見
		売春防止法公布
	7	経済企画庁、経済白書を発表（もはや戦後ではない）
	10	日ソ国交回復の共同宣言
	12	国連総会、日本の国連加盟を可決
		鳩山内閣総辞職、石橋内閣成立
		（MRA創始者ブックマン博士来日。鳩山一郎首相と会見。日本政府は博士の日本への貢献を賞し、勲二等旭日章を贈る）
		中華人民共和国憲法採択。国家主席に毛沢東、首相に周恩来
	1	世界平和会議、ウィーンアピール
	4	第一回アジア・アフリカ会議、バンドンで開催
	5	ソ連、東欧八か国ワルシャワ条約調印
	8	第一回原水爆禁止世界大会（広島アピール）
	11	アルジェリア解放闘争はじまる
	2	フルシチョフ、スターリン批判
	5	アメリカ、最大規模の水爆実験
	6	英軍、スエズ運河基地撤退。イギリスの支配おわる
	10	ハンガリー動乱はじまる
		スエズ戦争はじまる

一九五七（昭和32年）	2	岸信介内閣成立（25日）	
	7	日中国交回復国民会議結成	
	12	百円硬貨発行	
		日教組、勤務評定闘争を強化	
		※洗濯機一〇世帯に一台、ポータブルラジオ三〇世帯に一台普及	
		（第一回MRAバギオ会議がフィリピンのバギオで開催。戦後初めて日本と韓国の国会議員が同席）	
		（久保田発言や財産請求権問題で日韓関係が険悪化したが、日韓のMRA関係国会議員の連携により、岸首相が久保田発言などを取り消し、日韓関係正常化交渉再開への道を開く）	
		（岸首相は首相就任後、訪米前後に東南アジアを歴訪。加藤シヅエ議員などの提案もあり、訪問先の国々で戦争中の日本の行動などを謝罪、アジアとの和解に貢献）	
		（日本青年団約百名がアメリカ・マキノ島のMRA国際会議に出席）	
一九五八（昭和33年）	1	日本、インドネシアと平和条約、賠償協定調印	5 イギリス、水爆実験
		東京通信工業（現ソニー）で研究中の江崎玲於奈、エサキダイオードを発明	8 ソ連、大陸間弾道弾（ICBM）の実験成功を発表
	5	第三回アジア競技大会開幕（東京）	10 ソ連、人工衛星スプートニク一号打ち上げ
	11	皇太子明仁と正田美智子の婚約発表	
	12	一万円札発行。東京タワー完工式	
			1 アメリカ、人工衛星エクスプローラ打ち上げ
			2 アラブ連合共和国成立
			10 フランス新憲法公布

	※即席ラーメン発売 ※映画の入場者ピーク（一一億二七四五万人） （日本青年団による劇『明日への道』に住友家当主や労働組合幹部なども出演し、全国各地の企業、工場、公民館などで上演） （第二回ＭＲＡバギオ会議がフィリピンのバギオで開催。韓国やフィリピンとの外交交渉打開に貢献）	1 メートル法実施 3 日米安保条約改定阻止国民会議結成 4 皇太子御成婚。国民年金法公布 12 個人タクシー営業認可	1 キューバ革命 3 チベットのダライ・ラマがインドに亡命 9 ソ連の月ロケット「ルナ2号」が月面に到達
一九五九（昭和34年）			
一九六〇（昭和35年）	1 日米新安保条約調印 民主社会党結成 6 全学連主流派国会突入、東大生樺美智子死亡 7 岸内閣総辞職（15日）。池田勇人内閣成立（19日） 10 浅沼稲次郎社会党委員長、右翼少年に刺殺 12 閣議、国民所得倍増計画 ※ダッコちゃんブーム （安保条約改定を巡り、国内対立が激化。ＭＲＡ関係の国会議員や労組幹部が、国会へのデモ突入の回避に動き、国家分断の危機回避に貢献）	2 フランス、水爆実験 7 セイロン（現スリランカ）に世界初の女性首相誕生（バンダラナイケ） 11 ケネディ、アメリカ大統領に当選 12 アフリカ独立ラッシュ、国連総会でＡＡ四三か国提出の植民地独立宣言採択	

※「日本事項」「外国事項」の冒頭の数字は月を表す。

藤田幸久（ふじた・ゆきひさ）

1950年茨城県生まれ。慶応大学文学部哲学科卒。75年～77年MRA親善使節「Song of Asia」でアジアの青年約50人と世界14か国を訪問。国際MRA日本協会専務理事、コー日米欧経済人円卓会議コーディネーター、難民を助ける会常務理事を歴任。96年～衆議院議員二期（東京都）。対人地雷禁止条約を主導。07年～参議院議員二期（茨城県）。スマトラ沖津波やハイチ大地震などの現地で援助活動。参議院財政金融委員長・国家基本政策委員長・拉致問題特別委員長。財務副大臣。民主党国際局長。聖学院大学非常勤講師、横浜国立大学非常勤講師、岐阜女子大学特別客員教授を歴任。現在、民進党国際局長。著書に『政治家になりたくなかった政治家』（ジャパンタイムズ）、訳書に『ソ連の反体制派たち』（サイマル出版会）などがある。

日本の進路を決めた10年　増補改訂版
～国境を超えた平和への架け橋～

2016年10月5日　初版発行

著　　者　バズル・エントウィッスル

©Basil Entwistle, 1985

訳　　者　藤田　幸久

©The Japan Times, Ltd., 2016

発 行 者　堤　丈晴
発 行 所　株式会社　ジャパンタイムズ
〒108-0023 東京都港区芝浦4丁目5番4号
電話（03）3453-2013（出版営業部）
振替口座 00190-6-64848
ウェブサイト http://bookclub.japantimes.co.jp/
印 刷 所　日経印刷株式会社

本書の内容に関するお問い合わせは、上記ウェブサイトまたは郵便でお受けいたします。定価はカバーに表示してあります。
万一、乱丁落丁のある場合は、送料当社負担でお取り替えいたします。ジャパンタイムズ出版営業部あてにお送りください。
Printed in Japan　ISBN 978-4-7890-1651-3

著者バズル・エントウィッスル（一九一一年～二〇〇七年）はオックスフォード大学で哲学、政治学、経済学を専攻し首席で卒業。一旦教職に就くが、のちにＭＲＡ（Moral Re-Armament 道徳再武装）運動に加わりヨーロッパ、アジア、北アメリカで活動し、やがて日本の指導者の招きによって一九五〇年（昭和二十五年）に来日。以来、妻と二人の子供と共に八年間を日本で過ごした。

第二次世界大戦中、著者はアメリカ空軍ヨーロッパ本部で活躍し、空軍の三つの広報誌の編集を担当した。一九六〇年（昭和三十五年）代に再び教職に戻った彼はアメリカ、ミシガン州にＭＲＡのマキノカレッジを創立し初代理事長となった。

9784789016513

1920021014000

ISBN978-4-7890-1651-3
C0021 ¥1400E

定価：本体1400円（税別）

The Japan Times

著者パズル・エントウィッスル一家と加藤シヅエ議員